

西久保 I 遺跡(2) 西久保 V 遺跡

ハッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第65集

2019

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

西久保 I 遺跡(2) 西久保 V 遺跡

ハッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第65集

2019

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

ハッ場ダムは、首都圏の利水、治水および発電を行う多目的ダムとして計画され、吾妻川中流にある長野原町を中心に関連の工事が進められております。ダム建設に伴う発掘調査は平成6年度より開始され、四半世紀を迎えようとしております。この間、様々な遺跡が発掘調査され、当地域の歴史が徐々に明らかになってきています。

本書は、平成28年度と平成29年度に発掘調査された、西久保Ⅰ遺跡と西久保Ⅴ遺跡の発掘調査報告書です。

西久保Ⅰ遺跡は、かつて平成10年度と12年度に発掘調査が行われ、縄文時代中期集落などが見つかっております。今回報告する地点は、平成29年度に調査が行われ、吾妻川沿いに残された地点でした。

西久保Ⅴ遺跡は、平成26年度の試掘調査によって、新たに周知された遺跡です。発掘調査は2年次にわたって行われました。縄文時代～弥生時代の遺物集中分布や土坑、天明泥流下の水田などが調査されております。とりわけ、遺物集中分布より出土した東北系の土器である大洞BC式土器は当地域での出土は珍しく、当時の広域ネットワークを物語る良好な資料として位置付けられるでしょう。

両遺跡とも小規模な遺跡ですが、長野原町を中心とした地域の歴史を考える上でも、重要な資料になるものと考えております。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省ハッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者の皆様には、多大なるご尽力を賜りました。本報告を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

平成31年2月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野三智男

例 言

1 本書はハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成29年度に実施された「西久保Ⅰ遺跡」と平成28年度と平成29年度に実施された「西久保Ⅴ遺跡」の埋蔵文化財調査報告書である。

2 遺跡の所在地

西久保Ⅰ遺跡：群馬県吾妻郡長野原町大字横壁123-1・124-1・125～127・128-1・134-1・135-1・136

西久保Ⅴ遺跡：群馬県吾妻郡長野原町大字横壁77-1・78-5・96-7・96-8・96-15・96-22・96-25・99-3・100～102・107-1～5・108-1・108-2

3 事業主体 国土交通省関東地方整備局

4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

5 各遺跡の発掘調査期間と調査面積、調査体制

西久保Ⅰ遺跡

発掘調査期間 平成29年6月1日～6月30日

発掘調査面積 2,254㎡

発掘調査担当者 都木直人(主任調査研究員)、千明 隼(調査研究員)

遺跡掘削工事 シン技術・毛野・山下吾妻地区埋蔵文化財遺跡掘削工事経常共同企業体

地上測量委託 株式会社 測研

西久保Ⅴ遺跡

発掘調査期間 平成28年10月1日～10月31日／平成29年10月1日～11月30日

発掘調査面積 平成28年度2,649㎡／平成29年度4,096㎡

発掘調査担当者 平成28年度 笹澤泰史(主任調査研究員) 武井 学(調査研究員)

平成29年度 佐藤賢一(主任調査研究員) 千明 隼(調査研究員)

遺跡掘削工事 平成28年度 シン技術・毛野・山下吾妻地区埋蔵文化財遺跡掘削工事経常共同企業体

平成29年度 シン技術・毛野・山下吾妻地区埋蔵文化財遺跡掘削工事経常共同企業体

地上測量委託 株式会社 測研

6 整理等作業の期間と担当者

西久保Ⅰ遺跡

整理期間 平成30年4月1日～平成30年5月31日

整理担当者 中沢 悟(専門調査役)

西久保Ⅴ遺跡

整理期間 平成30年8月1日～平成30年12月31日

整理担当者 山口逸弘(専門調査役)

7 本報告書編集、執筆等担当者

編集担当 中沢 悟 山口逸弘

本文執筆 第Ⅰ章 調査に至る経過と周辺の環境 山口逸弘

第Ⅱ章 西久保Ⅰ遺跡 中沢 悟



第Ⅲ章 西久保Ⅴ遺跡 山口逸弘(第1～4節・第6節)・古環境研究所(第5節)

遺物写真・観察表 石器・石製品：津島秀章(資料2課長・総括)

	縄文土器・弥生土器：石坂 茂(専門調査役)
	陶磁器：大西雅広(専門調査役)、
	金属器：板垣泰之(専門員)
遺構写真撮影	各遺跡発掘調査担当者
デジタル編集	齊田智彦(主任調査研究員・資料総括)
保存処理	板垣泰之(専門員)、関 邦一(専門調査役)
石材同定	飯島静男(群馬地質研究会)

- 8 出土遺物及び記録図・写真などの記録類は、すべて群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 9 発掘調査および本書作成には、次の関係機関、諸氏にご協力、ご助言をいただいた。記して感謝いたします。
国土交通省関東地方整備局ハツ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、長野原町教育委員会、東吾妻町教育委員会

凡 例

- 1 本書で使用した座標値及び方位は、日本測地系による。方位は座標北で示した。
西久保Ⅰ遺跡の調査区座標値はX=60420～60508、Y=-104552～-104604の範囲である。
西久保Ⅱ遺跡の調査区座標値はX=60548～60572、Y=-104628～-104716 / X=60676～60720、Y=-104820～-104888の範囲である。
- 2 等高線・遺構断面図等に記した数値は海拔標高を示す。
- 3 全体図、遺構図、遺物図は各挿図中にスケールを貼付したが、西久保Ⅰ遺跡は下記の縮尺を原則とした。また、西久保Ⅰ遺跡の遺物写真の縮尺は等倍である。
遺構図：全体図1/1500、1/800、1/400、トレンチ1/80
- 4 西久保Ⅰ遺跡挿図に使用したスクリーントーンは次の事を示す。
 発掘調査・試掘調査範囲  断面図攪乱層
 西久保Ⅱ遺跡は各挿図に示した。
- 5 遺構平面図中の遺物記号は次のことを示す。
 西久保Ⅰ遺跡 ● 土師器 ○ 陶磁器
 西久保Ⅱ遺跡 ● 土器 ○ 石器
- 6 本文中の浅間A軽石(As-A)とは、天明3年(1783)の浅間山噴出軽石の略である。天明泥流とは、天明3年新暦8月5日の浅間山噴火に伴う泥流堆積物の略称である。
- 7 本書で使用した地形図は以下の通りである。
 国土地理院5万分の1地形図「草津」、国土地理院2万5千分の1地形図「長野原」、長野原町都市計画図「21」

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	挿図目次 表目次 写真図版目次
第1章 調査に至る経過と周辺の環境	第4節 検出された遺構と遺物……………22
第1節 調査に至る経過……………1	1 概要……………22
第2節 ハツ場ダム調査地域の調査方法……………2	2 第1面目(天明泥流下)の調査……………22
第3節 立地と環境……………4	(1) 平成28年度の調査
第2章 西久保1遺跡	(2) 平成29年度の調査
第1節 調査経過と調査概要……………11	3 第2面目の調査……………27
1 調査の経過……………11	(1) 平成28年度の調査
2 調査方法……………11	(2) 平成29年度の調査
3 調査結果……………11	第5節 分析……………38
4 天明泥流の有無……………12	第6節 総括……………43
5 整理事業の経過……………12	1 天明泥流下の水田跡について……………43
第3章 西久保V遺跡	2 縄文時代晩期土器について……………48
第1節 調査経過と調査概要……………18	遺物観察表……………52
第2節 整理事業の経過……………19	写真図版・報告書抄録
第3節 調査方法……………19	

挿図目次

第1図 西久保1遺跡(1)・西久保V遺跡(2)位置図	1	第16図 A区各トレンチ断面図	26
第2図 調査区の設定	2	第17図 第1面出土遺物	26
第3図 周辺の遺跡及び段丘面	5	第18図 I・II区第2面全体図	28
第4図 西久保地区の周辺遺跡	7	第19図 I区第2面トレンチ配置図及びトレンチ上層図	29
第5図 西久保1遺跡 発掘調査・試掘調査範囲全体図	13	第20図 II区第2面遺物集中分布及びトレンチ配置・上層図	30
第6図 西久保1遺跡発掘調査範囲全体図	14	第21図 II区第2面 57区遺物集中分布	31
第7図 西久保1遺跡平成29年度調査範囲全体図	15	第22図 II区第2面 57区遺物集中分布出土遺物(1)	32
第8図 A・F・H・Kトレンチ	16	第23図 II区第2面 57区遺物集中分布出土遺物(2)	33
第9図 Bトレンチ	17	第24図 II区第2面 57区遺物集中分布出土遺物(3)	34
第10図 西久保V遺跡I・II区(平成28年度調査)及びA区(平成29年度調査)	18	第25図 A区第2面全体図30	
第11図 平成28年度調査区(I・II区)第1面(天明泥流下)全体図	20	第26図 A区第2面トレンチ平面図、上層図及び69区1号土坑	37
第12図 I区第1面(天明泥流下)全体図	21	第27図 西久保V遺跡の植物珪酸体分析結果	40
第13図 I区第1面(天明泥流下)水田離定箇所上層図	22	第28図 横壁中村遺跡29区出土の大洞式土器	49
第14図 II区第1面全体図及び断面図	23		
第15図 A区第1面全体図	25		

表 目 次

第1表 ハツ場ダム建設に伴う発掘調査遺跡略号	3	第9表 下田遺跡の植物珪酸体分析結果	45
第2表 周辺の主な遺跡一覧	8	第10-1表 下原遺跡の炭物珪酸体分析結果	46
第3表 西久保V遺跡未掘調査遺跡一覧	35	第10-2表 下原遺跡の植物珪酸体分析結果	46
第4表 西久保V遺跡の植物珪酸体分析結果	40	第11表 上郷原遺跡の植物珪酸体分析結果	47
第5-1表 長野原久々戸遺跡の植物珪酸体分析結果	43	第12表 西久保V遺跡 縄文土器の胎土分類	51
第5-2表 久々戸遺跡の植物珪酸体分析結果	44	第13表 遺物観察表(中世～近世)	52
第6表 横壁中村遺跡の植物珪酸体分析結果	44	第14表 57区遺物集中範囲出土遺物観察表(縄文～弥生時代)	52
第7表 尾坂遺跡の植物珪酸体分析結果	44		
第8表 中権II遺跡の植物珪酸体分析結果	45		

写真図版目次

Pl. 1	1 遺跡遠景 (横壁小倉地区 平成11年頃撮影)	3 A区1面全景 南から
	2 西久保V遺跡遠景	4 A区1面全景 南から
Pl. 2	1 西久保I遺跡平成29年度調査範囲全景	5 A区1面遺物出土状況 北から
	2 遺跡円形とA・B・Cトレンチ、写真上部の大きな楕円は不動大橋	6 調査風景 A区1面 南から
		7 調査風景 A区1面 西から
Pl. 3	3 A-Fトレンチ予定地の舗装道路撤去前(北東から)	8 調査風景 A区1面 西から
	4 A-Fトレンチ予定地の舗装道路撤去後(北西から)	PL.11 1 II区2面57区遺物集中分布 東から
		2 II区2面57区遺物集中分布 東から
	5 C-Eトレンチ(南から)	3 II区2面57区遺物集中分布 西から
	6 Aトレンチ(北西から)	4 II区2面57区遺物集中分布 東から
	7 Aトレンチ(南西から)	5 II区2面57区遺物集中分布 東から
	8 Bトレンチ(北西から)	6 II区2面57区遺物集中分布 東から
	9 Bトレンチ(北西から)	7 II区2面57区遺物集中分布 南から
	10 Bトレンチ上層断面(南西から)	8 II区2面57区遺物集中分布 南から
Pl. 4	11 Bトレンチ出土土師器破片No.1	PL.12 1 II区2面57区遺物集中分布 南から
	12 Bトレンチ出土陶器破片No.2	2 II区2面57区遺物集中分布 南から
	13 Bトレンチ出土陶器破片No.3	3 II区2面57区遺物集中分布 南から
	14 Cトレンチ 中央にコンクリート板(南西から)	4 II区2面57区遺物集中分布 南から
	15 Cトレンチ 中央にコンクリート板(南東から)	5 II区2面57区遺物集中分布 南から
	16 Dトレンチ(南から)	6 II区2面全景 南から
	17 Dトレンチ(西から)	7 II区2面全景 南西から
	18 Eトレンチ(北から)	8 II区2面全景 南から
Pl. 5	19 Eトレンチ(西から)	PL.13 1 調査風景 II区2面 南東から
	20 Eトレンチ(西から)	2 調査風景 II区2面 東から
	21 Fトレンチ(南西から)	3 調査風景 II区2面 東から
	22 Fトレンチ(西から)	4 調査風景 II区2面 南から
	23 Gトレンチ(東から)	5 調査風景 II区2面 南から
	24 Gトレンチ(北から)	6 調査風景 II区2面 南から
	25 Hトレンチ(西から)	7 調査風景 II区2面 南から
	26 Hトレンチ(南西から)	8 調査風景 II区2面 南から
Pl. 6	27 Hトレンチ(南西から)	PL.14 1 A区1号トレンチ全景 南西から
	28 Iトレンチ(南西から)	2 A区1号トレンチ近景 南西から
	29 Iトレンチ(南から)	3 A区2号トレンチ 北から
	30 Iトレンチ(南西から)	4 A区3号トレンチ 南から
	31 Jトレンチ(南西から)	5 A区3号トレンチ上層 北から
	32 Jトレンチ (南から)	6 A区4号トレンチ 東から
	33 Kトレンチ(南西から)	7 A区5号トレンチ 北から
	34 Kトレンチ(南西から)	8 A区6号トレンチ 北から
Pl. 7	1 I区1面全景 南から	PL.15 1 A区7号トレンチ 東から
	2 I区1面全景 南から	2 A区7号トレンチ上層 東から
	3 I区1面全景 北西から	3 A区8号トレンチ 東から
	4 I区1面全景 北東から	4 A区8号トレンチ上層 北から
	5 I区川砂が堆積する溝状の凹み 東から	5 A区7・8号トレンチ 東から
	6 I区西壁上層 東から (水田面上層)	6 調査風景 A区7号トレンチ 東から
	7 I区西壁上層 東から (水田面上層)	7 A区 69区1号土坑セクション 南東から
	8 I区西壁上層 東から (水田面上層)	8 A区 69区1号土坑全景 南東から
Pl. 8	1 II区1面全景 西から	PL.16 1 調査風景 A区 西から
	2 II区1面全景 北から	2 調査風景 A区 東から
	3 II区1面全景 南東から	3 調査風景 A区 南から
	4 II区1面全景 北東から	4 調査風景 A区 南東から
	5 II区全景 東から	5 I区より吾妻川下流を臨む 西から
	6 II区全景 東から	PL.17 第1面出土遺物
	7 II区全景 東から	II区第2面 57区遺物集中分布出土遺物(1)
	8 II区全景 南東から	PL.18 II区第2面 57区遺物集中分布出土遺物(2)
Pl. 9	1 調査風景 1区1面 西から	PL.19 II区第2面 57区遺物集中分布出土遺物(3)
	2 調査風景 1区1面 東から	
	3 調査風景 1区1面 東から	
	4 調査風景 1区1面 南から	
	5 調査風景 1区1面 南から	
	6 調査風景 1区1面 南西から	
	7 調査風景 1区西壁植物珪酸体分析試料採取	
	8 I区西壁植物珪酸体分析試料採取状況 北東から	
Pl.10	1 A区1面全景 東から	
	2 A区1面全景 南から	

第1章 調査に至る経過と周辺環境

第1節 調査に至る経過

西久保1遺跡と西久保V遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字横壁に所在し、ハッ場ダム建設に伴って発掘調査された遺跡である(第1図)。

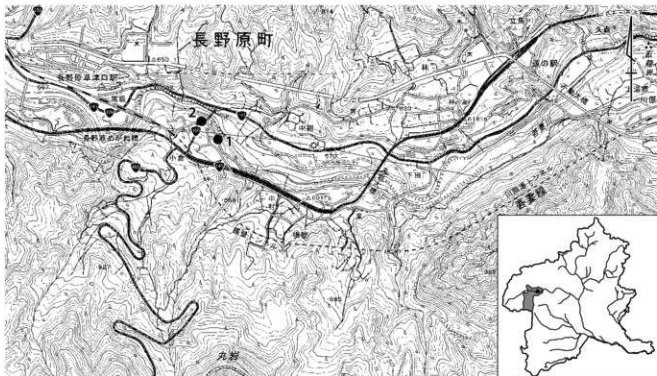
ハッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局(現国土交通省関東地方整備局)と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会(現東吾妻町教育委員会)が協議し、平成6年3月18日「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定書」を建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会の両者で締結し、発掘調査事業の実施計画が決定された。調査組織等の役割は、調査実施機関は群馬県教育委員会、調査機関は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団とした。

同年4月1日、関東地方建設局長と群馬県教育委員会との間で発掘調査受託契約を締結し、同日同教育長と群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の両者で発掘調査委託契約が締結され、発掘調査が開始された。

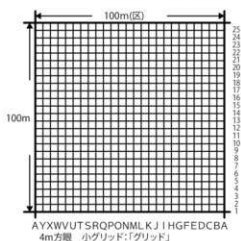
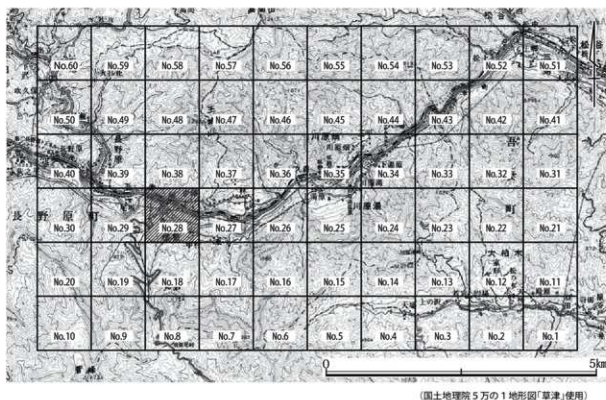
さらに、平成11年4月1日に関東地方建設局長と群馬

県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書」を締結し、平成11年4月1日以降は調査実施機関を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に変更している。以後、平成17年、平成20年、平成28年、平成29年と5回にわたる協定変更を重ね、現在に至っている。

また、水没地区が対象となった平成26年度以降の発掘調査において、調査面積の確定を図り、対象地域全域を県教委が試掘調査を行った。西久保V遺跡の調査についても、平成26年度の試掘調査で新たに周知された遺跡であり、範囲内の2箇所について、浅間A軽石が残存しており、かつ縄文土器の出土も見られたことから、本調査が必要と判断された。この結果を受け、平成28年3月に締結した、第4回の協定書により、遺跡名と調査範囲が確定している。西久保1遺跡については、遺跡範囲のうち吾妻川沿いの一部が河川氾濫により崩落し、崩落防止の工事が施されたのち、平成27年度に発掘調査が行われた経緯がある。



第1図 西久保1遺跡(1)・西久保V遺跡(2)位置図(国土地理院2万5千分の1地形図「長野原」使用)



第2図 調査区の設定

第2節 ハッ場ダム調査地域の調査方法

1 調査区の設定(第2図)

ハッ場ダム対象地域の発掘調査に際して、調査区の設定については、平成6(1994)年度から始まったハッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査における「ハッ場ダム関係埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき、その方法に準拠するように踏襲してきた。この方法については、

事業団報告書第287集「長野原一本松遺跡(1)」(群理文2002)に詳しいので、詳細はそちらを参照していただきたい。ここでは概略を記す。

調査区については、ハッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財調査地内を国家座標(2002年4月改正以前の日本測地系)で使用し、吾妻郡吾妻町(現東吾妻町)大柏木の東部付近を基点(X=58000.00, Y=-97000.00)とした。そして、まずこの基点から1km四方の「地区」(大グリッド)を西に10区画、北に6区画の60地区を設定した。次に各地区を100m四方の「区」(中グリッド)に区分し、東

南隅から西に1～10区、次の列を11～20区のように100区に区分した。さらに、各区を4m四方のグリッドに細分した。グリッドは東南を基点に西へA～Y、北へ1～25までの番号を付し、組み合わせてグリッド名としている(例20区A-1グリッド)。

西久保1遺跡及び西久保Vの調査区は「地区」では「28地区」に相当し、「区」では、西久保1遺跡では「46・47・56・57区」、西久保V遺跡は「57・58・67～69・79区」にあたる。

遺構名称は区毎に連続する番号を付し、区を跨ぐ遺構の場合は遺構の主体となる区の番号を優先した。

しかしながら、平成20年度あたりから、各遺跡の工事工程との兼ね合いがあり、「工事区」の名称と調査対象地を単純に地割りした「調査区」が併存するようになった。従来のハッ場ダム地域の発掘調査グリッド調査区は、平面図上の表記に止まり、報告書記載においても、「工事区」や「調査区」に沿った遺構・遺物の記述が行われている。また遺構名称や番号にしても、「区」毎の番号ではなく、遺跡内通番の番号に変更している。

このように、遺跡によって、報告書巻次によって、調査区名称や遺構番号の記述に差が見られている。混乱のないようにしていただきたい。

2 遺跡名称の略号(遺跡番号)

当地域のハッ場ダム関連発掘調査に係り、遺跡名称を記号略称で記している。これは、出土遺物の注記に主に活用されており、大量の遺物注記作業に効力を発揮してきた。

ハッ場ダムの略称としてYD、長野原町の大字5地区にたいして川原細地区=1、川原湯地区=2、横壁地区=3、林地地区=4、長野原地区=5、東吾妻町の大字である三島地区=6、大柏木地区=7、松谷地区=8、岩下地区=9と区分し、さらに各地区に所在する遺跡の調査順に番号を付すこととした(第1表)。したがって、西久保1遺跡はYD3-02、西久保V遺跡は新たに加わった遺跡のため、YD3-06となる。ただ、最近では、注記作業も機械化が進み、遺跡名を漢字のまま注記する例も増えてきているため、西久保V遺跡に関しても、出土遺物は大量ではないため、遺物注記は略号ではなく遺跡名を記した。

第1表 ハッ場ダム建設に伴う発掘調査遺跡略

所在大字	YD番号	遺跡名	調査年度	
川原細	YD1 01	—		
	YD1 02	東宮	9・19～21・26～29	
	YD1 03	石畑	10・29	
	YD1 04	三平Ⅰ	16・17・24・25	
	YD1 05	二社平	10・29	
	YD1 06	三平Ⅱ	16	
	YD1 07	上ノ平Ⅰ	18・19・28	
	YD1 08	西宮	20・26～29	
	YD1 09	西宮Y跡	26	
	YD1	三ツ堂宮跡	28	
川原湯	YD1	川原細の宝蔵印塔	29	
	YD1	石畑Ⅰ岩跡	29	
	YD2 01	川原湯勝沼	9・15・16・28	
	YD2 02	西ノ上	14・27～29	
	YD2 03	石川原	20・26～29	
	YD2 04	下湯原	27～29	
横壁	YD2	川原湯中原Ⅲ	28	
	YD2	前原	29	
	YD3 01	横壁勝沼	6	
	YD3 02	西久保Ⅰ	6・10・12・29	
	YD3 03	横壁中村	8～18	
	YD3 04	山根Ⅲ	10・13・18	
	YD3 05	西久保Ⅳ	21・23	
	YD3	西久保Ⅴ	28・29	
	YD4 01	下田	7・25・26・28・29	
	YD4 02	—		
林	YD4 03	上原Ⅰ	24	
	YD4 04	—		
	YD4 05	花畑	10～12	
	YD4 06	榎木Ⅲ	10	
	YD4 07	中瀬Ⅱ	11～13・16・17・28・29	
	YD4 08	下原	12・13・15・16・29	
	YD4 09	榎木Ⅱ	11～13・16・17	
	YD4 10	二反沢	12	
	YD4 11	立馬Ⅰ	13・14・17	
	YD4 12	立馬Ⅱ	14	
	YD4 13	上原Ⅳ	15・21	
	YD4 14	林中Ⅰ	16・19～21	
	YD4 15	林中Ⅱ	16・20・21	
	YD4 16	上原Ⅱ	16	
	YD4 17	林の御塚		
	YD4 18	立馬Ⅲ	19	
	YD4 19	東原Ⅰ	20	
	YD4 20	東原Ⅱ	20	
	YD4 21	東原Ⅲ	20・21	
	YD4 22	榎木Ⅰ	21	
	YD4 23	林宮原	24・27	
	YD4 24	上原Ⅲ	25・27	
	長野原	YD5 01	長野原一本松	6～10・ 12～17・19・20
		YD5 02	尾畑	11・18～22・25・26
YD5 03		久々戸	7・9・10・15・27・28	
YD5 04		幸神	8・9・14・17	
YD5 05		長野原城跡	23	
YD5 06		町	23～25	
三島	YD6 01	上郷B	13・14	
	YD6 02	上郷河原	13～15・17・18	
	YD6 03	上郷A	15・19・20	
	YD6 04	上郷西	19	
	YD6	三島大沢		
大柏木	YD7 01	廣石A	13	
	YD7	大柏木上ノ沢		
松谷	YD8	松田前田		
岩下	YD9	—		

第3節 立地と環境

1 西久保I遺跡と西久保V遺跡の立地

西久保I遺跡及び西久保V遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字横壁字西久保に位置する。長野原町は群馬県北西部にあたり、町北部を東流する吾妻川は、上信国境の一つである鳥井峠(1,362m)付近に源を發し、嬭恋村、長野原町、東吾妻町を経て、渋川市白井で利根川と合流する。吾妻川を挟んで北側には草津白根山(2,172m)、南側には浅間山(2,568m)という活火山を中心とした山脈が連なり上信国境の分水嶺を構成している。吾妻川の上・中流域の主要な支流としては、万座川、熊川、白砂川などが挙げられるが、多くがこの分水嶺付近に端が求められる河川である。吾妻川が形成する谷は長野原町内で広く、兩岸に段丘面が発達するが、川原畑付近から東では谷が狭まり著名な吾妻峡谷となる。さらに吾妻川は東流し、東吾妻町内に入ると段丘面を広く展開し、水田、畑作を土地利用とした農村風景を広げている。

西久保I遺跡、西久保V遺跡がある長野原町横壁は、吾妻川右岸にあたり、両遺跡は蛇行する吾妻川に画された舌状に突出した中位段丘東側面に位置する。中位段丘面とはいえ、傾斜地形が強く、特に南側は山地地形が迫る山あいの地に占地する遺跡である。南側の山地地形には、岩峰丸岩(1,124m)をはじめ、地元に密着した山々が聳える。このように横壁地区は、吾妻川右岸にあり南側に険しい山々が迫るため、北側への斜面地形の上、日照が悪いような印象を受ける。しかしながら、横壁地区の段丘面は広く、特に横壁中村遺跡がある中央部分は日照も良好で小河川も幾筋も流れる居住地としては最適な地区である。吾妻川右岸では、下流の川原畑上湯原地区と並び、広く、平坦な中位段丘面を形成している。西久保I遺跡、西久保V遺跡は横壁地区の東側にあたり、北流する小河川の一つである深沢が西に流れ、同様の河川である小倉沢が東側を画す。両遺跡の西側及び北側は、吾妻川の急峻な河川崖が連なり、独立した印象を受ける中位段丘面である。この段丘面は、横壁中村遺跡のある中央部分よりは、やや傾斜が強いものの、北側から西側への緩斜面地形が広がり、人家、畑などに供された台地地形である。

2 周辺の遺跡

本節では、ハッ場ダム建設に伴う調査対象地域の周辺の主な遺跡分布図と一覧表を掲載し、当地域の遺跡を概観したい。

旧石器時代：長野原町内では、現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されていない。吾妻川流域は大森泥流や浅間一板鼻褐色軽石群(As-BPG)、浅間草津黄色軽石(As-YPk)によって厚く覆われており、各層序を指標とする調査は安全上の問題などから、極めて困難な状況である。上位、最上位段丘面に立地する遺跡のように、二次堆積ロームの存在から、旧石器を対象とした確認を行っても、文化層の把握に至らない場合が多い。ただし、柳沢城(38)から遺構外出土ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが出土している。より山間部の遺跡などで、これらの堆積物下位の調査が実施できれば、当該期の遺跡が確認される可能性がある。

縄文時代：長野原町内の遺跡地の約半数に縄文時代の遺構・遺物が確認されているように、濃密な分布を示す。

草創期の遺跡としては、石畑I岩陰が挙げられる。奥行4m以上、幅40mの大規模な岩陰遺跡であり、草創期の表裏縄文などの出土が知られる。平成29年度より調査が着手されており、今後の本格的な調査に期待が集まる。

早期の遺跡は吾妻川左岸に多く見られ、特に山間地の急傾斜地形中の狭小な平坦地や緩傾斜地に占地する傾向が見られる。林地区に良好な遺跡が集まる。榎木II遺跡(25)、立馬I遺跡(5)、立馬II遺跡(6)、中棚I遺跡(21)が知られる。川原畑地区では三平I遺跡と三平II遺跡が報告されている。また、長野原地区では、幸神遺跡(39)、尾坂遺跡(40)、長野原一本松遺跡(41)で出土が報告されている。

ハッ場ダム建設関連ではなく、地図上に図示出来なかったが、長野原町貝瀬地区で調査が継続する居家以岩陰遺跡も良好な早期人骨がまとまって出土しており、こちらも重要な資料を提供する。

前期の遺跡は平野部に比して少ないが、漸増の傾向は示す。その中で、前期初頭の集落跡が調査されている。上原I遺跡(12)は花積下層式期の住居跡が多数調査されており、該期の遺跡として、屈指の規模を誇る。長野原町教育委員会と事業団が隣接した地点を調査・報告して

いる。林中原Ⅱ遺跡(17)でも2軒の前期初頭の住居跡を報告している。

前期前葉～中葉段階では、大規模な集落跡は調査されていないが、上ノ平Ⅰ遺跡で前期の住居跡が報告されている。石知遺跡や二社平遺跡で関山Ⅱ式や黒浜式が出土しているが遺構は確認されていない。一方、林中原Ⅰ遺跡(16)では、関山式期の住居跡1軒が検出されており周辺への広がりが予想されている。

前期後葉段階でも、平野部の例と比べて、当地域の集落規模は小規模に止まるようだ。諸磯式期の集落跡としては、三平Ⅰ遺跡、榎木Ⅱ遺跡、川原湯勝沼遺跡(4)などで数軒単位の住居跡・土坑が調査されている。林中原Ⅱ遺跡でも土坑が調査され、包含層からの出土も多い。また榎木Ⅲ遺跡(26)では、包含層出土ながら諸磯Ⅱ式土器がまとまる。

中期初葉段階の遺跡としては、上原Ⅱ遺跡(13)が挙げられる。五領ヶ台Ⅱ式の遺構・遺物の良好な出土が報告されている。また、同じ林地区の立馬Ⅱ遺跡、榎木Ⅱ遺跡でも該期土器資料が充実する。さらに林中原Ⅱ遺跡で

も土坑出土資料を報告しているように、林地区には該期資料が集中する傾向が見られる。

中期前葉段階のまとまった資料は少ない。前述の立馬Ⅱ遺跡、榎木Ⅱ遺跡で良好な土器の出土が見られるが、遺構に伴ってならず、両遺跡の初頭段階の土器群と同様に、一括資料としての確定性に乏しい。その他では榎木Ⅰ遺跡や林中原Ⅱ遺跡では、1・2個体の土器が土坑から出土している。

中期中葉段階では阿玉台Ⅰb式～Ⅱ式段階の住居跡として、林中原Ⅰ遺跡に住居跡、林中原Ⅱ遺跡で土坑が検出されている。幸神遺跡では、「焼町類型」を炉体土器とする住居跡が報告されている。中葉後半段階の資料としては、上ノ平Ⅰ遺跡が充実する。31号住居跡等に良好な土器群がまとまる。同様な段階では、横壁中村遺跡(28)で土坑出土の土器群が好資料である。

中期後葉段階は、当地域で大型集落跡が展開する様相を示す。長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡は環状集落の好例として知られる。林中原Ⅱ遺跡や東宮遺跡も、環状集落の一部の調査と位置付けられ、加えて尾坂遺跡や石



第3図 周辺の遺跡及び段丘面(国土地理院2万5千分の1地形図「長野原」使用)

(段丘面に関しては「長野原町の自然」(1993長野原町)及び「林地区遺跡群」(2015)から引用し、一部を改変した)

川原遺跡(1)なども大型集落跡と捉えられよう。このように、近接した地点で環状集落や大型集落が併存する様相は、中期集落群の在り方として検討を重ねなければならないだろう。また、中期後葉後半段階から中期末葉段階の集落は確実に敷石住居跡を伴い、前述の後葉段階の集落から継続する様相を示す。中期末葉段階の敷石住居跡としては、長野原地区の久々戸遺跡(42)で良好な全面敷石住居跡が調査されている。

後期も中期集落から継続する様相が見られるが、各段丘面に広がる傾向も予想される。敷石住居跡は長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡の他に林中原Ⅱ遺跡、林中原Ⅰ遺跡、石川原遺跡や東宮遺跡、下田遺跡などで良好な例が調査されている。いずれも後期初頭から後期前葉の段階の集落跡であり、称名寺式土器や堀之内式土器の出土が充実し、三十稲場式土器や「茂沢類型」など新潟県や長野県域を中心とする土器群も見られる。

後期中葉～後葉段階になると遺跡数は少ないが、近年水没地区を対象とした中位段丘の調査が増え、その数はやや増えている。上原Ⅳ遺跡(15)や横壁中村遺跡、石川原遺跡、東宮遺跡で加曾利B式期の住居跡や掘立柱建物跡が調査されている。後葉段階でも同様の遺跡で遺構数は減りながらも、継続する傾向を見せる。特に石川原遺跡では、後期後葉段階の住居跡と共に様々な遺構が調査されており、当地域の拠点集落としての位置付けが予想されている。調査と整理が同時に進行しており、詳細は控える。

晩期の資料も最近の調査で見られるようになった。かつては横壁中村遺跡の土坑や包含層の例があるのみだったが、石川原遺跡で、晩期前半の住居跡など集落跡が調査されている。後期後半からの継続的な集落なのかは不明だが、当該期の拠点的な集落と位置付けられ、今後の調査成果に期待が高まる。

晩期末葉の資料としては、立馬Ⅰ遺跡、横壁中村遺跡、で住居跡が、川原湯勝沼遺跡で再葬墓の要素を持つ土坑が調査されている。出土土器の多くが水Ⅱ式あるいは弥生時代前期に比定される可能性もあり、慎重な研究が必要とされる。

弥生時代：遺跡数は希薄だが、好資料が集まる地域である。前述の立馬Ⅰ遺跡や川原湯勝沼遺跡の他、前期～中期の住居跡としては横壁中村遺跡と立馬Ⅰ遺跡で住居跡

1軒を調査している。立馬Ⅰ遺跡では土器棺墓も併せて検出されており、長野原町教委が調査した上原Ⅰ遺跡では土坑から短頸甕が出土している。尾坂遺跡では前期から中期前葉に比定される、墓域あるいは再葬墓と位置付けられた遺構群や包含層が調査されている。その中で、中期前葉だけが林中原Ⅱ遺跡では、住居跡や土坑が調査されており、良好な資料を提供している。

弥生時代後期になると、遺跡数は減る。石畑遺跡では土坑が二社平遺跡や尾坂遺跡で弥生後期～古墳時代前期とされる樽式系土器片が出土している。

古墳時代：現状では、吾妻溪谷上流において古墳そのものの存在は疑われている。墳丘状の高まりを数地点で見えるが、古墳としての確信性に乏しい。集落遺跡では、上原Ⅰ遺跡で前期と考えられる住居跡からS字状口縁台付甕や埴形土器が出土している。また、後期の住居跡としては上原Ⅳ遺跡で2軒、林宮原遺跡(20)で1軒、下原遺跡で1軒が調査されているように、古墳時代における居住は、きわめて限定的ながら確認されているようだ。

奈良・平安時代：奈良時代に比定される遺跡は希薄で、現状では調査遺跡は無い。町教委が行った分布調査では羽根尾Ⅱ遺跡が相当するが詳細には至っていない。

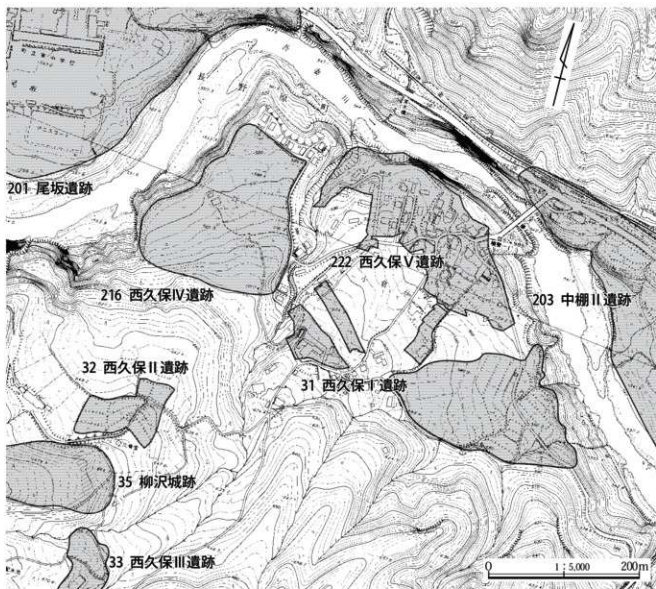
平安時代、特に9世紀後半になると当地域でも遺跡数は増える。長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡、尾坂遺跡、中棚Ⅰ遺跡、上原Ⅰ遺跡、上原Ⅲ遺跡(14)、上原Ⅳ遺跡、林宮原遺跡、榎木Ⅰ遺跡、榎木Ⅱ遺跡、石川原遺跡、下湯原遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡など、各地区で集落跡が調査されている。これらの集落遺跡の出土遺物としては、土師器・須恵器以外に、羽口、鉄滓、鎌、刀子、砥石など鍛冶関連遺物や鉄製品の出土が目を引く。生産遺構としての鍛冶関連施設が各地区に点在していたようだ。併せて、林宮原遺跡や榎木Ⅰ遺跡で出土した小型鎌や芋引き状金具の出土は麻、芋などの生産・加工に関わる製品として位置づけられる。当地域の特徴的な該期遺構として、「陥穴状土坑」が挙げられよう。イノシシ・シカなどを捕獲する罟籠遺構として推定されているが、縄文時代の所産として位置付けられていた例から、一転して平安時代～中世に比定されている。花畑遺跡(8)の調査では、陥穴状土坑掘削に伴う工具痕を検出している。この陥穴状土坑も該期集落遺跡と同様に、吾妻川左岸側で発見される傾向が知られていたが、右岸にあたる東吾妻町上郷A・B

遺跡や川原湯地区の石川原遺跡でも調査されているように、調査事例の蓄積により解釈の変更が必要になっている。

中世：吾妻川流域には中世館跡が点在する。金光山砦跡、柳沢城跡、長野原城跡(47)、丸岩城跡、羽根尾城跡が挙げられよう。その他に最近の調査、報告でその存在が明らかになった林城跡がある。これらは、当時の道と関連した交通の要衝に設けられたようである。城館跡以外には、三平Ⅰ遺跡、三平Ⅱ遺跡、東原Ⅰ遺跡(9)、東原Ⅱ遺跡(10)、東原Ⅲ遺跡(11)、林中原Ⅰ遺跡、林宮原遺跡、下湯原遺跡、二反沢遺跡(23)、榎木Ⅱ遺跡、尾坂遺跡、下湯原遺跡、石川原遺跡などで掘立柱建物跡や土坑、畑跡が調査されている。掘立柱建物は近世へ継続する例も多々見られ、天明泥流下で検出された屋敷跡との関係

性も興味深い。

近世：当地域の江戸時代遺跡の多くが天明3年(1783)における浅間山噴火に伴う泥流堆積物下の遺構群と位置付けられよう。当時の屋敷跡を検出した遺跡として、東宮遺跡、西宮遺跡、石川原遺跡、下田遺跡、榎木Ⅰ遺跡、尾坂遺跡、町遺跡(43)などが挙げられよう。また、小林家住宅跡も長野原町教委が調査した良好な屋敷跡で、東宮遺跡と並び民家の規模のみならず、生業や性格までをうかがわせる資料が出土しており、極めて重要な在り方を示している。さらに、石川原遺跡では屋敷跡以外に当時の寺院の調査に至っており注目を集めよう。この他に、当地域の天明泥流下の遺構としては、畑跡が各遺跡で調査されている。特に中段段丘面と下位段丘面に集中しており生産遺構として、当時の生業の一つである畑跡研究



第4図 西久保地区の周辺遺跡

第1章 調査に至る経過と周辺の環境

第2表 周辺の主な遺跡一覧

No	遺跡名	所在大字	段丘面	概要	文献など
1	石川原遺跡	川原湯	中位段丘面	縄文時代中期～晩期集落跡、後期の配石遺構、水場遺構。天明泥流下の被災村落的調査。良好な屋敷跡、寺院跡、畑跡。豊富な出土遺物	85
2	川原湯中原Ⅰ遺跡	川原湯	上位段丘面	平安時代の散布地	
3	川原湯中原Ⅱ遺跡	川原湯	中位段丘面	縄文時代中期集落跡。古代～中・近世の陥伏状土坑、土坑	84
4	川原湯勝沼遺跡	川原湯	中位段丘面	縄文時代末期木葉の遺構再発見。平安時代集落跡。天明泥流下畑跡	28-32
5	立馬Ⅰ遺跡	林	山地斜面	小規模な縄文時代早期集落跡、晩期集落跡。弥生時代中期集落跡・貴船墓。平安時代集落跡、陥伏状土坑	10-37
6	立馬Ⅱ遺跡	林	山地斜面	縄文時代早期包含層、中期前葉～後葉集落跡。古代～中世の陥伏状土坑、掘立柱建物	34
7	立馬Ⅲ遺跡	林	山地斜面	縄文時代早期集落跡。良好な早期包含層。陥伏状土坑	52
8	花畑遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代中期初葉包含層。平安時代集落跡、陥伏状土坑	28
9	東原Ⅰ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代土坑。平安時代以降の陥伏状土坑。中・近世の掘立柱建物	7・8・18・22・61
10	東原Ⅱ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代包含層。古代～中・近世の陥伏状土坑・掘立柱建物	61
11	東原Ⅲ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代早期～後期包含層。中・近世の掘立柱建物・礎石建物跡	61
12	上原Ⅰ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代前期初葉集落跡。弥生時代前期短距離の土坑出土。平安時代集落跡、陥伏状土坑	8・16・21・73
13	上原Ⅱ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代中期初葉の集落跡	8・21
14	上原Ⅲ遺跡	林	最上位段丘面	平安時代集落跡。殿治上房跡	8・21・73・77
15	上原Ⅳ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代包含層。古墳時代住居跡2軒。平安時代集落跡。中・近世土坑	8・10・21・43・65
16	林中原Ⅰ遺跡	林	最上位段丘面	町教委調査では縄文時代後期集落跡。住上土器の良好な出土遺物。事業調査では縄文時代前・中期集落跡。林城を内包する。中・近世掘立柱建物群	4・7・11・21・70
17	林中原Ⅱ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代中～後期の大型櫓集落跡。礎石を出土した中期土坑や後期列石と礎石屋跡。弥生時代中期集落跡。中・近世掘立柱建物群	4・7・8・12・13・21・74・87
18	千田遺跡	林	中位段丘面	平安時代の集落跡。天明泥流下の屋敷跡	28・79
19	下原遺跡	林	最上位段丘面	古墳時代中期・平安時代集落跡。中世屋敷跡。中・近世畑跡。水田跡	29・38
20	林宮原遺跡	林	最上位段丘面	西丹波地域で初出の古墳時代後期住居跡。平安時代集落跡。芋引金具の出土	5・6・8・10・14・73
21	中柳Ⅰ遺跡	林	上位段丘面	縄文時代早期包含層。良好な平安時代集落跡	8・21・24
22	中柳Ⅱ遺跡	林	下位段丘面	天明泥流下の畑跡及び安永9年埋没と推定される畑跡。平安時代集落跡	29・30
23	二反沢遺跡	林	山地斜面	石垣を付設する中世土坑。殿治園連遺物出土	24・35
24	榎木Ⅰ遺跡	林	上位段丘面	縄文時代中期土坑。平安時代集落跡。近世屋敷跡	65
25	榎木Ⅱ遺跡	林	山地斜面	縄文時代早期～中期前葉集落跡。平安時代集落跡。中世掘立柱建物群	44・53
26	榎木Ⅲ遺跡	林	上位段丘面	縄文時代前期～後期包含層。弥生時代前期～中期包含層	28
27	横壁勝沼遺跡	横壁	中位段丘面	槍先形尖頭器の出土(表採)。縄文時代土坑。平安時代住居跡1軒	28
28	横壁中村遺跡	横壁	中位段丘面	縄文時代中～晩期の大型櫓集落跡。弥生時代前期集落跡。平安時代集落跡。中・近世掘立柱建物群。礎石建物跡。土坑墓など	29・31・33・36・40・46・48・55・56・59・60・63・71
29	山柳Ⅰ遺跡	横壁	中位段丘面	平安時代の散布地	23
30	山柳Ⅱ遺跡	横壁	中位段丘面	散布地	
31	山柳Ⅲ遺跡	横壁	中位段丘面	縄文時代建物跡。平安時代住居跡・焼土遺構。近世畑跡	28・43
32	山柳Ⅳ遺跡	横壁	中位段丘面	縄文・平安時代の散布地	
33	西久保Ⅰ遺跡	横壁	中位段丘面	縄文時代中期後葉～末葉の小規模集落跡。水場遺構など	28・本報告
34	西久保Ⅱ遺跡	横壁	山地斜面	平安時代の散布地	24
35	西久保Ⅲ遺跡	横壁	山地斜面	散布地	
36	西久保Ⅳ遺跡	横壁	中位段丘面	縄文時代建物跡。平安時代住居跡・焼土遺構。近世畑跡	22・65
37	西久保Ⅴ遺跡	横壁	中位段丘面	縄文時代中期～弥生時代中期遺物集中遺構。天明泥流下の推定水田跡	88・本報告
38	柳沢城跡	横壁	山地斜面	中世城郭。堀切・土厨・礎石・腰曲輪・石垣遺構。陶磁器・鉄製品・銅製品・石臼などを出土	3
39	幸神遺跡	長野原	上位段丘面	縄文時代中期の小規模集落跡。早期～後期包含層。近世以前の畑跡	43
40	尾坂遺跡	長野原	中位段丘面	縄文時代中期集落跡。早期～後期包含層。弥生時代前期～中期再発見。平安時代集落跡。中世掘立柱建物跡。天明泥流下の畑跡	28・66・75・83
41	長野原一本松遺跡	長野原	上位段丘面	縄文時代中期～後期の大型環状集落跡。左坪拠点集落の一つ。平安時代集落跡。陥伏状土坑	13・27・41・45・50・54・67・69
42	久々戸遺跡	長野原	中位段丘面	縄文時代中期～後期集落跡。中期末葉の良好な敷石住居跡。弥生時代中期集落跡。天明泥流下の畑跡として著名	9・26・29・30・77
43	柳遺跡	長野原	中位段丘面	天明泥流下の屋敷跡、畑跡。屋敷跡より豊富な出土遺物を見る	72
44	船木Ⅰ遺跡	長野原	中位段丘面	天明泥流下の畑跡	6
45	船木Ⅱ遺跡	長野原	中位段丘面	縄文時代中期の上層土。石器出土	
46	船木Ⅲ遺跡	長野原	中位段丘面	縄文時代中期の石器。石籾等出土	
47	長野原城跡	長野原	山地斜面 中位段丘面	土塀や堀切、物見台などが残る。長野原合戦の舞台となる。中位段丘面で天明泥流下の畑跡を調査	70

主な参考文献

- 1 長野県教育委員会1990『長野県町の道跡一町内道跡詳細分布調査一』長野県埋蔵文化財調査報告書第1集(以下長野県町道集)
- 2 ハツ場ダム地域自然調査1993『長野原の自然』長野県町
- 3 長野県教育委員会1995『開け城』長野県町第4集
- 4 長野県教育委員会2004『町内道跡Ⅳ』長野県町第13集 林宮原道跡Ⅱ・林中Ⅰ道跡Ⅳ・外輪Ⅰ道跡・長坂Ⅰ道跡Ⅱなど
- 5 長野県教育委員会2002『林宮原道跡Ⅱ』長野県町第14集
- 6 長野県教育委員会2005『町内道跡Ⅴ』長野県町第15集 船木Ⅰ道跡・立石道跡・林宮原道跡など
- 7 長野県教育委員会2006『町内道跡Ⅵ』長野県町第16集 林中Ⅱ道跡Ⅵ・東原Ⅰ道跡・林中Ⅰ道跡Ⅵなど
- 8 長野県教育委員会2007『町内道跡Ⅶ』長野県町第17集 林中Ⅰ道跡Ⅶ・林宮原道跡Ⅵ・東原Ⅰ道跡Ⅶ・上原Ⅰ道跡Ⅶ・上原Ⅳ道跡・林中Ⅰ道跡Ⅶ・林中Ⅱ道跡Ⅶ・中柳Ⅰ道跡・上原Ⅲ道跡・上原Ⅱ道跡など
- 9 長野県教育委員会2009『町内道跡Ⅷ』長野県町第18集 林中Ⅰ道跡Ⅷ・久々戸道跡など
- 10 長野県教育委員会2010『町内道跡Ⅷ』長野県町第19集 草本原道跡Ⅱ・三平Ⅰ道跡・古屋敷道跡・林宮原道跡Ⅶ・林中Ⅰ道跡Ⅷなど
- 11 長野県教育委員会2010『林中Ⅰ道跡Ⅳ』長野県町第20集
- 12 長野県教育委員会2010『町内道跡Ⅷ』長野県町第21集 林中Ⅱ道跡Ⅷ
- 13 長野県教育委員会2012『町内道跡Ⅷ』長野県町第22集 船木Ⅰ道跡Ⅱ・田道Ⅱ道跡・長野原一本松道跡Ⅱ・林中Ⅰ道跡Ⅱ
- 14 長野県教育委員会2011『林宮原道跡Ⅶ』長野県町第23集
- 15 長野県教育委員会2013『山岸Ⅱ道跡Ⅳ』長野県町第24集
- 16 長野県教育委員会2013『町内道跡Ⅷ』長野県町第25集 坪井道跡Ⅴ・小滝Ⅱ道跡・上原Ⅰ道跡Ⅱなど
- 17 長野県教育委員会2013『三平Ⅰ道跡』長野県町第26集
- 18 長野県教育委員会2013『町内道跡Ⅷ』長野県町第27集 上ノ平道跡Ⅰ・山岸Ⅱ道跡・東原Ⅰ道跡Ⅴ・坪井道跡Ⅳなど
- 19 長野県教育委員会2014『町内道跡Ⅷ』長野県町第28集 滝原Ⅳ道跡・羽根尾宮原道跡Ⅱなど
- 20 長野県教育委員会2014『滝原Ⅳ道跡』長野県町第29集
- 21 長野県教育委員会2015『林地区道跡Ⅴ』長野県町第30集 上原Ⅱ道跡Ⅰ・上原Ⅲ道跡・中柳Ⅰ道跡・上原Ⅰ道跡Ⅱ・上原Ⅳ道跡Ⅳ・林中Ⅰ道跡Ⅳ・林中Ⅱ道跡Ⅳ
- 22 長野県教育委員会2016『町内道跡Ⅷ』長野県町第31集 町道跡Ⅱ・坪井道跡Ⅴ・滝原Ⅳ道跡Ⅱ・三平Ⅰ道跡Ⅱ・東原Ⅰ道跡Ⅳ・西久保Ⅳ道跡Ⅱ・西ノ上道跡Ⅱなど
- 23 長野県教育委員会2017『町内道跡ⅧⅠ』長野県町第32集 赤羽根道跡・西久保Ⅴ道跡・山根Ⅰ道跡・長坂Ⅱ道跡など
- 24 長野県教育委員会2018『町内道跡ⅧⅡ』長野県町第33集 中柳Ⅰ道跡Ⅱ・赤羽根道跡・観奈道跡・滝沢観音岩道跡・二反沢道跡・西久保Ⅱ道跡
- 25 長野県教育委員会2018『観奈道跡』長野県町第34集
- 26 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下群馬文)1998『長野原久々戸道跡』
- 27 群馬文2002『長野原一本松道跡(1)』ハツ場ダム建設工事(伴)埋蔵文化財調査報告書第1集(以下ハツ場道集)
- 28 群馬文2002『ハツ場ダム発掘調査集成(1)』ハツ場第2集 東宮道跡・石畑道跡・川原岡勝沼道跡・横塚勝沼道跡・西久保Ⅰ道跡・山根Ⅱ道跡・下田道跡・花畑道跡・船木Ⅱ道跡・尾坂道跡など
- 29 群馬文2003『久々戸道跡・中柳Ⅱ道跡・下原道跡・横塚中村道跡』ハツ場第3集
- 30 群馬文2004『久々戸道跡(2)・中柳Ⅱ道跡(2)・西ノ上道跡・上郷A道跡』ハツ場第4集
- 31 群馬文2005『横塚中村道跡(2)』ハツ場第5集
- 32 群馬文2005『川原岡勝沼道跡』ハツ場第6集
- 33 群馬文2006『横塚中村道跡(3)』ハツ場第7集
- 34 群馬文2006『立馬Ⅱ道跡』ハツ場第8集
- 35 群馬文2006『上郷B道跡・廣石A道跡・二反沢道跡』ハツ場第9集
- 36 群馬文2006『横塚中村道跡(4)』ハツ場第10集
- 37 群馬文2006『立馬Ⅰ道跡』ハツ場第11集
- 38 群馬文2007『下原道跡Ⅱ』ハツ場第12集
- 39 群馬文2007『三平Ⅰ・Ⅱ道跡』ハツ場第13集
- 40 群馬文2007『横塚中村道跡(5)』ハツ場第14集
- 41 群馬文2007『長野原一本松道跡(2)』ハツ場第15集
- 42 群馬文2007『上郷阿原道跡(1)』ハツ場第16集
- 43 群馬文2008『山根Ⅲ道跡(2)・上原Ⅳ道跡・幸神道跡』ハツ場第17集
- 44 群馬文2008『船木Ⅱ道跡(1)』ハツ場第18集
- 45 群馬文2008『長野原一本松道跡(3)』ハツ場第19集
- 46 群馬文2008『横塚中村道跡(6)』ハツ場第20集
- 47 群馬文2008『上郷阿原道跡(2)』ハツ場第21集
- 48 群馬文2008『横塚中村道跡(7)』ハツ場第22集
- 49 群馬文2008『上ノ平Ⅰ道跡(1)』ハツ場第23集
- 50 群馬文2008『長野原一本松道跡(4)』ハツ場第24集
- 51 群馬文2008『上郷西道跡』ハツ場第25集
- 52 群馬文2009『立馬Ⅲ道跡』ハツ場第26集
- 53 群馬文2009『船木Ⅱ道跡(2)』ハツ場第27集
- 54 群馬文2009『長野原一本松道跡(5)』ハツ場第28集
- 55 群馬文2009『横塚中村道跡(8)』ハツ場第29集
- 56 群馬文2009『横塚中村道跡(9)』ハツ場第30集
- 57 群馬文2009『上郷阿原道跡(3)』ハツ場第31集
- 58 群馬文2009『上郷A道跡(2)』ハツ場第32集
- 59 群馬文2009『横塚中村道跡(10)』ハツ場第33集
- 60 群馬文2010『横塚中村道跡(11)』ハツ場第34集
- 61 群馬文2010『東原Ⅰ道跡・東原Ⅱ道跡・東原Ⅲ道跡』ハツ場第35集
- 62 群馬文2011『東宮道跡(1)』ハツ場第36集
- 63 群馬文2012『横塚中村道跡(12)』ハツ場第37集
- 64 群馬文2012『西宮道跡(2)』ハツ場第38集
- 65 群馬文2012『船木Ⅰ道跡・上原Ⅲ道跡(2)・西久保Ⅳ道跡』ハツ場第39集
- 66 群馬文2012『尾坂道跡』緊急報告 群馬文第546集
- 67 群馬文2013『長野原一本松道跡(6)』ハツ場第40集
- 68 群馬文2013『横塚中村道跡(13)』ハツ場第41集
- 69 群馬文2014『長野原一本松道跡(7)』ハツ場第42集
- 70 群馬文2014『長野原A道跡・林中Ⅰ道跡Ⅳ』ハツ場第43集
- 71 群馬文2014『横塚中村道跡(14)』ハツ場第44集
- 72 群馬文2015『町道跡』ハツ場第45集
- 73 群馬文2015『上原Ⅰ道跡・上原Ⅱ道跡・林宮原道跡』ハツ場第46集
- 74 群馬文2016『上原Ⅱ道跡(1)』ハツ場第47集75
- 75 群馬文2016『尾坂道跡(2)』ハツ場第48集
- 76 群馬文2017『上ノ平Ⅰ道跡(2)』ハツ場第49集
- 77 群馬文2017『東原Ⅲ道跡(2)・久々戸道跡(3)』ハツ場第50集
- 78 群馬文2017『東宮道跡(3)』ハツ場第51集
- 79 群馬文2017『下田道跡(2)』ハツ場第52集
- 80 群馬文2018『東宮道跡(4)』ハツ場第53集
- 81 群馬文2018『西宮道跡(1)・西宮岩陰』ハツ場第54集
- 82 群馬文2018『上ノ平道跡(3)』ハツ場第55集
- 83 群馬文2018『尾坂道跡(3)』ハツ場第56集
- 84 群馬文2018『川原岡中原Ⅲ道跡』ハツ場第57集
- 85 群馬文2018『石川原道跡(1)』ハツ場第58集
- 86 群馬文2018『下原道跡(1)』ハツ場第59集
- 87 群馬文2018『林中Ⅱ道跡(2)』ハツ場第60集
- 88 群馬文2018-2019『年報36』・『年報37』

に欠かせない遺跡群となっている。近世の墓塚も多い。各地区の遺跡で墓域として、多くの土坑墓を調査している。林中原Ⅰ遺跡や上高原遺跡や上ノ平Ⅰ遺跡、横壁中村遺跡などで、まとまった墓塚群が調査されている。当時の埋葬事例をうかがう資料群である。

天明3年以前の遺構・遺物も当地域の近世史研究では重要な資料である。例えば中朝Ⅱ遺跡では安永期とされる畑跡、町遺跡では泥流下畑跡下位層から近世に比定される製鉄関連遺構が調査されている。また、時期は確定できないが、横壁中村遺跡における一字一石経の出土も近世社会における宗教様相の一端を知る資料である。

3 横壁地区の周辺遺跡

ここでは、両遺跡が位置する横壁地区西久保地区内の遺跡を取り上げる。

西久保Ⅰ遺跡は、既に平成6・10・12年に当事業団が発掘調査を行い、報告書を刊行している(群理文2002)。縄文時代中期後葉～末葉の集落跡として、住居跡6軒の他、中期前葉段階の土坑や中期中葉末段階の水場遺構などが調査されている。また、黒曜石の剥片を多量に出土した箇所を、剥片廃棄場所として位置付けている。その後、当事業団が試掘調査および本調査を平成29年に行いその結果を本報告書に掲載した。

西久保Ⅱ遺跡は、平成29年に土地改良事業に伴い、町教育委員が試掘調査を行い、平安時代の陥穴や溝、土坑が確認され、また中期末～後期初頭の縄文土器片の出土を見ている。遺跡範囲も東と北側へ拡張となっている。

西久保Ⅲ遺跡には調査が及んでいないが、縄文時代と平安時代の散布地として位置付けられている。

西久保Ⅳ遺跡は平成21・23年に当事業団が発掘調査を行っている。天明泥流下の畑跡のほか、平安時代住居跡1軒、焼土遺構や縄文時代後期前葉に比定された掘立柱建物跡が得られている(群理文2012)。また町教委も町営住宅建設に伴う試掘調査を行い、やはり天明泥流下の畑跡を検出し、泥流の天端ともいふべき地点を確認している(町教委2006)。さらに平成26年、仮設建物建設のため試掘調査が行われ、一部で天明泥流下面が確認されている(町教委2016)。

西久保Ⅴ遺跡は、平成26年7月に県教委がハツ場ダム関連事業確定のため試掘調査を行い、天明泥流下のAs-A

下面を確認している。さらに、平成27年に町教委が送電線基礎撤去工事に伴い立ち合い調査を2箇所で行い、断面観察により天明泥流下の畑跡を確認している。これらの調査により、対象地が周知の包蔵地外であったが、「西久保Ⅴ遺跡(No222)」として範囲拡張変更措置がとられた(町教委2017)。当事業団の調査は平成28年度と29年度に行われており、その結果を本報告書に掲載する。

その他の西久保地区の遺跡としては、柳沢城跡が挙げられる。中世山城で、平成5年に町教委が発掘調査を行っている(町教委1995)。別城一郭付随と呼ばれる特殊構造で、郭跡・堀切・土居などを調査した。出土遺物も豊富で、常滑・古瀬戸・美濃・珠洲窯の甕・輸入陶磁器(景徳鎮)などが見られる。

横壁地区では、著名な横壁中村遺跡が横壁地区中央に位置する。縄文時代中期～後期の大規模集落跡で、晩期資料や弥生時代資料も充実する。9世紀代の住居跡や中世建物跡、近世墓塚群など多時期にわたる複合遺跡である。山根Ⅲ遺跡は、横壁中村遺跡の西で、深沢の右岸崖上に立地する遺跡である。平成10・13・18年度に当事業団による発掘調査が行われ、縄文時代中期住居跡や土坑が検出されている(群理文2002・2008)。横壁勝沼遺跡は横壁地区の東側に位置する。平成6・7年度に当事業団が調査を行い、9世紀代の住居跡1軒の他陥穴や中世土坑墓などが報告されている。また遺構外ながら珪質頁岩製の槍先形尖頭器1点が出土している(群理文2002)。西久保Ⅰ遺跡や山根Ⅲ遺跡は、横壁中村遺跡と同じ中位段丘面に占地する縄文中期遺跡であるが、小規模な様相である。

以上のように、横壁地区の遺跡を概観すると、横壁中村遺跡を中核として、縄文時代中期～後期の資料が充実する。また、弥生時代、平安時代、中世～近世資料も横壁中村遺跡に圧倒的な量が集まる。ただし、近世段階の遺跡に関しては、天明泥流とAs-Aに良好に被覆された遺跡が少なく、被災建物跡などの検出も見られない。吾妻川対岸の中位段丘にある尾坂遺跡や下田遺跡には厚く堆積した天明泥流とAs-Aが認められ、屋敷跡や良好な畑跡が調査されている。他の地区に比べて、泥流被害が少なかった地区といえよう。

第2章 西久保 I 遺跡

第1節 調査経過と調査概要

1 調査の経過

西久保 I 遺跡は長野原町大字横塚字西久保に所在する。平成6年5月に試掘調査を実施し、焼土が確認され竪穴住居の存在が指摘された。また縄文時代中期後半の土器が10点ほど出土し、群馬県教育委員会により本調査が必要とされた。その後平成13・17年度、20年度に試掘調査が実施されたが、その試掘範囲では調査不要となった。本調査は、平成10年度と平成12年度に実施された。発掘調査により縄文時代の竪穴建物6軒、礎石建物跡1軒、土坑101基、ピット7基、溝4条、水場遺構1基が調査され、調査報告書は『八ツ場ダム発掘調査集成(1)』平成14年(2002)に刊行されている。

本報告書は、平成6年の試掘調査により本調査が必要とされた箇所を平成29年度に発掘調査が実施され、それに伴う報告である。遺跡は試掘調査の段階から23年経過している。吾妻川右岸の急傾斜面上に位置していた遺跡は、多くの部分が崩壊し、広い範囲において崩壊防止のための工事等が行われていた。23年前に遺跡の可能性が指摘されていた地形とは大きく異なっていた。

発掘調査は平成29年6月1日～6月31日に実施した。調査範囲にある道路部分のアスファルトを除去し、埋設されていた水道管を確認する。6月前半はトレンチを設定。A～Fトレンチ調査、6月20日には、Bトレンチから3点の遺物が出土した。後半はG～Kトレンチ調査を実施し6月31日に調査は終了した。発掘面積は、2,254㎡である。

2 調査方法

調査範囲が狭く、安全に発掘調査出来る斜面も少なかったため、トレンチによる調査とした。調査は、最も広い面である擁壁下の道路部分と北側の斜面部分で安全の確保ができる斜面部とした。道路部分は舗装を重機で撤去しA～Gの7本のトレンチ調査を実施した。吾妻川

面に面した北側の斜面下部分は崩壊し、崩壊防止のための工事が行われており、遺構の存在の可能性は薄かった。斜面の一部が残っていた部分にH・I・Jの3本のトレンチを設定し、その下の平坦面にKのトレンチを設定して調査を実施した。

測量にあたっては、測量業者委託によるデジタル測量を基本として、縮率1/20・1/100・1/200として実施した。遺構写真については、現場担当者による地上写真撮影とドローンを使用した空撮を行った。現場担当者による撮影には、デジタルカメラ(Canon EOS 6D)を使用した。

3 調査結果

以下11本のトレンチ調査の結果を報告する。

Aトレンチ：長さ6.25m、深さ3.5mのトレンチ調査。表土から2.9mまで攪乱層。その下に攪乱を受けていない黒褐色土を0.6mほど掘り下げる。遺構遺物なし。

Bトレンチ：長さ15m、深さ2.9mのトレンチ調査。表土から1.3～2.5mと場所により異なるが深い攪乱層。その下に攪乱を受けていない部分の土層を0.45～1.3mほど掘り下げる。黒褐色土・暗褐色土・明褐色土等の5層を確認する。3層中に焼土粒と炭の破片が確認されたが、遺構は無かった。遺物は攪乱層中から江戸時代の陶器小破片2点(№2・3)、4層中から平安時代の土師器甕の小破片1点(№1)、計3点の遺物が出土した。

Cトレンチ：長さ5m、深さ1.95mのトレンチ調査。底部からコンクリート板が出土。トレンチ部分全面攪乱。遺構遺物なし。

Dトレンチ：長さ4.9m、深さ2.1mのトレンチ調査。全て攪乱層。遺構遺物なし。

Eトレンチ：長さ13.45m、深さ2.2mのトレンチ調査。全て攪乱層。遺構遺物なし。

Fトレンチ：長さ4.1m、深さ2.45mのトレンチ調査。全て攪乱層。遺構遺物なし。

Gトレンチ：長さ9.05m、深さ1.6mのトレンチ調査。全て攪乱層。遺構遺物なし。

Hトレンチ：長さ3.5m、深さ1.65mのトレンチ調査。

全て攪乱層、遺構遺物なし。

Iトレンチ：長さ2.85m、深さ1.46mのトレンチ調査。

全て攪乱層、遺構遺物なし。

Jトレンチ：長さ2.78m、深さ0.93mのトレンチ調査。

全て攪乱層、遺構遺物なし。

Kトレンチ：長さ2.67m、深さ0.78mのトレンチ調査。

全て攪乱層、遺構遺物なし。

調査の結果、遺物は出土したが、遺構は残っていなかった。

4 天明泥流の有無

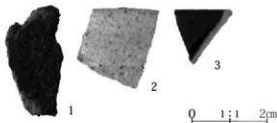
西久保I遺跡は、主に、吾妻川右岸の中位河岸段丘面上に立地し、標高は571～600mである。平成29年度に調査した部分の標高は571～580mであり、吾妻川の流れている付近の標高542mより約30m高い。天明泥流および浅間A軽石は、確認されていない。遺跡は天明泥流により埋まることは無かった。西側約450mに位置する西久保IV遺跡では標高600mの高さまで天明泥流により埋まりその下から畑が確認されている。西久保IV遺跡より標高が30m前後低い西久保I遺跡の平坦面に天明泥流が堆

積していないのは、対岸にある中朝II遺跡の標高が560m前後と低く、広い低地部分となっているために、天明泥流は中朝II遺跡部分を埋め、西久保I遺跡部分には到達しなかったものと思われる。

5 整理事業の経過

整理事業は、平成30年4月1日から平成30年5月31日まで実施した。遺構断面図類および遺構写真の確認から開始し、出土遺物の写真撮影を行った。

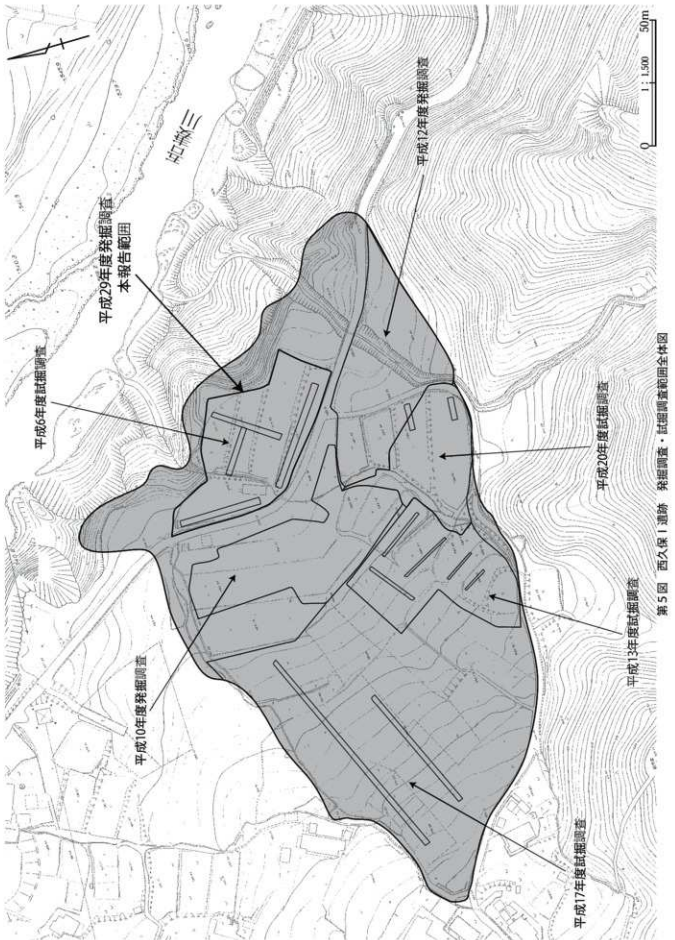
遺構図の編集、報告書版下のレイアウト作成、全体のデジタル編集作業およびデジタル版組を行った。整理した遺物や写真等については、管理台帳を作成し活用に備えて遺物や資料類の収納作業を行い、すべての整理事務を完了した。



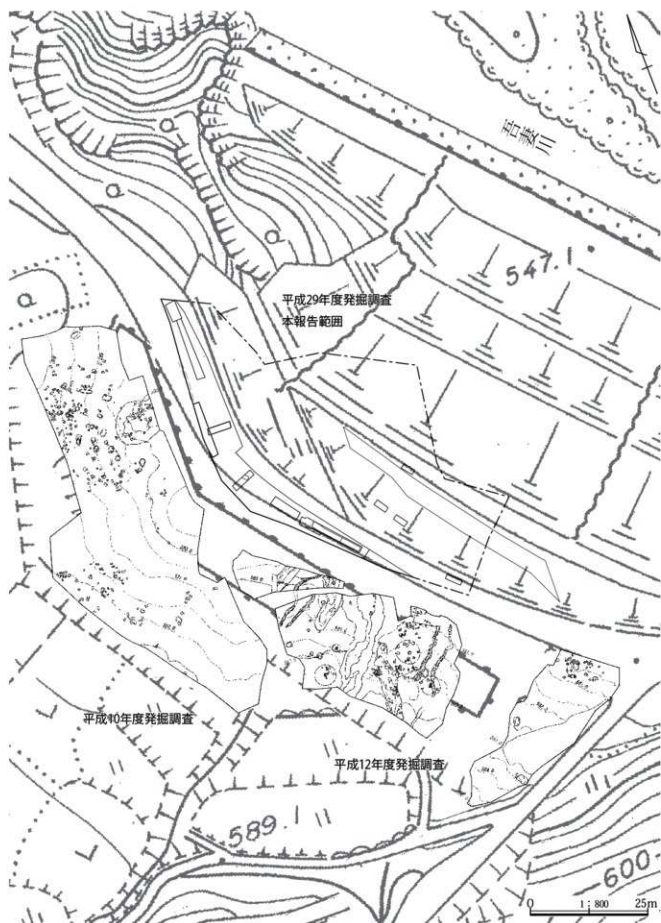
Bトレンチ出土遺物



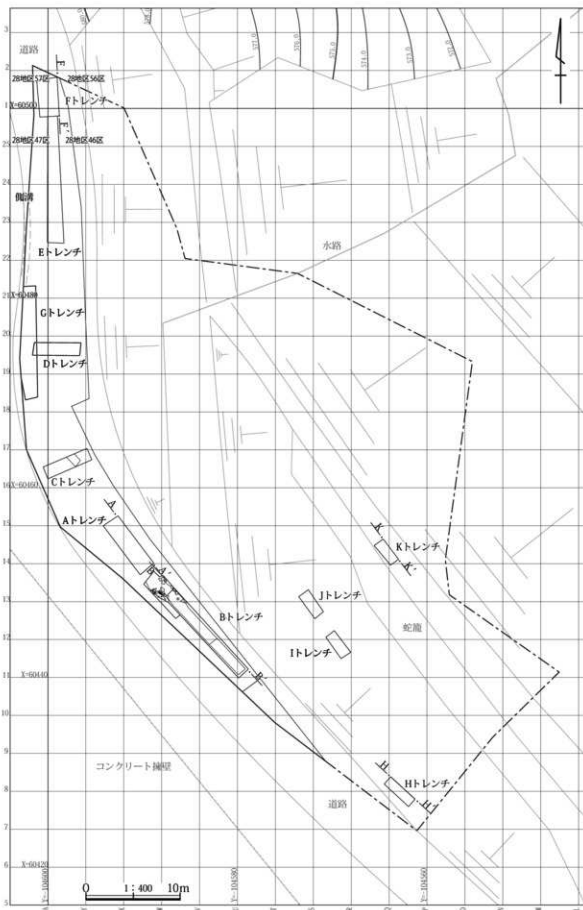
西久保I遺跡周辺航空写真(西久保I遺跡は線で囲まれた範囲)平成9年4月18日撮影



第5図 西久保1遺跡 発掘調査・試掘調査範囲全体図

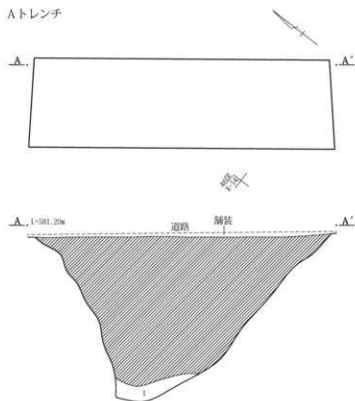


第6図 西久保1遺跡発掘調査範囲全体図



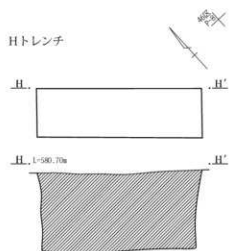
第7図 西久保1遺跡平成29年度調査範囲全体図

Aトレンチ

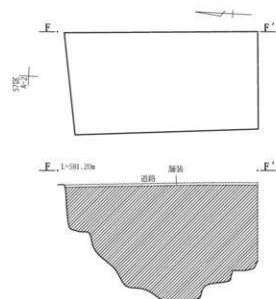


1 10YR3/3 暗褐色土 均質土 白色軽石 微量

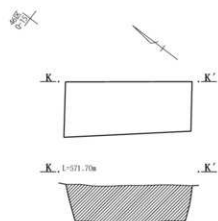
Hトレンチ



Fトレンチ



Kトレンチ

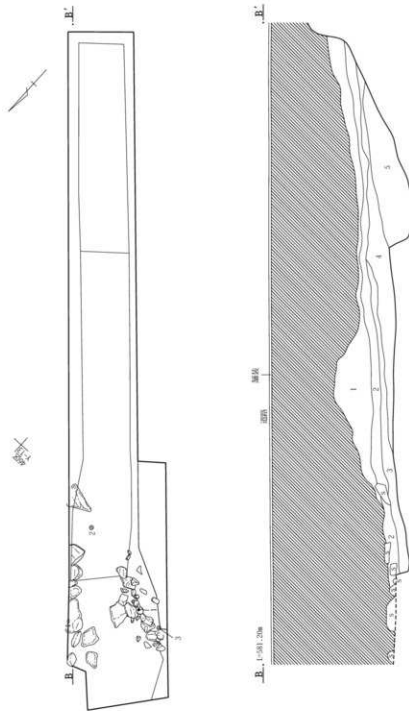


0 1:80 2m

第8図 A・F・H・Kトレンチ

0 1:80 2m

第9図 Bトレンチ



- 1 埴土
 - 2 甲冑土
 - 3 黒色土
 - 4 赤色土
 - 5 灰褐色土
- 1 00K02 甲冑土 埴土
 2 00K01 甲冑土、ロームブロックが多く混じっている
 3 00K02 黒色土、地土層と同様
 4 00K04 赤色土、ロームブロックが少量混入
 5 00K03 土壌、灰褐色土、ローム土に礫が少量混入されている

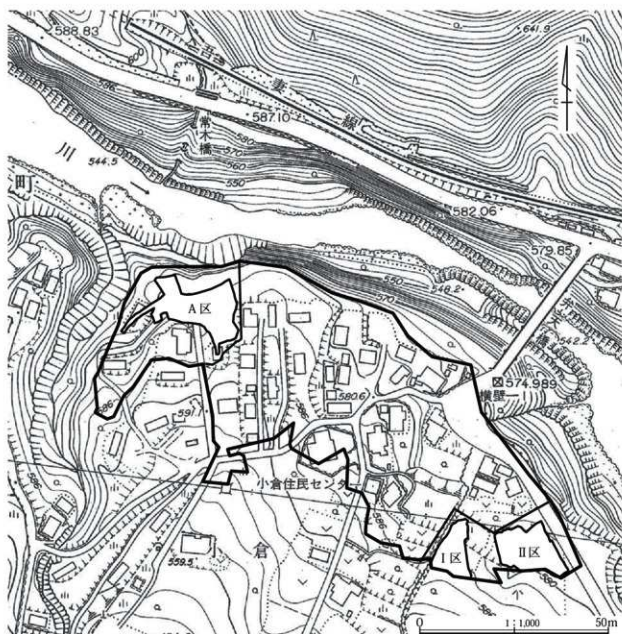
第3章 西久保V遺跡

第1節 調査経過と調査概要

西久保V遺跡は2次にわたって発掘調査が行われた。前章でも述べたように、本遺跡は、平成26年度の水没地区事前試掘調査で新たに周知された遺跡である。それまで横壁西久保地区には、西久保I～IV遺跡が周知されていたが、あらたに本遺跡が西久保V遺跡として登録されることになった。

平成28年10月に1次の発掘調査が行われた。対岸で調査している中棚II遺跡の調査担当者を2名とした調査班があたり、2,649㎡を調査対象面積とした。調査期間は約1ヶ月間を充てた。遺跡範囲の西端にあたり、2面調査を基本に調査を進め、天明泥流下面の水田遺構の存在と下面より縄文時代包含層を検出している。

平成29年10月に2次調査を着手した。下原遺跡より担当者2名がまわり、調査班1班で4,096㎡を調査対象に



第10図 西久保V遺跡I・II区(平成28年度調査)及びA区(平成29年度調査) 長野原町都市計画図を使用

調査日誌抄	
平成28年	
10月3日(月)	調査着手。バックホウ(0.7)による表土掘削
1区1面目	遺構精査
10月6日(木)	2区1面目 表土掘削 1区1面目 空撮準備 2区1面目 遺構確認作業
10月7日(金)	1区・2区1面目 空撮
10月14日(金)	1区2面目 トレンチ調査 2区2面目 包含層調査
10月24日(月)	2区2面目 トレンチ調査 プラント・オパール分析試料採取
10月26日(水)調査終了	
平成29年	
10月2日(月)	調査着手。安全フェンスなど設置 バックホウ(0.7)による表土掘削
10月10日(火)	1号トレンチ調査
10月17日(火)	泥流除去・As-A検出作業 調査区内排水作業
このころ、台風接近のため降雨が続き作業は断続的	
10月30日(月)泥流除去・As-A検出作業	
11月10日(金)	トレンチ掘削作業 1面目 空撮 2面目 トレンチ調査、遺構確認作業
11月16日(木)	2面目 トレンチ調査、遺構確認作業 遺構調査(土坑)
11月17日(金)	調査終了
11月20日(月)見回りなど調査区安全保全作業を継続	
12月4日(月)	埋戻し開始
12月19日(火)	埋戻し・整地終了

した。遺跡範囲の東端にあたり、天明泥流下面と土坑を検出した。

第2節 整理業務の経過

西久保V遺跡の整理は平成30年8月から、(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団で行われた。整理担当者1名があたり、12月までの5ヶ月を整理期間とした。出土遺物である縄文土器の資料化を主に進め、同時に遺構図及び写真資料の整理を行った。報告書は、平成29年に発掘調査された西久保1遺跡と合冊で、事業団報告書第655集、八ッ場ダム報告書65集として刊行した。

第3節 調査方法

1 調査の手順

遺跡の現況は宅地・畑・道路であった。発掘調査は平成28年度と平成29年度に行われたが、両年度の調査とも、バックホウによる表土掘削を行い、天明泥流下面の検出に努めた。表土、天明泥流除去後、作業員による天明泥

流下面における遺構確認を進めたが、浅間A軽石(As-A)に関しては、完全に除去せず、畑サクの堆積とサクの方向を強調する調査方法を採用した。

両年度調査においては、当地域に顕著に見られる天明泥流下の畑は良好には検出されず、自然地形の凹地に溜まる浅間A軽石が点在する様相が示された。しかしながら、平成28年度1区の調査では、浅間A軽石の堆積が地点的ながら、水田跡と捉えられる断面を観察している。

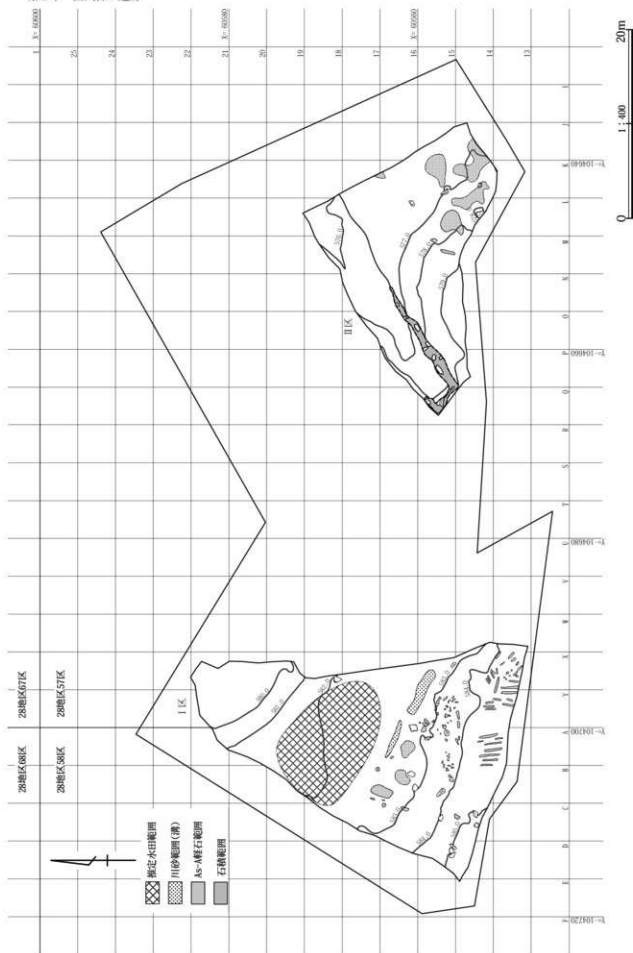
天明泥流下の文化層調査後は、下面の黒色土を掘り下げ、下位の文化層調査に移行している。対象は竪穴遺構や遺物包含層の調査が主となり、八ッ場ダム調査地域では、天明泥流下面の遺構数を凌駕するほどの縄文時代遺構数は珍しくない。この面の調査方法は、平野部で行われる通常の調査と差は無く、確認面を定め、竪穴遺構に際しては遺構番号を付し、平面記録と断面記録を取る。出土遺物に関しては、その遺構番号を付し、さらに平面図面上に出土位置を記録したのものについては個別番号を付し、標高を測定して取り上げた。遺構外から出土した遺物については、後述するグリッド単位で取りあげた。さらに平面図に出土位置を記録した遺物は、遺構出土のものと同様に個別番号を付し取りあげた。

平成28年度調査では、竪穴遺構は確認できなかったものの、Ⅱ区北側で、縄文時代中期～晩期の遺物包含層を得る事ができた。また、平成29年度は土坑1基が検出されている。

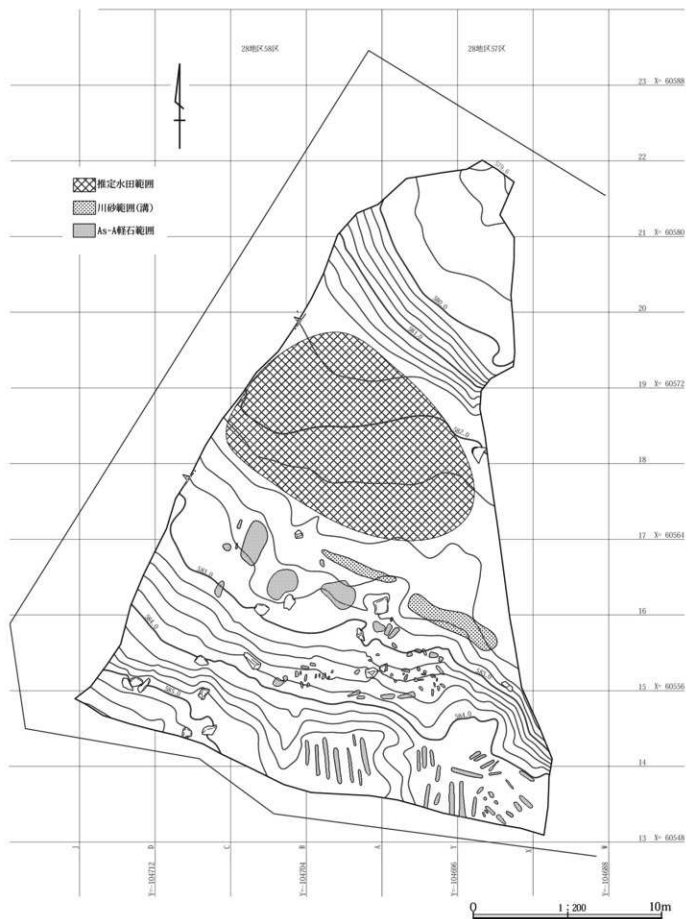
遺構測量は、主に測量会社に委託してデジタル化して記録をとった。縮尺については、各遺構の規模に即して柔軟に対応したが、本遺跡の場合、土坑等の個別図は1/20、トレンチなど平面記録は1/40、天明泥流下面に関しては1/100ないしは1/200で全体図として記録した。断面図はすべて1/20で記録した。

遺構の個別写真は、各調査担当者によるもので、主にデジタルカメラ35mmと6×7判モノクロームフィルムを用いた。全体写真はドローンによる空撮を主としており、その際はデジタルカメラによる撮影である。

なお、平成28年度の調査で得られた水田跡断面に対して、植物珪酸体分析(プラント・オパール分析)を委託した。



第11図 平成28年度調査区(1・2区)第1面(天明流下)全体図



第12圖 Ⅰ区第1面(天明泥流下)全体圖

第4節 検出された遺構と遺物

1 概要

本遺跡の調査は、ハッ場ダム調査において最初の発掘調査となる。平成26年に文化財保護課による試掘調査により周知され、平成28年、29年に、(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査が行われた。

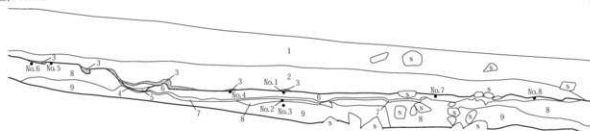
本遺跡は吾妻川右岸にあたり、吾妻川が北側に蛇行して形成された、舌状に突出した中位河岸段丘面に位置している。発掘調査された遺構、遺物はやや希薄で、天明泥流下面の水田跡と目される箇所と縄文時代包含層、時期不明の土坑1基である。

第1面調査である天明泥流下面の調査では、浅間A軽石の残存状況が悪く、良好な遺構の検出は果たせなかった。平成28年度I区において、水田と推定される断面が観察され、植物珪酸体分析を加えた。

第2面調査においても、竪穴建物など集落跡を構成する主要な遺構群は検出されなかった。明瞭な遺構としては平成29年度調査における土坑1基が挙げられるが、出土遺物に恵まれず、詳細な時期や性格の確定にまでは至らなかった。また、平成28年度調査のI区においては、縄文時代から弥生時代の遺物集箇所を調査する事ができた。縄文時代中期前葉～弥生時代中期前葉と時間幅があるが、出土土器は概ね縄文時代後期前葉に集中する傾向が見られ、周辺遺跡との関連性も示唆された。

本節では、調査された遺構・遺物の概要を述べるが、調査面毎の記述を年度順に記載していきたい。

△、1=983.00m



- 1 暗褐色土 表土。大型垂直礫を含み、しまり弱い。
- 2 にぶい褐色土 天明泥流。大小の礫を多く含む。しまり弱い。
- 3 褐色軽石 浅間A軽石(As-A)。地点的な堆積。やや粒度が粗い。
- 4 灰白色砂礫 水性堆積物。粘質土上のラミナ状を呈す。
- 5 灰黄色砂質土 水性堆積物。黒色土小塊を混在する。粒子は細かい。

2 第1面目(天明泥流下)の調査

(1) 平成28年度の調査

当該年度の発掘調査は西久保V遺跡の東端にあたり、調査区が東側をI区、西側をII区とし2箇所に分かれている。I区とII区の間は、県教委の試掘調査の結果、浅間A軽石(As-A)の堆積層以下まで攪乱されており、第1面調査の対象からは除外した。

前章でも述べたように、ハッ場ダム調査地域の天明泥流下の発掘調査は、天明泥流の大部分を重機で掘削し、最下層を人力による除去作業を行い、その際、凹地に堆積する浅間A軽石は意図的に残す。これは、例えば畑サクに堆積する浅間A軽石を残すことにより、サクの走行や間隔などが明瞭に判断できる利点がある。泥流除去後に浅間A軽石が検出されない箇所は、泥流速度が速く、軽石を地表面と共に削平した例か、あるいは浅間A軽石降下時に、屋根などの遮蔽物が存在していた可能性を示唆する。後者は、建物一層敷遺構として位置付けられ、当地域でも多くの屋敷群が調査されている。

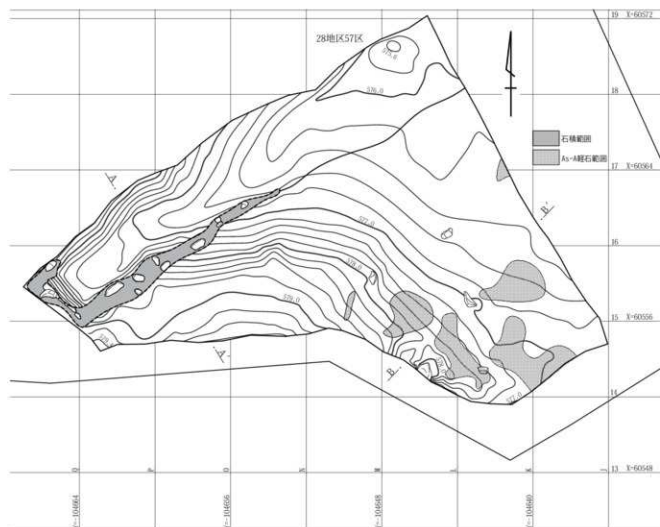
西久保V遺跡の発掘調査でも、泥流を重機で除去し、その後人力による浅間A軽石や天明地表面の検出作業を重ねた。以下、平成28年度I区、II区、平成29年度A区の調査概要を述べる。

天明泥流下のI区は、南高低の南側から北側へ、比較的強い傾斜地形を示していた。南側と北側の傾斜が強く、中央部分がやや緩やかで平坦地形に近い様相を示していた。全体感はやや平坦と段差を数箇所設けるひな壇状の傾斜地形が広がる。

浅間A軽石の残存状況は極めて悪かった。南半に地点

△

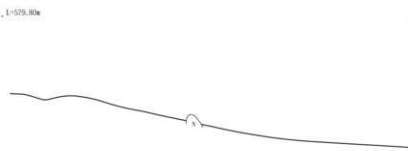
第13図 I区第1面(天明泥流下)水田推定箇所土層図



△A, 1=579.80m



△B, 1=579.80m



△B'

0 1:100 5m

第14図 II区第1面全体図及び断面図

的な堆積が認められるのみで、北半には全く認められなかった。おそらく、傾斜地形が強いため、西側から東側へ流れた浅間泥流によって多くが流失したものと捉えられた。そのため、基盤礫である大型垂角礫が露出した箇所も多く、天明泥流下の原地表面の観察が果たせた地点は少ない。その中で、調査区南側の57区X～58区A-13・14グリッド周辺の狭小な平坦地では、範囲は狭いながら筋状に堆積した浅間A軽石が検出された。溝状に数条が平行しており、間隔も40～80cmを測ることから畑サクの可能性が示唆されたが、南北の走行を主としていることや小規模に止まることから、畑跡としての位置付けは控えた。浅間A軽石は、南側の斜面地形にも点在するが、まとまりをもたず細などの遺構を示唆する例では無い。おそらく、斜面凹地に堆積した例と考えられた。中央部にかけて、浅間A軽石は小範囲で点在していた。同時に平坦地南東部(57区X～58区A-15・16グリッド周辺)で川砂の堆積が2箇所にわたり、帯状で北西に向けた走行で確認することができた。地形傾斜に直交する走行であり、幅約60cm～1mの範囲で堆積していた。掘り込みに堆積する比ではなく、厚さは1・2cmに満たず、溝としての遺構認定には至らなかった。しかしながら、北西への延長には後述する水田南側の凹地が確認されており、同様の例とすれば、天明泥流下の水田跡南端に設けられた浅い溝—水路の痕跡と想定できよう。

さて、中央部の平坦地形の浅間A軽石の堆積はごく少量が地点的に堆積するのみである。その中で、調査区西側の土層観察(第13図)において、幅50cm程の凹地にA軽石の堆積を局所的に見る事ができた。さらに下層には、水性堆積と思われる砂質土が確認され、あるいは水路状の施設を想起させた。土層では、水路状の凹みの南に僅かながら畦状の高まりがあり、延長の南側は黒色土(6層)が6mにわたり水平な様相で確認できた。これらの要素から、中央部の平坦地形は、水田面の痕跡によるものと理解された。残念ながら、浅間A軽石の残存状況が悪いため、平面的な把握が果たせず、畦畔や水口、田面の様相など詳細は不明である。前述したように、溝状の川砂が堆積した箇所が、調査区西壁断面で確認された水路状の凹みの延長で、水田南側に沿った水路あるいは溝とした位置付けも可能であろう。ただ、畦畔や水口などのその他の施設を見ないため、本書では、水田面の範

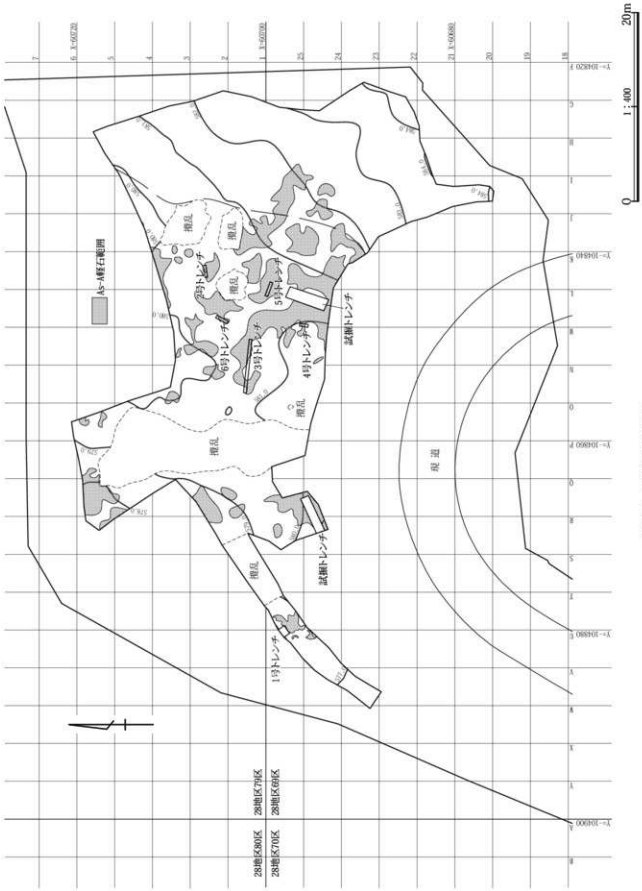
圍を推定するに止めておきたい。なお、西久保地区の地勢として、明治6年作成の「壬申地勢図引絵図」によると、当地域は「中田」が僅かに存在し「下田」、「下々田」、「中畑」、「下畑」に占められる水田・畑作地域とした記録が残る。天明泥流被災前の土地利用様相は不明だが、地形や水利などの要件から、被災前後の土地利用の差は大きくは無いと思われ、本遺跡で想定した水田面も、その存在は可能性がある。なお、調査区西壁の土層を対象に、植物珪酸体分析を行っている。次節で詳細を掲載したい。また、植物珪酸体分析試料採取地点である西壁断面であるが、浅間A軽石が堆積した直下の層位を優先して、試料を採取した。

I区北側からは、浅間A軽石の検出は果たせなかった。北側への急傾斜地形であり、おそらくA軽石は天明泥流によって、旧地表面とともに削られたと考える。天明泥流除去後は、基盤である大型の垂角礫が数多く露出していた。

II区は調査区東端にあたる。I区とは30mほどの距離にある。その間は、前述のように試掘調査の結果、浅間A軽石堆積層以下までの掘削が広範囲に認められ、第1面調査の対象からは除外している。

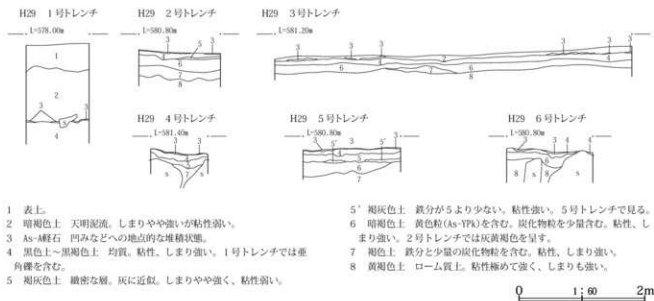
天明泥流後の地形は、凹凸のある斜面地形が広がった。全体感では北側へ下がる急傾斜地形を示すが、北西側に幅4.8mほどの溝状の凹地が北東に向かって下る。傾斜に沿って、西側から南東側へ大型の角礫、垂角礫が集まり、石積みの様相を示していたが、石垣・土留めなどの人為的な遺構とは判断できず、自然営力による集石痕跡と判断できた。また、調査区南東側は、若干傾斜が緩やかになり、浅間A軽石が不規則に地点的な堆積をしていた。これらも、遺構に伴う例では無く、僅かな凹地など自然地形に堆積したものと考えた。

以上のように、平成28年度の天明泥流下の調査では、I区において水田面の推定地が検出できた。西壁断面で得られた水路、畦畔、田面の様相から水田跡として位置付けて調査した。残念ながら、平面的に畦畔の状況や水口が捉えられず、水田規模や田面の様相など詳細は捉えられなかった。なお、植物珪酸体分析においては、イネ科の高い数値が得られており、水田跡としての補充材料として評価されている。

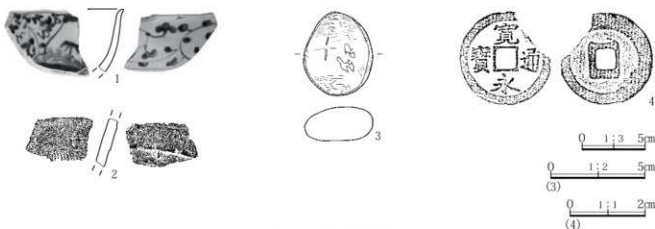


第15図 A区第1面全体図

第3章 西久保V遺跡



第16図 A区各トレンチ断面図



第17図 第1面出土遺物

(2) 平成29年度の調査

2年次の調査になる。西久保V遺跡の西端にあたる。西側に吾妻川に注ぐ小倉沢の河川屋敷が、北側は吾妻川の急峻な段丘岸も近接する。

県教委試掘によるデータを元に発掘区を設け、天明泥流の除去作業を行い、浅間A軽石の検出に努めた。調査区内の天明泥流下の地表面としては、全体的に南東から北西への強い傾斜が認められ、特に南東部分の傾斜が強く、中央部はやや緩やかな傾斜地形を呈す。また、調査区中央部を中心に大きく数箇所の後世の攪乱坑が認められた。表土～天明泥流の堆積が1m前後とやや薄く、そのため後世の攪乱を受けやすい地点でもある。

浅間A軽石の残存状況は、中央部分が比較的良好に残っていた。おそらく傾斜が緩やかなため、天明泥流の

影響が少なかったであろう。しかしながら、基盤層の大型角礫が露出する箇所も多く、浅間A軽石が角礫の間に堆積する状況であった。そのため畑、水田面などの明瞭な遺構は確認できなかった。おそらく、耕土としての黒色土の堆積・発達が弱く、耕作地としては選択されなかったであろう。

なお、出土遺物はごく僅かで、播り鉢破片(1区)と染付碗破片(A区)、寛永通寶1点、軽石と推される小型円礫1点を見る(第17図)。

平成29年度の天明泥流下の調査は、浅間A軽石の検出は果たしたが、残念ながら遺構は確認できなかった。畑跡は、小倉沢の対岸にある西久保IV遺跡で調査されていることから、本遺跡で畑跡が営まれなかった要因も課題の一つとなる。

西久保V遺跡の天明泥流下の生活面では、顕著な遺構や遺物の検出が果たせなかった。平成28年度調査の1区では、調査区中央西壁に水田面を示唆する土層が確認され、植物珪酸体分析でも、水田を示すイネ科の珪酸体が一定量抽出されている。しかしながら、水田として必要な畦畔や水口は確認されず、平坦面の広がりも見られなかった。Ⅱ区及び平成29年度調査のA区は、浅間A軽石の広がりを見る事ができたが、水田、畑といった遺構は認められなかった。おそらく、強い傾斜と耕土としての黒色土の発達が弱く、基盤礫が多く露出しているため、農地からは敬遠されたものと考えた。

さて、東に接する西久保IV遺跡も傾斜の強い南側の高標高部分では基盤礫の露出が著しく、畑サクの検出が果たせなかった。傾斜の弱い北側の調査地点でも、畑サクの残存状況が悪く、畑の耕作単位など詳細が把握できなかった。報告書では調査区南側は、畑範囲一耕作範囲からは外れた地点として位置付けており、さらに北側で検出された畑跡そのものも残存状態が悪いことから、休耕畑あるいは廃棄畑の可能性を指摘した。そのことから、西久保V遺跡で畑跡が検出されなかったことは、黒色土の堆積がやや薄く、基盤礫が露出する土地柄が、畑作からは敬遠されたと解釈できよう。僅かに、平成28年度で調査された1区で水田面の推定範囲が確認されたが、こちらも、水田面特有の平坦地形の広がりは弱く、明瞭な畦畔や水口を見る事ができなかったため、水田と位置付けられたとしても、廃棄・放棄された水田面であった可能性もある。

このように、西久保V遺跡の天明泥流下生活面は、畑作も施されず、水田としても広がりを見せないことから、農地ではなく荒地として、放棄されていた場所の可能性が高い。

3 第2面目の調査

(1) 平成28年度の調査

天明泥流下面の調査後に、1区に関しては浅間A軽石下層の黒褐色土や黒色土層、暗褐色土層までを掘りぬいて試掘調査を行った。その結果、傾斜地形の強い2号トレンチからは、黒色土と暗褐色土が比較的安定的な層準をしめしていたが、平坦地形に近い箇所に設定した3号トレンチでは、黒色土の堆積は薄く、下位層は大型亜角

礫が大量に混在する様相をしめしていた。両トレンチからは、遺構、出土遺物は見られず、1区に関しては下位文化層の存在は認められなかった。

57区遺物集中分布

Ⅱ区の調査では、西側調査区が県教委試掘で縄文時代の遺物がまどまって出土した地点である。西側の上層は攪乱層が広く覆っていたが、下位黒色土中より遺物が出土するため、縄文時代遺構の可能性が高まるため、調査対象となった地点である。なお、東側の調査区は1号トレンチと4号トレンチによる試掘調査で、下位文化層の有無を確認したが、両トレンチとも、低地特有のシルト質黒色土が覆い、遺構、遺物ともに検出できなかったため、Ⅱ区東側は下位文化層の存在は無いものと捉え、調査対象から除外した。

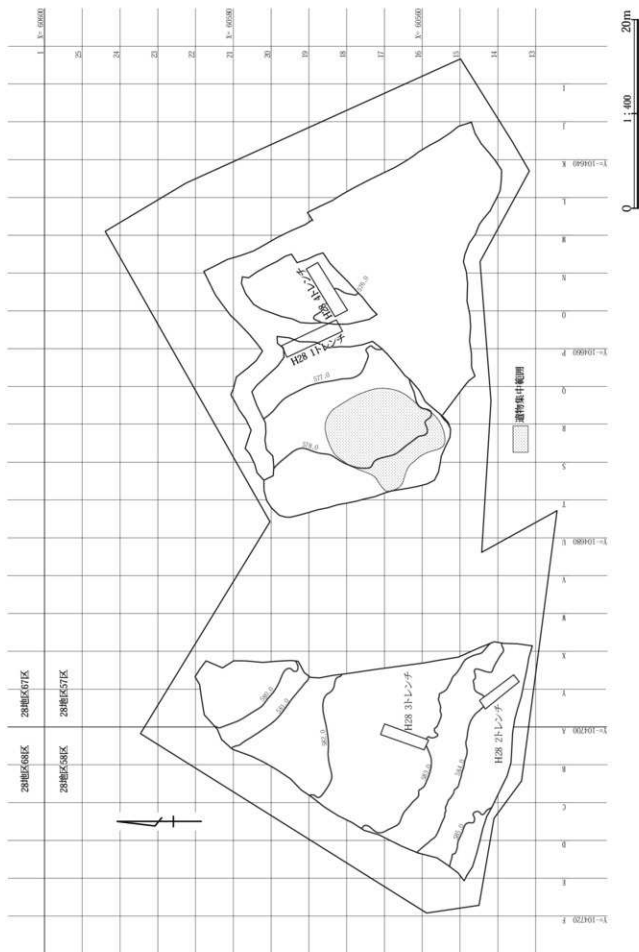
Ⅱ区西側では、浅間A軽石の残存は認められず、攪乱層が覆っていた。県教委試掘では下位層である黒褐色土や暗褐色土から縄文時代土器片を中心とした出土遺物が見られたため、当地区はトレンチ調査ではなく、当初より面的に広げて掘り下げる調査方法をとった。

Ⅱ区西側の調査は、黒褐色土を主体に精査を重ね、多量の自然礫が混在するなか、比較的多くの土器片が出土した。その規模は、南北12.8m、東西10.0mの範囲で西高東低の調査区内の地形に沿っており、緩やかな傾斜地形に基盤礫よりやや浮いた状態で出土が見られた。遺物は一定の出土量が見られたため、遺構の存在を想定し、平面確認を主体に調査を進めた。

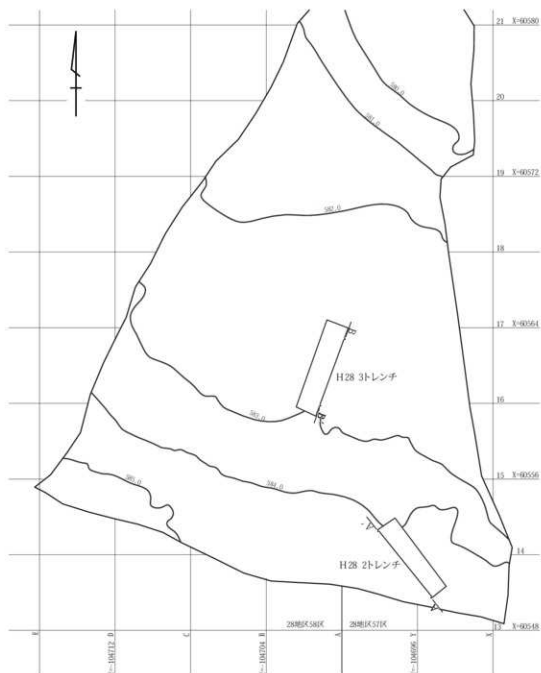
しかしながら、竪穴遺構などを示唆する焼土や掘り込み、さらに列石や敷石など特徴的な配石遺構などは確認できず、遺物の集中分布としての位置付けが妥当と思われた。なお、出土遺物の多数が縄文時代後期初頭～前葉に比定される土器片である。完形個体は見られず、すべて破片状態で出土した。石器の出土も極めて少なく数点を見るのみである。

また、後期土器片に混じて、縄文時代中期、後期中葉、晩期の土器片が出土し、さらに弥生時代中期前葉の資料も出土している。遺物集中分布としての時間幅は、断続的ではあるが縄文時代中期前葉から弥生時代中期前葉までであり、比較的長期間の遺物集中と捉えられよう。

遺物の出土分布を概観すると、縄文時代中期に比定される土器片は集中分布の中央部分で散漫な出土分布を示



第18図 Ⅰ・Ⅱ区第2面全体図



H28 2トレンチ土層

・A, 1-584.30m

・A'



H28 2トレンチ土層

- 1 黒色土 均質でやや軟質。小型の亜角礫、黄色土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 基盤層。能く小型の亜角礫を多量に含む。

0 1:60 2m

0 1:200 10m

H28 3トレンチ土層

・B, 1-583.00m

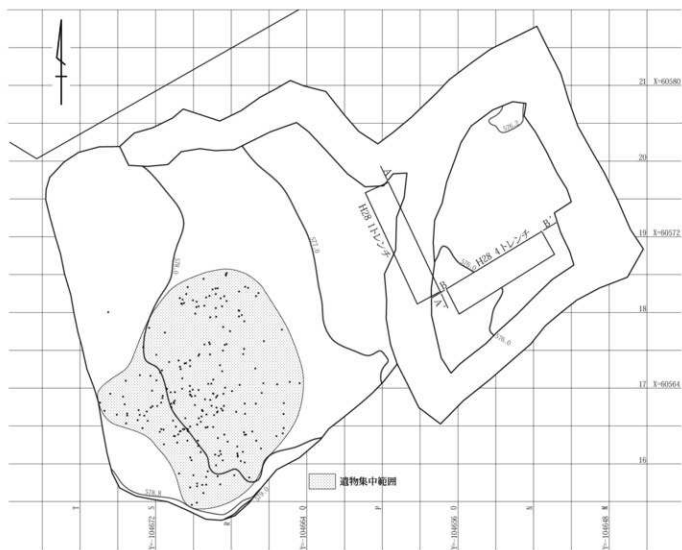
・B'



H28 3トレンチ土層

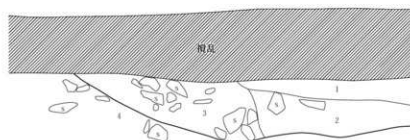
- 1 As-A 調査区内では地点的に堆積する。
- 2 黒褐色土 均質。上層が錆化する。
- 3 明黄褐色土 明るい。細円礫による砂利層。錆化する。
- 4 明黄褐色土 砂が混じる。細円礫を主体とする。
- 5 黒色土 均質でやや軟質。小型の亜角礫・黄褐色土粒を少量含む。
- 6 暗褐色土 基盤層。能く小型の亜角礫を多量に含む。

第19図 I区第2面トレンチ配置図及びトレンチ土層図



H28 1トレンチ土層

A., L=577.50m



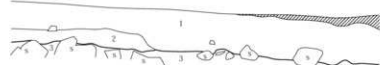
A'

H28 1トレンチ土層

- 1 黒色土 シルト質、小礫、白色粒を含む。
Q～S-15～18グリッドの遺物包層。
- 2 黒褐色土 大型の垂直礫を多量に含む。
遺物は含まない。
- 3 暗褐色土 垂直礫と黄褐色土塊を含む。
- 4 明黄褐色土 段丘面を形成する基盤層。
大型の垂直礫を多く含む。

H28 4トレンチ土層

B., L=576.20m



B'

H28 4トレンチ土層

- 1 黒色土 シルト質、垂直礫を少量含む。
谷地の覆土。
- 2 黒色土 シルト質、垂直礫を多量に含む。
砂質土を部分的に含む。
- 3 褐色土 基盤層、ややグライ化した土塊。
垂直礫を多量に含む。

0 1:60 2m

0 1:200 10m

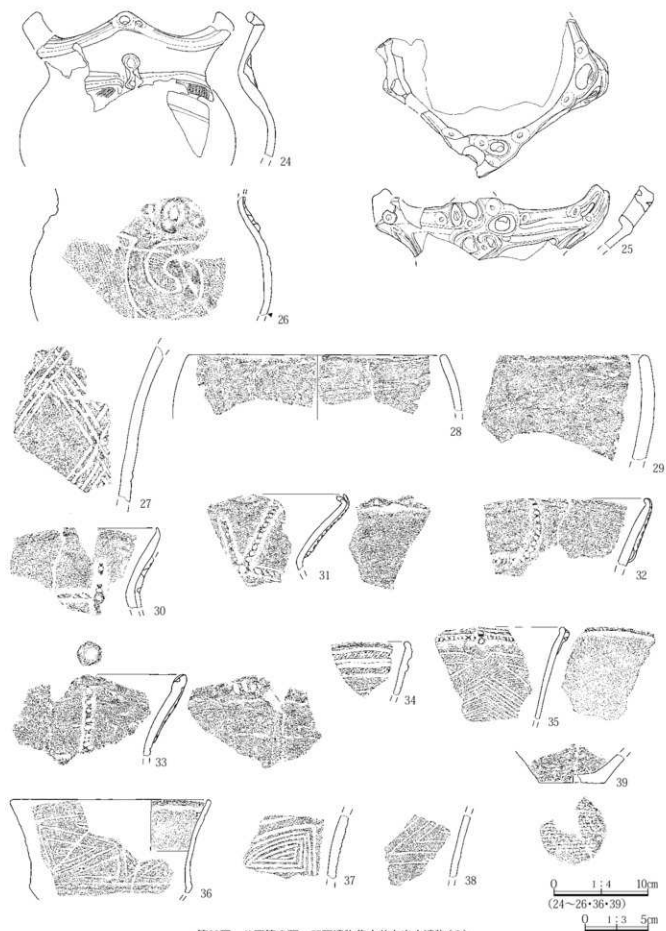
第20図 II区第2面遺物集中分布及びトレンチ配置・土層図



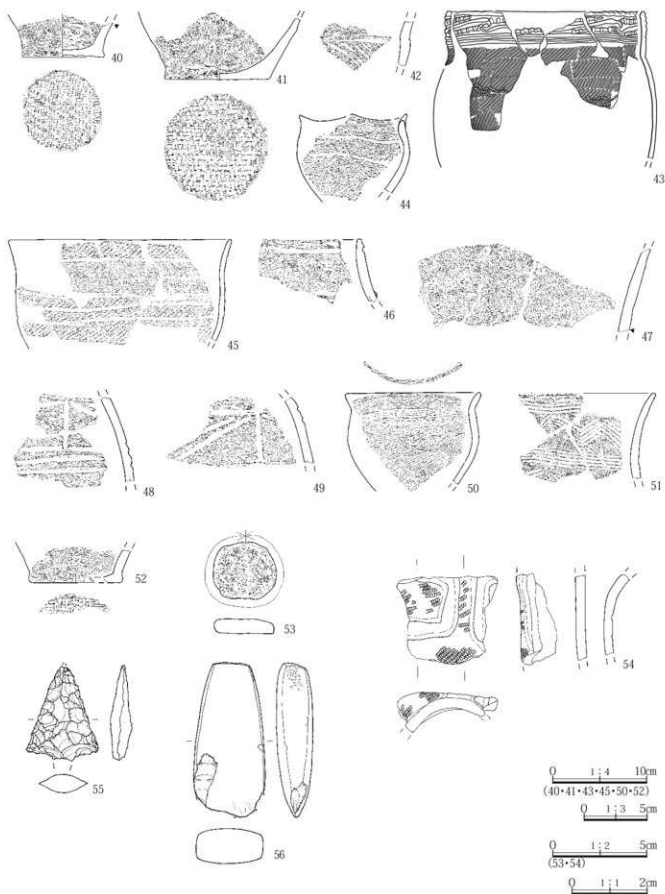
第21図 II区第2面 57区遺物集中分布(遺物縮尺は任意)



第22図 II区第2面 57区遺物集中分布出土遺物(1)



第23図 II区第2面 57区遺物集中分布出土遺物(2)



第24図 II区第2面 57区遺物集中分布出土遺物(3)及5遺物外出土遺物

す。断面図に投影した状況も、比較的上層に集まる傾向を見せる。縄文時代後期初頭～前葉の土器片は、集中分布全体に広がる傾向が見られるが、中央部分から西側により集中する傾向が見られる。これは集中分布としても高標高部分にあたり、廃棄・流入の傾向が読み取れよう。断面分布でも中層から上層にかけて東側への傾斜に沿った出土状態を示している。地形に沿った出土状態からも、竪穴遺構ではなく流入・廃棄の所産と考えられよう。また、列石や配石遺構からの出土ではなく、大量の基盤礫の間からの出土である。その中で、13、24～26などの堀之内1式の大破片が調査区中央でまとまる傾向は注意したい。断面分布でも中層にまとまる様相であり、単純な流入・廃棄ではなく、目的性を持った意図的な廃棄行為が想定されよう。

また、晩期土器資料である43は西側で単独で出土しており、その他の時期とは別要因による流入・廃棄が想定されよう。弥生時代中期土器片は少量ながら集中分布北側に偏る。縄文時代資料とは、別の行動パターンによる廃棄も想定されよう。

このように、西久保V遺跡Ⅱ区北側からは、縄文時代中期から弥生時代中期にかけて、土器片資料が一箇所に集中して出土していた。出土土器の時期は、本遺跡周辺の吾妻川右岸中位段丘における、縄文時代や弥生時代集落の時期に合致するものと評価されよう。この中で晩期資料や弥生中期の出土は、小倉～西久保地区では希少例であり、西久保I遺跡で弥生時代中期の土器片が数点出土するのみで、まとまった例としては、横壁中村遺跡に類例を求めざるを得ない。横壁中村遺跡とは小河川である深沢を隔て、約1kmと近距離にあるが、晩期以降の集落領域の広がりを想起させる出土状態である。おそらく、本遺跡や西久保I遺跡は、横壁中村遺跡の弥生時代集落の外縁領域に位置し、居住痕跡を持たない行動範囲内にあるものと考えられる。

近接する遺跡である西久保I遺跡では中期集落、西久保IV遺跡では後期掘立柱建物跡が検出されている。本遺跡は西久保I遺跡の北端にあたり、おそらく土器などの廃棄・流入の範囲と思われる。しかしながら、西久保I遺跡で調査された主な出土遺物では、加曾利EⅢ式やEⅣ式が見られる。これは西久保I遺跡46区1～5号住居などの遺構出土土器群が主体となる時期様相である。反

面、本遺跡の遺物集中分布からは加曾利EⅢ式やEⅣ式が出土しておらず、この現象は時期によって、廃棄・流入のパターンに差が生じていると思われる。

言い換えれば、本遺跡の遺物集中分布は小規模ながら、廃棄・流入の行為がある程度反映しやすい様相を示す。縄文時代中期前葉以降、小規模ながら廃棄対象地として選ばれ続けた本遺跡のⅡ区北側であるが、周辺集落がピークに達する中期後葉や末葉において、廃棄対象地としては選ばれなかったようだ。このような状況を踏まえると、本遺跡の遺物集中分布は自然的営力の流入による所産ではなく、意図的な選択行為を伴う廃棄行動を示唆する遺構として位置付けておきたい。いわば、竪穴遺構に反映されない、行動パターンを具体化した遺構と考えておきたい。

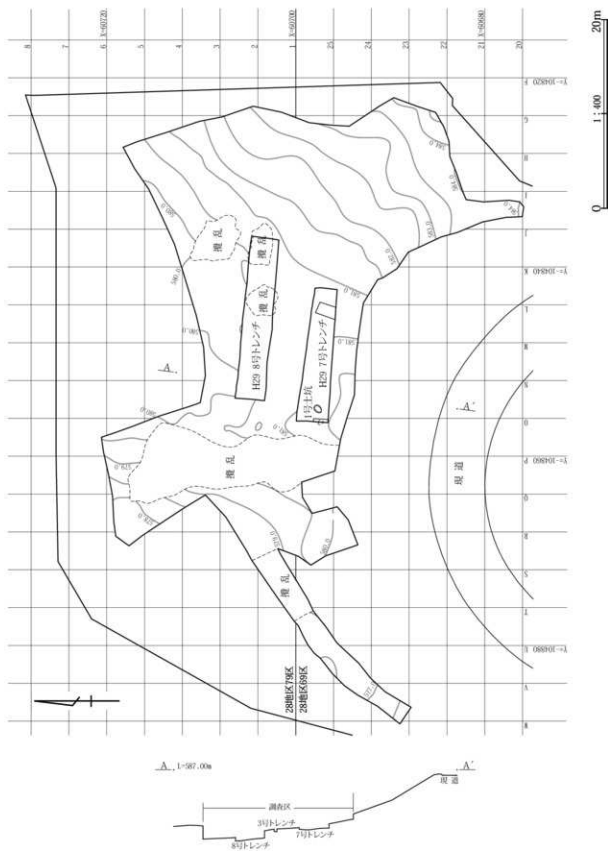
西久保地区の後期初頭～前葉の遺構としては西久保IV遺跡の掘立柱建物跡2棟があげられよう。出土遺物に恵まれず、詳細は不明だが、敷石住居などの居住痕跡は見られず、掘立柱建物のみが占地する出土遺物の貧弱な小規模な集落である。西久保V遺跡の後期初頭～前葉のまとまった出土状況は、西久保IV遺跡に相応はせず、おそらく、西久保V遺跡に対応する集落遺跡としては横壁中村遺跡や山根Ⅲ遺跡など、段丘面東側に展開する集落と思われる。

第3表 西久保V遺跡未掲載遺物数量一覧

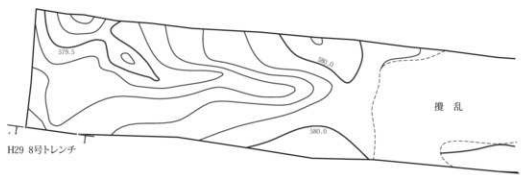
出土位置	土器型式	点数
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	諸磯2式	1
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	諸磯2式	1
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	五輪ヶ台式	3
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	阿玉台1a式	3
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	阿玉台1b式	3
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	阿玉台Ⅱ式	27
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	「新巻船型」	3
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	藤取2式	9
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	藤取3式	7
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	加曾利EⅠ式	2
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	中期中層	46
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	曾利2式	12
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	唐草文系土器	1
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	称名寺Ⅱ式	76
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	堀之内1式	467
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	堀之内2式	101
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	加曾利BⅡ式	14
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	後期前半～後期中層	2607
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	後期後半	1
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	大淵B式	9
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	弥生中期	250
57区(Ⅱ区) 遺物集中分布	不明	28

(2) 平成29年度の調査

平成29年度のA区調査も、天明泥流下面調査後、調査

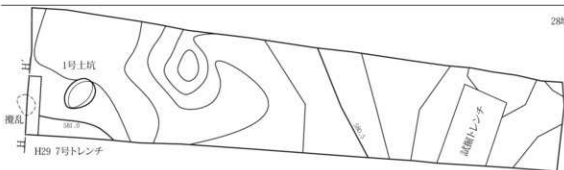


第25図 A区第2面全体図

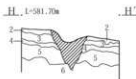


28地区79区

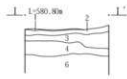
28地区69区



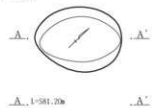
H29 7号トレンチ



H29 8号トレンチ



69区1号土坑



7・8号トレンチ土層

- 1 As-礫石
- 2 黒褐色土 均質土、粘性、しまり強い。
- 3 褐灰色土 均質土、炭化物を少量含む。粘性、しまり強い。
- 4 明黄褐色土 炭化物を少量含む。粘性、しまり強い。
- 5 暗褐色土 黄色粒(As-YPK)、炭化物を少量含む。粘性、しまり強い。
- 6 黄褐色土 ローム質土、粘性、しまり強い。

1号土坑土層

- 1 明黄褐色土 粘性、しまり強く、炭化物を少量含む。



第26図 A区第2面トレンチ平面図、土層図及び69区1号土坑

区中央部の緩傾斜地形を選び、2箇所の試掘トレンチを設定して下位文化層の有無を探った。これは、調査区東側、西側とも傾斜地形が極めて強く、また基盤礫の露出が著しいため、さらに、各所に攪乱坑が大きく開けられており、下位文化層の存在は望めないと判断したためである。急傾斜面や攪乱坑を避けて2箇所のトレンチが設定された。

両トレンチとも、基盤に黄褐色ローム質土が堆積しており、上位段丘面に似た様相を示していた。ただ、大型の角礫、垂角礫といった基盤礫が露出しており、平面的な遺構確認が困難に陥った。

その結果、7号トレンチ西側で、小型の土坑が確認された。それ以外の遺構は確認されず、遺物の出土も見られなかった。

(69区1号土坑)

69区O-25グリッドに位置する。周辺は北側への傾斜地形が広がり、近接遺構も見ることができない。僅かに、西に接して小ピットがあるが、泥流を切る覆土であり、近・現代の所産と判断された。

黄褐色ローム質土上面で確認された。平面形は長軸を北東に設けた不整楕円状を呈し、断面形は浅い皿状を示す。平面規模は約92.0×68.8、深さは約24.2cmを測る。壁の立ち上がりも弱い印象で、底面も中央が凹むものの凹凸ある不連続面で構成される。

埋土は炭化物を含む明黄褐色土で、遺物の出土も見られない。

単独の検出であり、本遺跡の調査で唯一の土坑である。出土遺物は無く、特徴を持たないため、時期、性格は特定できない。天明泥流下面以下の調査によって得られたことから、近世以前の所産としか判断できない。

以上のように、第2面目の調査ではⅡ区西側の調査区で、北側への緩傾斜地形に、縄文時代中期～弥生時代中期の遺物集中分布を検出した。おそらく斜面に設けられた「捨て場遺構」に類した性格と思われる。各時期で散漫ながら集中分布が認められ、その中で縄文時代後期前葉の堀之内式が比較的充実する様相を示していた。また、縄文時代晩期前葉の土器や弥生時代中期前葉～後葉の土器片も見られた。さらに、各段階で平面分布の差も見られ、意図的な廃棄行為が想起される出土状態を示してい

た。また、各時期の様相からは、周辺の遺跡における同時期の集落遺跡を吟味する必要があり、東に近距離に著名な横壁中村遺跡が立地しており、ほぼ同時期の遺構・遺物が検出されている。また、南東に接する西久保I遺跡では中期集落跡、西に接する西久保IV遺跡では後期の掘立柱建物跡が調査されているように、本遺跡で得られた遺物集中分布は、周辺集落からの影響も強い。加えて、本遺跡では中期後葉から末葉の加曾利EⅢ式やEⅣ式が欠落しており、これは東接する西久保I遺跡の集落とは差が見られた。おそらく時期毎の廃棄パターンの差が具体化した例と思われるが、このことから、Ⅱ区遺物集中分布は当時の意図的な廃棄行為が類推できる遺構として位置付けられた。

A区2面目の調査は、急斜面地形や攪乱坑を避けて、設定したトレンチから、土坑1基を検出した。不整楕円状を呈する小型土坑で、遺物の出土も無く、形状、埋土に特徴を有さないため、詳細な時期、性格の特定にまで至らなかった。ここでは、天明泥流以前として判断したが、急斜面地形の遺構についても、様々な性格が想起される。埋土に炭化物を含むことから、周辺に焼成施設なども想定されよう。

第5節 分析

西久保V遺跡では、天明泥流下の調査で、水田面と思われる遺構を検出した。当地域では、天明泥流下の遺構としては、屋敷跡をはじめ道跡、畑跡などが調査されているが、水田跡の調査例は極めて少ない。これは、山間地の集落が広がる当地域の地理的要因であり、水田に適する平坦地形が限られるためである。その中で、本遺跡が位置する横壁地区は、最近まで地点的に水田が営まれていた地区である。前節にも述べたように、「壬申地券地引絵図」（明治6年）によると当地域には「中田」、「下田」、「下々田」が作られていた記録が残っている。

本遺跡の発掘調査では、天明泥流下の浅間A軽石(As-A)の残存状況が悪く、当時の地表面を面的に把握することができなかった。しかしながら、I区西壁断面で、水平に堆積する水田耕土層の層位と畦畔状の高まりが確認できた。畦畔状の高まりの外側には凹みが見られ、浅間A軽石や砂質土の堆積が認められた。この西壁土層の様

相から、水田面の存在を想定し補完資料の一つとして、植物珪酸体分析を行った。分析にあたっては、発掘調査中に事業団職員によって、8点の試料を1区西壁断面で浅間A軽石直下の地点を優先して採集して、その詳細な分析を株式会社古環境研究所に委託した。

分析の結果、8点の試料中、3点よりイネの植物珪酸体が検出され、うち2点からは水田耕作が行われていた判断基準値に近い数値が得られている。このことから、本遺跡の1区西壁付近の天明泥流直下では部分的に稲作が行われていたとする分析結果を得ている。

以下、分析報告書を掲載する。

西久保V遺跡植物珪酸体分析委託業務報告

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

西久保V遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字横壁に所在する。遺跡は、小倉沢によって形成された扇状地の端、吾妻川南岸の河床から35mほどのところに立地する。発掘調査により、天明泥流の直下層において水田耕作層とみられる堆積層が確認された。そこで、当該層における稲作の可能性を検討する目的で、植物珪酸体(プラント・オパール)分析を実施することになった。

2. 試料

分析試料は、天明泥流の直下の黒色土層(試料No.1、試料No.4、試料No.5、試料No.6、試料No.7、試料No.8)、その下位の鉄集積層(試料No.2)、さらに下層の地山層(試料No.3)で採取された計8点である。

3. 方法

植物珪酸体分析は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用

いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)する。
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加する。
- 3) 電気灰化法(550℃・6時間)により脱有機物処理を行う。
- 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)により分散する。
- 5) 沈底法により20 μm 以下の微粒子を除去する。
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラートを作製する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞(葉身にのみ形成される)に由来する植物珪酸体を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料1g中の植物珪酸体個数(試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズの個数の比率を乗じて求める)に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重(ここでは1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10 \cdot 5g)を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。

各分類群の換算係数は、イネ(赤米)は2.94(種実重は1.03)、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、ネザザ節は0.48、メダケ節は1.16、チマキザ節は0.75、ミヤコザ節は0.30である(杉山, 2000)。

4. 結果

検出された植物珪酸体は、イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科ササ属(ネザザ節型、メダケ節型、チマキザ節型、ミヤコザ節型)および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を第4表、第27図に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、植物珪酸体の検出状況を記す。

- 1) 天明泥流直下の黒色層(試料No.1、試料No.4～試料No.8)

イネは、試料No.1、試料No.4および試料No.6で検出さ

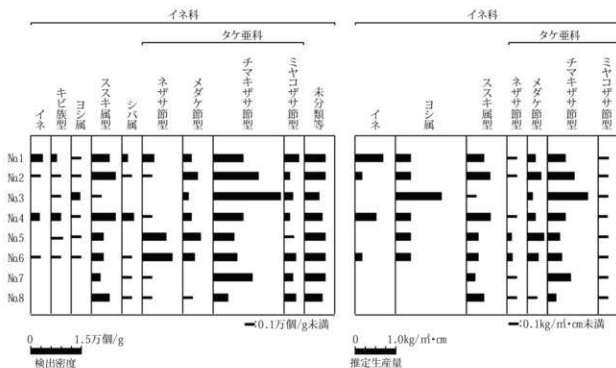
第4表 西久保V遺跡の植物珪酸体分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群 (和名・学名)	1区							
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8
イネ科	Gramineae(Grasses)							
イネ	Oryzasat iva	24	6		18		6	
キビ族型	Paniccaeatype	12	6	6	12	6	6	
ヨシ属	Phragmites	6	6	18	6	6	6	
ススキ属型	Miscanthustype	36	48	6	48	24	24	36
シバ属	Zoysia	12	6		12		6	6
タケ亜科	Bambusoideae(Bamboo)							
ネザサ節型	Pleioblastussect. Nezasa	12	6		6	24	30	6
メダケ節型	Pleioblastussect. Nipponocalamus	18	30	12	18	36	24	6
チマキザサ節型	Sasasect. Sasaetc.	60	90	133	60	42	48	78
ミヤコザサ節型	Sasasect. Crassinodi	30	12	18	12	6	24	18
未分類等	Unknown	42	42	30	36	42	42	36
植物珪酸体総数		252	252	223	228	186	216	168

主な分類群の推定生産量(単位: kg/m²・cm)

イネ	Oryzasat iva	0.70	0.18		0.53		0.18	
ヨシ属	Phragmites	0.38	0.38	1.14	0.38	0.38	0.38	
ススキ属型	Miscanthustype	0.44	0.59	0.07	0.30	0.30	0.30	0.22
ネザサ節型	Pleioblastussect. Nezasa	0.06	0.03		0.03	0.12	0.14	0.03
メダケ節型	Pleioblastussect. Nipponocalamus	0.21	0.35	0.14	0.21	0.42	0.28	0.07
チマキザサ節型	Sasasect. Sasaetc.	0.45	0.67	1.00	0.45	0.31	0.36	0.58
ミヤコザサ節型	Sasasect. Crassinodi	0.09	0.04	0.05	0.04	0.02	0.07	0.05



第27図 西久保V遺跡の植物珪酸体分析結果

れている。試料No.1では比較的高い密度であり、試料No.4でもやや高い密度である。キビ族型とヨシ属は、試料No.1、試料No.4～試料No.6で検出されているが、いずれも低い密度である。ススキ属型は、すべての試料で検出されている。試料No.4で高い密度であり、試料No.1、試料No.5、試料No.6、試料No.8でも比較的高い密度である。シバ属は、試料No.5を除く各試料で検出されているがいずれも低い密度である。タケ亜科ではネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型がすべての試料で、メダケ節型が試料No.7を除く各試料で検出されている。試料No.1、試料No.4さらに試料No.7でチマキザサ節型が比較的高い密度である以外はいずれもやや低いか低い密度である。

2) 天明泥流直下の黒色層下位の鉄分集積層(試料No.2)

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、シバ属、ネザサ節型、メダケ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が検出されている。ススキ属型とチマキザサ節型が高い密度であり、メダケ節型も比較的高い密度である。他はいずれも低い密度である。

3) 地山(試料No.3)

キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が検出されている。チマキザサ節型が非常に高い密度である以外はいずれも低い密度である。

5. 考察

1) 稲作跡の検討

植物珪酸体分析において稲作跡の探査や検証を行う場合、通常、イネの植物珪酸体が試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。なお、最近の調査では密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満であっても水田遺構が検出された事例が報告されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行う。

天明泥流直下の黒色層では、試料No.1、試料No.4および試料No.6でイネの植物珪酸体検出されている。このうち、試料No.1では植物珪酸体密度が2,400個/gと比較的高い値である。直上を天明泥流で覆われていることから、上層から後代の植物珪酸体が混入した危険性は考え

にくい。このことから、本試料が採取された地点では当該層において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。試料No.4では、植物珪酸体密度は1,800個/gであり、稲作跡の判断基準値に対しやや低い値である。ただし、本地点も天明泥流直下であることから上層から植物珪酸体が混入した危険性は考えにくい。したがって、ここでは試料採取地点もしくは近傍で稲作が行われていた可能性が考えられる。試料No.6については、植物珪酸体密度が600個/gと低いことから、他所から植物珪酸体が混入したとみられ、調査地点で稲作が行われていた可能性を積極的に肯定することはできない。試料No.5、試料No.7および試料No.8についてはイネの植物珪酸体検出されないことから、これらの試料が採取された地点では稲作が行われていた可能性は考えにくい。

天明泥流直下の黒色層下位の鉄分集積層(試料No.2)では、イネの植物珪酸体検出されている。植物珪酸体密度は600個/gと稲作跡の判断基準値に対し低い値である。上述のように直上が稲作層と考えられることから、ここで検出された植物珪酸体は、上層から後代のものが混入したものである可能性が高い。したがって、当該層において稲作が行われていた可能性は考えにくい。

地山(試料No.3)からはイネの植物珪酸体は検出されず、稲作の痕跡は認められない。

2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

ヨシ属は湿地あるいは湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育する。このことから、これらの植物の出現状況を検討することで、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。

推定生産量(第27図の右側)をみると、天明泥流直下の黒色層では、ヨシ属は低い値あるいは未検出である。一方、ススキ属型やチマキザサ節型は比較的高い値である。とくに試料No.7ではチマキザサ節型が優勢である。これらのことから、当該層の時期の調査地は比較的乾いた土壌環境であり、ススキ属やネザサ、メダケ、チマキザサおよびミヤコザサなどのササ類が生育していたと推定される。その下位の鉄分集積層(試料No.2)では、チマキザサ節型が多く、ススキ属型がこれに続く。このことから、当該層の堆積時の調査地は比較的乾いた土壌環境であり、チマキザサ節などのササ類とススキ属などが生育していたと推定される。

地山(試料No.3)ではヨシ属とチマキザサ節型が優勢であり、ヨシ属やチマキザサ節などのササ類が生育する湿潤や乾燥の混交するような土壌環境であったと推定される。

6. まとめ

西久保V遺跡において植物珪酸体分析を行った。その結果、天明泥流の直下では部分的に稲作が行われていたことが認められた。また、当該層は比較的乾いた土壌環境であったと推定された。天明泥流直下の黒色層下位の

鉄分集積層の時期は、調査地は比較的乾いた土壌環境であり、地山の時期は湿潤や乾燥の混じった土壌環境であったと推定された。

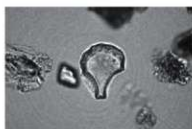
参考文献

- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社。p.189-213。
 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―。考古学と自然科学。9。p.15-29。
 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による 水田地の探査―。考古学と自然科学。17。p.73-85。

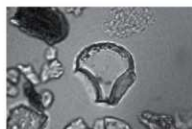
西久保V遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)



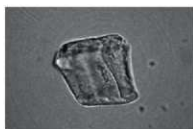
イネ(No.1)



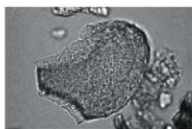
イネ(No.4)



イネ(No.2)



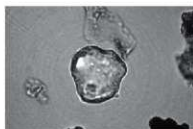
キビ型(No.1)



ヨシ属(No.3)



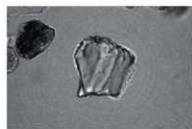
シバ属(No.1)



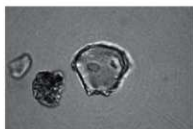
ススキ型(No.1)



ススキ型(No.4)



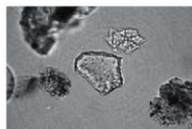
ネサザ節型(No.6)



メダケ節型(No.5)



チマキザサ節型(No.3)



ミヤコザサ節型(No.1)

50 μm

第6節 総括

1 天明泥流下の水田跡について

西久保V遺跡においては、1区第1面調査で、水田跡を確認している。第1面調査は、天明3年8月の浅間山噴火に伴う火山性泥流によって覆われた生活面の発掘調査である。周辺の天明泥流下の遺構としては、畑跡が常に中位段丘面や下位段丘面の遺跡では検出されている。浅間A軽石(As-A)が堆積したサクが等間隔に走行する様相は、当時の畑耕作に関わる農作業を彷彿させる動的な景観を示しており、他地域では見られない遺構として評

価されている。一方、水田跡に関しては下原遺跡跡に限られている。その中で、西久保V遺跡で水田畦畔と水田面を示唆する土層が検出され、天明期における当地区の水田耕作の広がりが想定された。しかしながら、前々節でも述べたが、本遺跡で確認された水田跡は土層の観察に止まり、平面的な施設例えば、畦畔の走行、水口、水田面の単位などを検出していない。その上で、補充調査として植物珪酸体の分析を委託し、前節に掲載したように、部分的な水田耕作が指摘されている。

ここでは、周辺遺跡でも行われていた植物珪酸体分析を検討し、本遺跡で検出された水田跡の可能性を高めておきたい。

植物珪酸体分析は周辺遺跡の天明泥流下畑跡を中心に

行われている。主な目的としては、天明期の畑で栽培されていたイネ科作物の同定である。しかしながら、畑跡の調査が蓄積し、様々な視点からイネ科作物の他にアサなどの経営作物が予想されたため、最近の発掘調査では植物珪酸体分析は行われていない。ここで掲載する各遺跡のデータも、畑跡が調査された当初の事例が多い。なお、各遺跡のデータは植物珪酸体の検出密度とおもな分類群の推定生産量を記した表に止め図は割愛している。また、表の内容もイネの検出密度が比較的高い例を優先した。

(1) 久々戸遺跡

平成7年に当地域で最初に天明泥流下の畑を調査し、植物珪酸体分析を行った遺跡である。畑作物の同定として、イネー陸稲などを想定した分析で、As-A直下72地点の試料が分析さ

第5-1表 長野原久々戸遺跡の植物珪酸体分析結果(群理文1998)
検出密度(単位: ×100個/g)

分類群(和名)	As-A直下検出															
	%2	%4	%14	%17	%22	%26	%31	%33	%35	%38	%39	%55	%57	%63	%72	
イネ科																
イネ	42	22	45	23	45	23	37	23	23	37	59	24	39	22	24	
オオムギ草(餅の表皮類)					8	15	7			7				8		
ヒエ属	7					8	7	8					8	8	7	
キビ草	35	7	15	31	15	23	22	15	38	7	15	31	87	45	39	
キビ草(エノコログサ属など)													24	39	15	
ジュズダマ属						15				8						
モロコシ属?												8			7	
ヨシ属	7	7	7	15			15	8	8					63		
ススキ属	21	7	7	8	68	8	15	53	23	37	22	71	47	52	71	
ウナギ草	111	44	97	38	173	192	126	210	210	194	185	361	291	193	189	
ウナギ草(大型)												7	8		7	
シバ属	7		15	8	15					22	67					
Aタイプ										7			8	16		
Bタイプ	7	22	7	8				15	15	7	15	16		15	8	
Cタイプ	14	7			8											
タケ草科																
ネギ草属							7			7	7					
タマザサ属	14	15	15	23	8		59	23	23	22	15	79	63	37	39	
マダケ属																
未分類等	29			8	8	31	45	23	38	15	22	141	55	55	8	
その他のイネ科																
表皮毛皮類	29	15	67	38	60	23	45	45	68	37	59	63	87	74	32	
棒状珪酸体	395	110	410	369	570	531	513	676	661	479	637	1053	976	908	999	
葉面珪酸体			15	8			15		8							
多角形板状(コササ属など)																
未分類等	693	338	507	508	510	515	661	594	610	486	497	951	968	945	725	
植物珪酸体総数	1413	602	1230	1093	1485	1384	1612	1691	1736	1369	1616	2853	2738	2389	1805	
モクレン科							7									
ニレ科				8												
ブナ科?	7	15	8													
イヌノ半属類																
ほめ形バズル草(ブナ属など)													8			
多角形板状(コササ属など)				8											7	
その他	7	7	7	8		15					7	8				
植物珪酸体総数	1413	602	1230	1093	1485	1384	1612	1691	1736	1369	1616	2853	2738	2389	1805	

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²・cm)

イネ	1.22	0.63	1.31	0.68	1.32	0.68	1.09	0.66	0.66	1.10	1.74	0.69	1.16	0.66	0.70
ヒエ属	0.58					0.65	0.62	0.63				0.66	0.66	0.63	1.32
ヨシ属	0.44	0.46	0.47	0.97			0.94	0.47	0.47				3.97		
ススキ属	0.26	0.09	0.09	0.10	0.84	0.10	0.18	0.55	0.28	0.46	0.28	0.88	0.59	0.63	0.88
ネギ草属							0.04			0.04	0.04				
タマザサ属	0.10	0.11	0.11	0.17	0.06		0.45	0.17	0.17	0.17	0.11	0.59	0.29	0.08	0.30

第3章 西久保V遺跡

れている(第5-1表 群理文1998)。その結果、試料39や試料14、22、2でイネの珪酸体密度が4000~5900と稲作に相当する数値が得られていることから、調査区のほぼ全域でイネが栽培されていたと考えられている。その後も当遺跡は数次にわたり調査され、植物珪酸体分析も数多く行われている。その中で、平成9年度調査で行った天明記流下面やAs-A直下層のデータにイネが集中する(第5-2表 群理文2003)。イネの珪酸体密度は600~

2300と比較的低い値だが、調査区全域での稲作が行われていたと推定している。久々戸遺跡は西久保V遺跡と同様に吾妻川右岸中位段丘面に位置する遺跡であり、左岸に比してやや日照が悪い地理的条件がある。そのような土地柄であっても、畑作でイネ(陸稲)が耕作対象物とされていたとする、注目すべき結果が示された。

(2) 横壁中村遺跡

吾妻川右岸中位段丘面に位置し、本遺跡からも近距離

第5-2表 久々戸遺跡の植物珪酸体分析結果(群理文2003)

分群(和名)	地点・試料					
	第0地点	第1地点	第4地点	第6地点	第11地点	第16地点
イネ科						
イネ	23	22	22	23	21	22
オオムギ属(籾の表皮層)	8					
ヒエ属		7	7			
キビ属		30	43	30	14	
ヨシ属		7	7	30	7	
ススキ属	8	37		23		
ウシクサ属	23	89	52	61	21	22
ウシクサ属(大型)			7		7	
シノ属	23	7		8		7
タケ科						
メダケ属						
ネザザ属		7		15		
クマザザ属	31	30	67	53	14	30
未分類等	15	89	142	136	28	45
その他のイネ科						
表皮毛高濃	15	30	7	8	14	15
移行珪酸体	122	589	337	416	162	134
葉部珪酸						
未分類等	244	558	539	560	246	253
草本起源						
はめぬハスル状(ブナ属など)	8					
その他		7				7
植物珪酸体総数	519	1495	1243	1362	534	536

分群(和名)	地点・試料					
	第0地点	第1地点	第4地点	第6地点	第11地点	第16地点
イネ	0.67	0.66	0.66	0.67	0.62	0.66
ヒエ属		0.62	0.63			
ヨシ属		0.47	0.47	1.91	0.44	
ススキ属	0.09	0.46		0.28		
メダケ属						
ネザザ属		0.04		0.07		
クマザザ属	0.23	0.22	0.51	0.49	0.11	0.22
タケ科の比率(%)						
メダケ属						
ネザザ属		14		15		
クマザザ属	100	86	100	85	100	100

第6表 横壁中村遺跡の植物珪酸体分析結果(群理文2003)

分群(和名)	地点・試料		29区	
	第1地点	第2地点	第3地点	第5地点
イネ科				
イネ	29	29	30	
ムギ属(籾の表皮層)	7	7		
ヒエ属				
キビ属	14	14		
ヨシ属	14			
ススキ属	22		7	
ウシクサ属	65	43	52	
タケ科				
ネザザ属				
クマザザ属	14			
ミヤコザザ属	7			
メダケ属	14	7		
その他のイネ科				
表皮毛高濃	14	14	22	
移行珪酸体	217	172	192	
葉部珪酸	310	293	302	
植物珪酸体総数	729	586	664	

おもな分群の推定生産量(単位: kg/nl・cm)

イネ	0.85	0.84	0.87
ヒエ属		0.60	
ヨシ属	0.91		
ススキ属	0.27		0.09
ネザザ属			
クマザザ属	0.11		
ミヤコザザ属			

第7表 尾坂遺跡の植物珪酸体分析結果(群理文2002)

分群(和名)	地点・試料		1号東北東部		東東区	
	縦断	横断	下部	下部	As-A	直下
イネ科						
イネ	20	52	15	6	22	18
ヒエ属		7	10	7		15
オオムギ属(籾の表皮層)						7
ヨシ属	13		22			6
ススキ属	33	26	36	6	29	12
シノ属		5	7	6		
タケ科						
ネザザ属	219	176	436	111	180	164
クマザザ属	65	16	109	37	30	49
その他	12	10	36	6	7	12
未分類等	358	363	472	353	654	296
プラント・オパール総数	722	659	1141	526	994	553

おもな分群の推定生産量(単位: kg/nl・cm)

イネ	0.57	1.53	0.43	0.18	0.64	0.54
ヒエ属	0.55	0.87	0.61	1.22	0.51	
ヨシ属	0.82		1.38			0.38
ススキ属	0.40	0.32	0.45	0.08	0.36	0.13
ネザザ属	1.03	0.85	2.09	0.53	0.87	0.79
クマザザ属	0.49	0.12	0.82	0.28	0.60	0.36

にある横壁中村遺跡でも、天明泥流下の畑跡で、2地点10試料と少量ながら植物珪酸体分析を行っている(第6表 群理文2003)。イネの珪酸体密度は3000個/gと比較的高く、横壁中村遺跡の天明泥流下畑跡では、イネ・ムギ類が栽培されていた可能性が指摘されている。

(3) 尾坂遺跡

吾妻川対岸の尾坂遺跡も中段段丘に位置し、段丘面全面から天明泥流下の畑跡が検出されたことで知られ、数次の調査が行われた。植物珪酸体分析は、調査初期の頃に12試料を対象に行われ、1箇所(1号畑北東部畝上部)から5000個/gを超える高い数値を得ている。このことから、稲作の可能性を高く評価している(第7表 群

理文2002)。尾坂遺跡の調査はその後段丘面全体に及び、天明泥流下畑跡が広く調査されている。その際、残念ながら植物珪酸体分析は行われていない。麻を中心とした経営作物を想定し、陸稲などがそれに加わると判断されたようである。

(4) 中棚Ⅱ遺跡

本遺跡対岸に中棚Ⅱ遺跡が位置する。吾妻川左岸の低位段丘面に立地する遺跡である。発掘調査は、平成11年度～平成13年度に行われ、近年も対象面積を広く、複数文化層を対象にしている。いずれも、天明泥流下の畑跡が調査されており、植物珪酸体分析は11地点24試料を対象としている(第8表 群理文2003)。その結果、1号畑、

第8表 中棚Ⅱ遺跡の植物珪酸体分析結果(群理文2003)
検出密度(単位:×100個/g)

分類群(和名)	地点・試料			20(2)期 SPA-A			1号畑			6号畑			7号畑			9号畑			10号畑			15号1号区畑		
	№1	№2	№4	№1	№3	№3	№1	№3	№3	№1	№3	№3	№1	№3	№3	№1	№3	№3	№1	№3	№3			
イネ科																								
イネ	19	27	22	44	20	28	21	35	43	36	43	35												
オオムギ類(籾の表皮細胞)	6	14	7																					
ヒエ属型			7				14																	
エノコログサ属型							7																	
キビ属型	13	14	22	22	7		21	7	7													42		
ヨシ属				7	15	7	14																	
ススキ属型	13	14	7	22	13	41	7		28	36	14	28												
ウシクサ属A	32	7	7	15	20	21	28	14	14	50	22	7												
シバ属	6	7	15				7	21	7	14												169		
ヒタイブ				7			7																	
タケ亜科																								
メタケ属型	6	14																				7		
ネギサ属型	39	34	29	30	7	14	7	35	35	7	22	21												
クマザサ属型	32	41	36	37	46	14	14	35	21	14	29	56												
ミヤコザサ属型	45	14	44	22	33	21	28	14	21	86	43	49												
マダケ属型	6	7																						
未分類等	19	7	51	30	13	28	14	21	28	7	14	28												
その他のイネ科																								
表皮毛細胞	6	41	29	37	33	48	7	42	21	14	29	7												
棒状珪酸体	206	156	203	215	196	131	176	154	191	100	94	113												
基部細胞	6	14	7																					
未分類等	367	305	349	333	417	323	346	335	362	329	260	374												
雑草科																								
フナ科(アカガシ亜属?)			7		7																			
マンサク科(イヌフキ属)			7		7																			
ほめ形ハズル科(ブナ属など)				15									7	14	7									
多角形細胞状(コナラ属など)																						7		
その他	13	14	22	30	7		14																	
植物珪酸体総数	838	739	886	860	828	709	727	699	801	701	599	967												
おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m ² ・cm)																								
イネ	0.57	0.80	0.64	1.31	0.58	0.81	0.62	1.03	1.23	1.03	1.27	1.04												
ヒエ属型			0.61				1.16			0.69														
ヨシ属			0.46	0.93	0.41	0.87				0.43	0.46													
ススキ属型	0.16	0.17	0.09	0.28	0.16	0.51	0.09			0.33	0.44	0.18	0.35											
メタケ属型	0.07	0.16								0.08														
ネギサ属型	0.19	0.16	0.14	0.14	0.03	0.07	0.03	0.17	0.17	0.03	0.10	0.10												
クマザサ属型	0.24	0.30	0.27	0.28	0.34	0.10	0.11	0.26	0.16	0.11	0.22	0.42												
ミヤコザサ属型	0.14	0.04	0.13	0.07	0.10	0.06	0.08	0.04	0.06	0.26	0.13	0.15												
タケ亜科の比率(%)																								
メタケ属型	12	24										16												
ネギサ属型	29	24	26	29	7	29	15	36	43	9	19	15												
クマザサ属型	38	46	50	57	73	45	47	56	41	27	41	63												
ミヤコザサ属型	21	6	24	14	21	27	38	9	16	65	24	22												

第9表 下田遺跡の植物珪酸体分析結果(群理文2002)
検出密度(単位:×100個/g)

分類群(和名)	地点・試料			A・B・A直下畑			1号畑			
	№1	№2	№3	№1	№2	№3	№1	№2	№3	
イネ科										
イネ				23			23			
イネの穂節(籾の表皮細胞)										38
オオムギ類(籾の表皮細胞)				8						6
ヒエ属型										
キビ属型				38			30			25
シメズダマ属				15						
ヨシ属				8			45			
ススキ属型				345			360			203
ウシクサ属				15						
ウシクサ属(大型)										
Aタイプ(複数)							8			
ヒタイブ										
タケ亜科										
ネギサ属型				30			11			38
クマザサ属型				60			120			60
マダケ属型										
未分類等				218			323			113
その他のイネ科										
表皮毛細胞				30			45			8
棒状珪酸体				855			900			765
基部細胞							15			
未分類等				870			743			736
雑草科										
ほめ形ハズル科(ブナ属など)							8			
その他										53
植物珪酸体総数				2513			2633			2183
おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m ² ・cm)										
イネ	0.60			0.66			0.66			0.88
ヒエ属型										0.63
ヨシ属				0.93						
ススキ属型	0.09			0.56						
ネギサ属型	0.14			0.07			0.14			0.18
クマザサ属型	0.45			0.09			0.45			0.45

7号畑、9号畑、10号畑、15号畑1号区画などで、イネの珪酸体密度が3000/gを超える比較的高い数値を示しており、稲作が行われていた可能性が高いとされている。また、本遺跡は別委託で植物珪酸体分析を行っており、それによれば、円形平坦面から得た試料からは稲藁堆肥の存在は低いとされ、V区51畑地点3からの高い珪酸体値から、局所的な遺集から敷き藁などの可能性も指摘されている。さらに、発掘調査では畑跡よりサトイモの石膏型を抽出しており、天明泥流下畑の栽培作物の多様性を示唆している。

(5) 下田遺跡

吾妻川左岸中位段丘面に位置する。平成7年の調査で、天明泥流下の屋敷跡1棟と畑跡が調査され、屋敷跡内の竈跡と畑跡で植物珪酸体分析試料6点を得ている。畑跡

からはイネ科の珪酸体数値が2300個/g、竈からは3000個/gと比較的高い数値を示した(第9表 群理文2003)。畑跡の数値はやや低いものの、稲作の可能性が示唆され、竈跡の数値からは、燃料の一部として落葉樹の葉とともに収穫後の稲藁が推定された。本遺跡の天明泥流下の畑跡は、屋敷の傍で営まれる小規模な畑と思われる、尾坂遺跡や、中棚遺跡に見る、経営作物を対象とした大規模な畑ではない。おそらく稲作が行われていたとしても、小規模な例であろう。しかし、当遺跡も最近の調査例が増え、当該期の遺構が確認され、畑跡も広域に調査されていることから、最終的には総合的な検討が必要な遺跡として注意を要する。

(6) 下原遺跡

吾妻川左岸低位段丘面にある遺跡である。平成12・13

第10-1表 下原遺跡の植物珪酸体分析結果(群理文2003)

分組群(和名)	地点・試料								
	Ⅱ区1号畑地点1			Ⅱ区1号畑地点2			Ⅱ区1号畑地点3		
	№1	№2	№3	№1	№2	№3	№1	№2	№3
イネ科									
イネ	17	50	29	36	22	21	13	21	20
オオムギ(籾の表皮・籾殻)	6	15	7				7	7	13
ヒエ属型	6	7		14	7	7	13	28	
エノコログサ属型						7		7	7
キビ属型		7	22	14	7		7	21	7
ヨシ属	6	7		14			7	7	20
ススキ属型		7					13	14	20
ウシクサ属A	22	36	36	36	22	21	13	56	47
ウシクサ属B									14
シバ属				22				7	
タケ科類									
メダケ属型									
ネギ科属型	17	7	22	22	7		33		7
クマザサ属型	22	28	22		29	21	7	28	13
ミヤコザサ属型	22	7	15	7	29	7	13	35	13
メダケ属型	6				7	7	7	7	7
ホトケ等	11	21		14	22	7	20	14	13
その他のイネ科									
表皮毛起源	44	14	22	7	14	14	13	21	27
穂状珪酸体	139	71	109	108	79	83	59	139	134
本分組等	217	199	174	187	179	173	138	251	221
雑木科類									
ほめ給ハズ(アザノ属など)					7		7		
その他(高野杉科)	6		7					7	
植物珪酸体総数	539	462	471	497	424	367	387	675	568

おもな分組群の推定生産量(単位: kg/m²・cm)

イネ	0.40	1.46	0.85	1.06	0.63	0.61	0.30	0.61	0.59
ヒエ属型	0.47	0.60		1.21	0.60		1.10	2.34	
ヨシ属	0.35	0.45		0.91		0.44	0.41	0.44	1.27
ススキ属型							0.16	0.17	0.25
ネギ科属型	0.08	0.03	0.10	0.10	0.03		0.16		0.03
クマザサ属型	0.17	0.21	0.16		0.22	0.16	0.05	0.21	0.10
ミヤコザサ属型	0.07	0.02	0.04	0.02	0.09	0.02	0.04	0.10	0.04
メダケ科の比率(%)									
ネギ科属型	26	13	34	83	10		64		19
クマザサ属型	53	79	52		64	88	30	67	58
ミヤコザサ属型	21	8	14	17	26	12	16	33	23

第10-2表 下原遺跡の植物珪酸体分析結果(群理文2007)

分組群(和名)	地点・試料					
	1号水田セクション			1号畑セクション		
	№1	№2	№3	№5	№1	№2
イネ科						
イネ	26	44	20	37	44	37
ムギ(籾の表皮・籾殻)	7					15
ヒエ属型						7
キビ属型	7	44	7			15
ヨシ属	20	29	27	15	29	44
ススキ属型	33	51	33	44	15	44
ウシクサ属A	7	7	20	15	15	15
ウシクサ属B						15
ジュズダマ属						
タケ科類						
メダケ属型	7	7	7			
ネギ科属型	20	22	27	30	29	37
クマザサ属型	33	29	27	13	29	22
ミヤコザサ属型	39	37	27	59	44	59
ホトケ等	66	103	13	74	15	22
その他のイネ科						
表皮毛起源	26	37	27		22	29
穂状珪酸体	256	287	166	178	124	375
雑木科類						
本分組等	486	544	478	383	409	529
雑木科類						
ほめ給ハズ(アザノ属など)	7					
多角形軌状(コナラ属など)	7					7
その他						
植物珪酸体総数	1045	1242	876	851	803	1263

おもな分組群の推定生産量(単位: kg/m²・cm)

イネ	0.77	1.30	0.59	1.09	1.29	1.08
ヒエ属型						0.62
ヨシ属	1.24	1.86	1.67	0.93	1.84	2.78
ススキ属型	0.41	0.64	0.41	0.55	0.18	0.55
ネギ科属型	0.08	0.09	0.08			
クマザサ属型	0.09	0.11	0.13	0.14	0.14	0.18
ミヤコザサ属型	0.25	0.22	0.20	0.11	0.22	0.17
メダケ科の比率(%)	0.12	0.11	0.08	0.18	0.13	0.18
タケ科類の比率(%)						
メダケ属型	14	16	16			
ネギ科属型	18	20	26	33	29	34
クマザサ属型	46	42	41	26	45	32
ミヤコザサ属型	22	21	16	41	27	34

第11表 上郷岡原遺跡の植物珪酸体分析結果(群理文2007)

分類群(地名)	水田面							円形平坦面				便槽
	№1	№2	№3	№4	№5	№6	№7	№8	№9	№10	№11	
イネ科												
イネ	37	20	44	28	14	43	34	42	61	46	27	7
イネ穂(葉の表皮組織)						6						
ムギ類(葉の表皮組織)	7	7		21		6	20	14	27	13		
ヒエ属								14				
キビ属	7	7	7	7		12	14	7	20	20	27	13
ヨシ属	7	26	209	14	14	31	14	14	20			
ススキ属	7	26	15	7	7			7	14	13	7	7
ウレクサ属A	44	7	36	21	29	50	20	49	47	13	34	20
ウレクサ属B	7			7	7							
タケ亜科												
メタケ属	7		7	7		6		14		7		
ネギヤシ属	169	111	87	170	94	87	61	119	183	130	47	
チマキヤシ属	15	26	15	21	29	12	7	14	14	26	14	20
ミヤコザシ属	95	33	87	71	22	43	34	28	27	26	14	46
マダケ属												
未分類等	66	46	44	85	51	43	27	14	47	46	7	20
その他のイネ科												
表皮毛組織	51	26	65	28	22	19	54	35	54	65	14	
珪状珪酸体	374	222	226	220	217	235	250	272	366	215	47	33
未分類等	403	262	378	446	375	328	344	468	495	442	217	143
樹木遺跡												
多角形板状(コナラ属など)												
その他	15	7	7	7					14	34	13	
植物珪酸体総数	1313	824	1048	1162	881	923	878	1125	1411	1099	455	209

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²・cm)

イネ	1.08	0.58	1.28	0.83	0.42	1.27	0.99	1.23	1.80	1.34	0.80	
ヒエ属								1.17				
ヨシ属	0.46	1.65	1.84	0.89	0.91	1.95	0.85	0.88	1.28			
ススキ属	0.09	0.32	0.18	0.09	0.09			0.09	0.17	0.16	0.08	0.08
メタケ属	0.09	0.08	0.08			0.07		0.16		0.08		
ネギヤシ属	0.81	0.53	0.42	0.82	0.45	0.42	0.29	0.57	0.88	0.62	0.23	
チマキヤシ属	0.11	0.20	0.11	0.16	0.22	0.09	0.05	0.10	0.10	0.20	0.10	0.15
ミヤコザシ属	0.29	0.10	0.26	0.21	0.06	0.13	0.10	0.08	0.08	0.08	0.04	0.14
タケ亜科の比率(%)												
メタケ属	7		10	6		10		18		8		
ネギヤシ属	63	64	48	64	62	59	66	62	83	64	62	
チマキヤシ属	9	24	12	13	30	13	11	11	10	20	27	52
ミヤコザシ属	22	12	30	17	9	18	23	9	8	8	11	48

年及び平成15・16年度に発掘調査が行われ、報告書も2冊(群理文2003・2007)が刊行されている。天明泥流下畑跡のほか、水田跡が検出されたことでも、注目されよう。植物珪酸体分析は、畑跡4地点11試料、水田跡2地点10試料が分析されている(第10-1表 群理文2003)・(第10-2表 群理文2007)。畑跡に関しては、多くの試料から、一定量のイネ科珪酸体が検出されており、3600個/gや5000個/gという高い数値も見られたことから、イネが栽培されていた可能性を高く捉えられている。一方、水田跡のイネ科珪酸体の検出密度も良好な地点で2000個/g～4400個/gと安定した数値を示し、稲作が行われていたとする見解が示されている。ただ、表には示していないが、同じ水田跡の他地点での検出密度は低く、生産性の低い水田の可能性もある。また、分析表に記された№5は極めて下層の試料であり、水田セクシヨ

ンからの試料としては不相当である。なお、本遺跡は平成29年度に発掘調査が行われており、天明泥流下の良好な水田跡を調査している。その際に、植物珪酸体分析を行い、イネ科珪酸体の検出密度は2300個/gとやや低い数値にとどまっている(群理文2019)。

(7) 上郷岡原遺跡

本遺跡より吾妻川下流にあたる東吾妻町上郷に所在する。吾妻川右岸の下位の段丘面に位置する。発掘調査は、平成14年度に行われており、天明泥流下の畑跡や水田跡、屋敷跡を良好な状態で検出した遺跡として知られる。

植物珪酸体分析は、水田面7試料、円形平坦面3試料、便槽2試料から採取された(第11表 群理文2007)。イネ科珪酸体の検出密度としては、水田面で1400個/g～4400個/g、円形平坦面が4200個/g～6100個/gと高い数値を得たことから、これらの遺構では稲作が行われていた可能性が高いと指摘している。なお、便槽の数値(700個/g～2700個/g)からは、周辺からの混入と捉えている。

上郷岡原遺跡は、吾妻川右岸に立地するとはいえ、段丘面は広く、そのため日照時間は確保されている。イネの検出密度が相対的に高い値を示すのも、畑あるいは水田の生産量が高いためと推定できよう。また、当遺跡では、調査された畑跡より「麻」と思われる植物遺体が検出されている。「麻」としての同定は、当時、麻を栽培していた岩島麻保存会の方々に見ていただいた得た結論である。このことから、上流部の各遺跡で調査された天明泥流下の畑跡の対象作物は「麻」である可能性が高まったのである。しかしながら、既に植物珪酸体分析でイネ科植物の珪酸体を検出されていることから、単一作物の栽培ではなく、複数の作物が対象になっていたとする見解が大勢を占めている。

吾妻川中流域の一連の発掘調査で得られた、植物珪酸体分析データを概観し、西久保V遺跡の水田跡で得た珪

酸体分析と比較してみた。その結果、西久保V遺跡水田跡のイネの珪酸体分析から得た検出密度は600～2400個/gであり、決して高くない数値を示している。分析では、局所的な稲作を示唆されているが、周辺遺跡の畑跡で得られたイネの検出密度と比較しても、低い値である。

しかしながら、下原遺跡で示したように、水田跡で得られたイネの検出密度は決して高くなく、第6-2表で示した検出密度からは、泥流下で2000個/gと本遺跡の数値と変わりはない。加えて、平成29年度調査で行った植物珪酸体分析でも、水田跡からの検出密度は2300個/gにとどまる例が示された。比較的高い数値を示す上郷岡原遺跡でも、畑跡にある円形平坦面に比して水田跡試料はやや低い傾向を見せている。

このことから、当時の水田の生産量は低く、畑作物への比重が高いものと判断できよう。代表的な畑作物が麻であり、イネやムギ類、サトイモなどが主ではないか。このように、当時の畑、水田のイネの産出量を概観すると、西久保V遺跡の水田跡も、生産量の低い水田として位置付けられる可能性がある。

植物珪酸体分析は、イネ科植物の同定と同時に、当時の植生と環境の推定も行う。先に述べた下原遺跡水田跡天明泥流下層下位の周辺環境として、ヨシ属が生育するような湿地的な環境としている。さらに、上郷岡原遺跡の水田跡においても泥流直下層堆積時はヨシ属などが生育する湿地的な環境を示唆している。一方、畑跡の植物珪酸体分析からは、例えば久々戸遺跡ではAs-A直下層の堆積時は、ススキ属やクマザサ属などが生育する比較的乾燥した堆積環境で、一部にヨシ属などが生育する湿地的な環境を指摘する。中朝Ⅱ遺跡においても、天明泥流下の調査区周辺ではススキ属やチガヤ属、シノ属などが生育する草原的な環境で、ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたとする。概ね、畑跡が検出された地点は、乾燥状態あるいは草原的な環境と推定されよう。

西久保V遺跡の植物珪酸体分析では「天明泥流の直下では部分的に稲作が行われていたことが認められた。また、当該層は比較的乾いた土壌環境であったと推定された。」としている。他の遺跡で調査された水田跡では、湿地的な環境であることから、本遺跡の水田跡はススキ属型やチマキザサ節型が優勢な乾燥状態の環境にあり、極

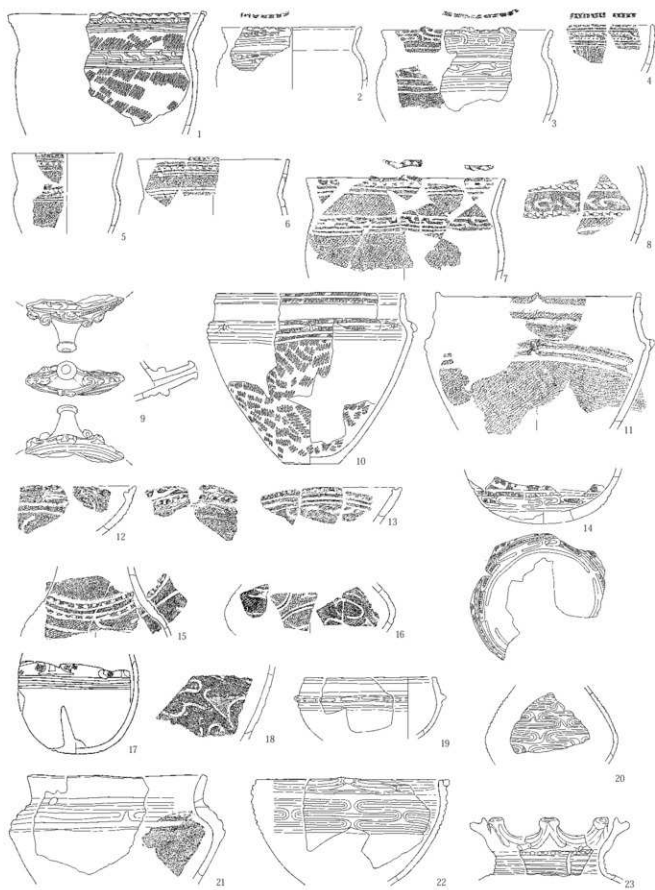
めて生産力の乏しい水田と推察される。

以上のように、西久保V遺跡で調査された水田跡の在り方を、植物珪酸体分析のイネ科検出密度から検討してみた。その結果、水田跡としての位置付けには慎重な検討結果となる。ただ本遺跡の水田跡イネ科の珪酸体検出密度は低い数値で、稲作の可能性が弱まる値だが、他遺跡で調査された水田跡との比較からは、遜色ない検出密度と捉えられた。また、同時に導き出される植生環境から、本遺跡は比較的乾燥状態にあった環境が予想され、生産力の低い水田と位置付けられよう。これは、吾妻川右岸という地理的条件から、日照時間が大いに関係すると思われる。さらに、急峻な斜面地形が広がる当地域においては、水利及び水温の調整が安定せず、水田におけるイネの生産量は低くなったと考えられよう。本遺跡の水田跡は、当地域の生産量の低い水田を具体化した姿として位置付けられよう。本遺跡のみならず、周辺でもイネ栽培は水田に頼らず陸稲などに傾斜したのではない。周辺遺跡に見る広域な畑の展開は、経営作物である麻を中心として、陸稲やソバ、サトイモなどの多毛作や輪作が積極的に行われていたと位置付けておきたい。同時に、下原遺跡や本遺跡のように、生産性の低い水田ながら、水稲も栽培されていた事例は重視しておきたい。

2. 縄文時代晩期土器について

平成28年度Ⅱ区第2面目の調査において、縄文時代中期前葉から弥生時代中期に比定される土器資料がまとまって出土した。本書では57区遺物集中分布として、意図的な廃棄行為を伴った遺構として位置付けた。これは、隣接する西久保Ⅰ遺跡において縄文時代中期後葉の資料が充実する様相に反して、本遺跡では、当該期の土器の出土量が貧弱であり、このことから、廃棄箇所への選択行為が想定されたためである。

また、当地点では縄文時代晩期や弥生時代中期の資料も出土しており、横壁西久保地区では、希少例として位置付けられよう。特に晩期資料の大洞B式土器(第24図43)は、当地域では異系統土器であり、単独の出土自体が極めて希少である。竪穴遺構出土ではなく、遺物の一括性に乏しい状況であるが、上記のような希少性から、注意を払っておきたい。周辺遺跡では、大洞B式土器は横壁中村遺跡で報告されているのみで、極めて重要な



第28図 横壁中村遺跡29区出土の大洞式系土器

出土例と捉えられよう。

ここでは、横壁中村遺跡で出土した大洞B C式土器を中心に掲載し、当地域の東北系異系統土器の様相を提示し、今後の該期資料の充実を図りたい。

横壁中村遺跡は縄文時代中期～後期の大型集落跡として著名であるとともに、縄文時代晩期資料も多く出土している。現状のところ当地域で主体となる晩期包蔵地として位置付けられている。近年、川原湯地区の石川原遺跡や東吾妻町唐堀遺跡で晩期集落跡が調査されたため、将来的には、両遺跡が晩期を代表する遺跡となるだろう。しかしながら、横壁中村遺跡と、両遺跡との関係性を考えることによって、当時の集落間の連携様相をうかがい知ることができるものである。

横壁中村遺跡でも、多くの晩期資料が出土しているが、その多くが包含層出土であり、明確な遺構出土例は少ない。その中で第28図1は29区47号配石遺構出土(群理文2010)の深鉢で、大洞B C式土器と位置付けられよう。残念ながら後期前葉～後葉の破片資料が伴出するため、一括性には乏しい。口縁部と頸部屈曲部に羊歯状文などが配される。また、17・18は29区16号配石遺構出土資料で、安行3 a式に比定される赤彩台付鉢や注口土器、後期後半の粗製深鉢などが伴出している。安行3 a式との共伴は注意しておきたい。17は体部下半のみの残存のため判然としなが、大洞C 1式あるいはC 2式に比定されよう。18は赤彩が縄文施文部に加わる。その他の2～16、19～23は29区遺構外出土土器(群理文2013)である。29区は、横壁中村遺跡調査区北西部にあたり、北側が吾妻川河川岸に削られる地点である。後期中葉以降の住居や配石遺構などが集中して調査されている。晩期出土土器は前半期の資料が多く、佐野式を主体とし、天神原式などを見る。2・3、5～7は1と同様に、口唇部に刻みを施し、口縁部と頸部屈曲部に羊歯状文や小クラク文などが横位に配されている。横壁中村遺跡の大洞B C式に関しては、頸部屈曲する器形も特徴的である。関東系の深鉢との相互の影響であろうか。4は屈曲を持たない器形、8は体部破片で変形したC字文や三叉文が横位に連なる。9の注口土器も羊歯状文が施され、器形もやや扁平である。胎土も緻密であり、精製土器として搬入品の可能性もある。大洞B C式であろう。10～17は大洞C 1式あるいはC 2式を集めた。10・11の深鉢は

頸部に小突起を付す大洞C 2式であろうか。12～14は鉢、15～17は壺であろう。19～22は型式判断が難しいが、大洞系と目された資料である。C 1式あるいはC 2式に相当するか。19・21・22は鉢、20は壺である。20・22の工字文が特徴的である。23の壺も型式判断は難しく、報告書ではA 1式とされている。検討を要しよう。

このように、西久保V遺跡で出土した大洞B C式の類例として、横壁中村遺跡29区出土土器を挙げた。羊歯状文などを指標として、大洞B C式を選んだため、漏れや誤認もあると思われる。おそらく、本遺跡の例と併せて大洞B C式後半からC 1式やC 2式に量的なピークが予想された。また、広域に分布が認められる大洞式の中で、とりわけ大洞B C式が利根川の1支流である吾妻川流域にまで分布範囲を広げていた様相は提示できたと思う。

当地域の縄文時代研究は、中期～後期資料が主体となっており、晩期研究は緒についたばかりである。現段階で詳細は述べる状況ではなく、今後の調査の進展に伴い、様々な視点が提示されるものと期待したい。1個体ではあるが、本遺跡の大洞B C式土器が類例資料の1個体ともなれば幸いである。

参考文献

- 1 群理文1998『Ⅱ-植物珪酸体分析』『長野県久々戸遺跡』26-37
- 2 群理文2002『第2部 植物珪酸体・プラント・オパール分析』『八ッ場ダム発掘調査集成(1) 一東宮・石畑・川原湯遺跡・横壁中村・西久保1・山根田・下田・花畑・楡木Ⅲ・尾坂・三平1・二社平・林の跡塚・上原1遺跡-』pp.237-262
- 3 群理文2003『2 植物珪酸体分析』『久々戸遺跡・中継Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』pp.251-272
- 4 群理文2007『第2部 下原遺跡における植物珪酸体分析』『下原遺跡Ⅱ』pp.160-166
- 5 群理文2007『2 植物珪酸体(プラント・オパール)分析』『上郷岡原遺跡(1)第4分冊 自然科学分析編』pp. 9-14
- 6 群理文2010『横壁中村遺跡(11)』
- 7 群理文2013『横壁中村遺跡(12)』

遺物観察表

出土位置：採回し番号が記された遺物は、平面位置と断面位置を記した。ただし、調査記録が無い場合はこの限りではない。

胎土：土器の夾雑物を記した。詳細は下記の胎土分類表による。

石材：石器、石製品の石材名を記した。

計測値：土器は口径・底径・高さに基づいて残存した部位から計測した。±以下の複元値は()で記した。破片資料の現存値は記していない。石器は長さ・幅・厚さ・重量を計測し、欠損品は現存値を()で記した。

特徴：器形・形態など出土遺物の特徴を主に記した。縄文土器、弥生土器は器形、文様構成を主として記載で、文様要素、原体を併記した。陶磁器類の色調は断面色調、特徴は器形、外面意匠を主に記した。

備考：縄文土器、弥生土器は時期の目安として、型式名や前期、中期、後期などの大凡の段階を記した。陶磁器類も大凡の時期を記した。

第12表 西久保V遺跡 縄文土器の胎土分類

分類	夾雑物の特徴	備考
A	A1 中量の長石礫・粗砂や雲母粗・細砂と少量の円磨度の進んだ灰白色岩片粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	雲母を主体に含有するグループ
	A2 中量の長石や円磨度の進んだ灰白色岩片・輝石と少量の珪質乳白色・赤色岩片、角閃石・石英および微量の雲母の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A3 中量の長石と少量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片や雲母・輝石・石英を含むやや緻密な胎土。	
	A4 中量の円磨度の進んだ花崗岩礫・粗砂と少量の雲母・長石・角閃石・石英と珪質乳白色・灰白色・赤色岩片の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A5 多量の円磨度の進んだ花崗岩や中量の石英の礫・粗砂と少量の長石・赤色岩片および微量の雲母・輝石・角閃石の粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。	
	A6 多量の雲母(最大径3mm)や長石の礫・粗砂と少量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片および石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A7 多量の長石礫・粗砂や雲母粗・細砂と少量の石英粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A8 多量の長石礫・粗砂と中量の雲母粗・細砂や少量の赤色岩片粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。	
	A9 多量の長石や中量の雲母、少量の灰白色・赤色岩片と微量の角閃石の粗・細砂および中量の石英礫・粗砂を含むやや緻密な胎土。	
	A10 多量の長石や少量の雲母と石英・輝石および灰白色・赤色岩片の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
B	B1 少量の円磨度の進んだ結晶片岩・赤色岩片や珪質乳白色・黒色岩片の礫・粗砂と少量の長石・輝石・角閃石の粗・細砂および少量の雲母細砂を含む緻密な胎土。	結晶片岩を主体に含有するグループ
	B2 中量の円磨度の進んだ珪質乳白色・黒色岩片の礫・粗砂や赤色岩片粗・細砂と少量の結晶片岩粗・細砂および微量の雲母細砂を含む緻密な胎土。	
	B3 多量の円磨度の進んだ結晶片岩や中量の珪質乳白色岩片の礫・粗砂と少量の灰白色・赤色岩片、輝石・石英の粗・細砂および中量の雲母細砂を含むやや緻密な胎土。	
	B4 多量の円磨度の進んだ結晶片岩・珪質乳白色岩片や中量の赤色・黒色岩片の礫・粗砂と少量の灰白色岩片・長石・輝石の粗・細砂および少量の雲母細砂を含むやや粗雑な胎土。	
	B5 多量の円磨度の進んだ珪質乳白色岩片や少量の結晶片岩・黒色岩片の礫・粗砂と少量の長石・輝石の粗・細砂および多量の雲母細砂を含むやや粗雑な胎土。	
C	C1 中量の円磨度の進んだ輝石・長石や少量の珪質乳白色・灰白色・赤色岩片と石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	輝石や角閃石等を主体に含有するグループ
	C2 多量の円磨度の進んだ輝石と中量の灰白色・赤色岩片や長石および少量の石英の粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。	
	C3 多量の円磨度の進んだ輝石粗・細砂と中量の灰白色岩片礫・粗砂や長石粗・細砂および少量の珪質乳白色・赤色岩片、石英の粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。	
E	E1 少量の円磨度の進んだ灰白色・赤色・珪質乳白色岩片や輝石・長石・角閃石・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。	灰白色・珪質乳白色・赤色岩片や長石・輝石・石英、角閃石等を含有するグループ
	E2 中量の円磨度の進んだ珪質乳白色岩片や少量の灰白色岩片の礫・粗砂と少量の輝石粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	E3 中量の円磨度の進んだ灰白色岩片の礫・粗砂や長石・輝石の粗・細砂と少量の赤色岩片・角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	E4 中量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片の礫・粗砂や少量の珪質乳白色岩片・長石・輝石・角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	E5 中量の円磨度の進んだ石英の礫・粗砂や多量の灰白色岩片や少量の長石・角閃石・赤色岩片の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	E6 多量の円磨度の進んだ灰白色岩片や中量の黒色岩片の礫・粗砂と中量の長石および少量の赤色岩片・角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	E7 多量の円磨度の進んだ灰白色岩片や中量の長石・輝石・赤色岩片と少量の珪質乳白色岩片・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	E8 多量の円磨度の進んだ灰白色岩片や中量の黒色岩片と少量の長石・輝石・石英・赤色岩片の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
	E9 多量の円磨度の進んだ灰白色岩片や中量の珪質乳白色・赤色岩片の礫・粗砂と少量の長石・輝石・石英の粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。	
	E10 多量の珪質黒灰色岩片や少量の円磨度の進んだ灰白色岩片の礫・粗砂と少量の珪質乳白色・赤色岩片および石英の粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。	
F	F1 中量の円磨度の進んだ長石・輝石や少量の灰白色・赤色岩片と石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	長石を主体に含有するグループ
	F2 中量の長石・輝石の粗・細砂や円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片の礫・粗砂と少量の石英粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	F3 中量の長石・輝石や少量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片と石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	F4 多量の長石や中量の円磨度の進んだ輝石・灰白色岩片と少量の赤色・黒色岩片・石英および微量の角閃石の粗・細砂を含む粗雑な胎土。	
	F5 多量の長石や中量の円磨度の進んだ輝石と少量の珪質乳白色・灰白色・赤色岩片および石英の粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。	
	F6 多量の長石や中量の円磨度の進んだ珪質乳白色・灰白色岩片と少量の赤色・黒色岩片および角閃石・石英の粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。	
	F7 多量の長石や中量の円磨度の進んだ灰白色岩片と少量の珪質乳白色・赤色岩片および輝石・角閃石・石英の粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。	
	F8 多量の長石や中量の角閃石と円磨度の進んだ灰白色岩片および少量の赤色岩片・石英の粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。	
	F9 多量の長石や円磨度の進んだ灰白色岩片と中量の輝石および少量の赤色岩片・角閃石・石英の粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。	
	F10 多量の長石や円磨度の進んだ輝石と少量の灰白色岩片の粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。	
	F11 多量の長石や中量の円磨度の進んだ灰白色岩片と少量の珪質乳白色岩片・角閃石・石英の粗・細砂および中量の赤色岩片礫・粗砂を含むやや緻密な胎土。	
F12 多量の長石や少量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片と角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。		

凡例

※各分類はルーベ等を使用した肉眼観察による相対的なものである。

※夾雑物の粒径分類については「新版 標準土色観」の「土壌調査用チャート」に準拠した。

遺物観察表

第13表 遺物観察表(中世～近世)

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第17図 PL.17	1	肥前磁器 皿	A区 口縁部1/4	口底 — 高 —	白	口縁部は輪花に作る。内面は植物文。外面は唐草文。透明釉は部分的に白濁。	17～18世紀 前半	
第17図 PL.17	2	瀬戸・美濃 陶器すり 鉢	I区 口縁部片	口底 — 高 —	灰白	外面口縁部以下は回転造削り。内面下位まですり目。内外面に磨輪。	江戸時代	
第17図 PL.17	3	石製品 緑石?	完形	長幅 4.4 3.7	厚重 1.8 45.0	黒色安山岩	全体的に非常に滑らかであり細かい線痕が多数認められ体系的に研磨される。表裏面に淡黒色の部分が認められ墨の可能性もある。	石製研磨具 の可能性あり
第17図 PL.17	4	銭貨 寛永通寶	黒色土 ほぼ完形	縦横 0 厚 0 厚 0 0			古寛永。面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭。背の郭が縦長の長方形を呈する。	近世

第14表 57区遺物集中分布出土遺物観察表(縄文～弥生時代)

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第22図 PL.17	1	縄文土器 深鉢	口縁部破片		A6	双溝状の波状口縁で、平坦な左頂部には刺突を加える。波状下部には「コ」字状の彫付文を施す。内面横位磨き。	阿玉台1a式
第22図 PL.17	2	縄文土器 深鉢	口縁部破片		A7	平瀬状の口唇部。口縁部に角稜文を楕円形状に施す。内面横位磨き。	阿玉台1b式
第22図 PL.17	3	縄文土器 深鉢	胴部破片		A7	ヒダ状圧痕を挟んで2条の角稜文を横位に施文。内面横位磨き。	阿玉台1b式
第22図 PL.17	4	縄文土器 深鉢	口縁部破片		A1	内削ぎ状の口唇部。口縁部にC字状の隆帯を彫付し、角稜文を楕円形状に施す。内面やや被熱風化。	阿玉台1b式
第22図 PL.17	5	縄文土器 深鉢	口縁部破片		A6	口縁部に平截竹管状具の平行結節沈線で楕円形状区画文を施し、区画内に同具の横位波状文を施文。下位に断面三角形の横位隆帯文や平截竹管状具の波状文を施す。内面横位磨き。外面被熱風化・荒れ。	阿玉台II式
第22図 PL.17	6	縄文土器 深鉢	口縁部破片		A8	波状口縁の波頂下に粘土棒の芯材を埋10mm前後の2枚の粘土帯で被覆した小突起が並下し、その右側には曲線隆帯の区画内に沿って2条単位の角稜文を施すが、左側も同様に。内面やや被熱風化、一部に煤炭灰化物付着。	阿玉台II式
第22図 PL.17	7	縄文土器 深鉢	口縁部破片		B3	内削ぎ状に肥厚する口唇部。波状口縁か。波状の隆帯文に沿って平行沈線文や、その区画内に段状具の連続孔形文を施文。内面一部著しい被熱風化・剥落。	勝飯3式
第22図 PL.17	8	縄文土器 深鉢	胴部破片		B5	隆帯の楕円区画文や波状文を施し、その内側縁に段状具の連続孔形文を、区画内には角稜文や三叉状彫刻文を施文。内外面共に著しい被熱風化・荒れ、一部剥落。	勝飯2式
第22図 PL.17	9	縄文土器 深鉢	口縁部破片		E10	口唇部外縁が「く」字状に突出する内凹形状の深鉢土器。口縁から胴部にかけて平截竹管状具の縦位集合沈線文を施す。	勝飯3式
第22図 PL.17	10	縄文土器 深鉢	胴部破片		F9	棒状具の3条単位の単沈線で渦巻文や垂懸文を施す。内面横位磨き。外面被熱風化・荒れ。	加曾利E1式
第22図 PL.17	11	縄文土器 深鉢	胴部破片		F10	器糸文Lを縦位施文し、幅広の隆帯文内に内凹状の沈線文を背削り状に施す。外面やや被熱風化。内面煤炭灰化物付着。	曾利1式
第22図 PL.17	12	縄文土器 深鉢	胴部破片		A9	蛇行状の隆帯垂懸文を施し、段状具の横位沈線文を集合的に施文。内面被熱風化・荒れ。	唐草文土器 系
第22図 PL.17	13	縄文土器 深鉢	胴部破片		E9	波状口縁。断面三角形の隆帯文を口縁部は横位、胴部は縦位に施し、その交点は内凹状に施文。内外面共に著しい被熱風化・荒れ。	称名寺II式
第22図 PL.17	14	縄文土器 深鉢	口縁部破片		C3	断面三角形の隆帯文を口縁部は横位、胴部は逆D字状に施す。内外面共に著しい被熱風化・荒れ。外面煤炭灰化物付着。	称名寺II式
第22図 PL.17	15	縄文土器 深鉢	口縁部破片		F2	口唇部に小突起を付し、削面状の押圧を施す。口縁部に断面三角形の隆帯文を横位施文。内外面共にやや被熱風化。内面一部剥落。	称名寺II式
第22図 PL.17	16	縄文土器 深鉢	口縁部破片		F8	口縁部に断面三角形の隆帯文を横位施文。外面口縁部縦位・胴部縦位の粗い磨き。内面横位の段帯で段を残す横位磨き。内外面共にやや被熱風化。	称名寺II式?
第22図 PL.17	17	縄文土器 深鉢	口縁部破片		F11	胴部に棒状具のY字状の沈線区画文を施し、上方からの同具の刺突文を充填施文。内面横位磨き。	称名寺II式
第22図 PL.17	18	縄文土器 深鉢	口縁部破片		E7	2条の単沈線文を横・斜位に施す。内面は砂粒の移動痕を残す撫で状の横位磨き。	堀之内1式
第22図 PL.17	19	縄文土器 深鉢	口縁部破片		E5	く字状の内折する口唇部にC字状の隆帯文を施し、刺突文や沈線文を付加する。内面横位磨き。	堀之内1式
第22図 PL.17	20	縄文土器 深鉢	口縁部破片		C3	波状口縁か。口唇部は無文であり、くびれ部に内凹状の幅広沈線文を横位に施し、以下にL R横文を縦位に施文か。内面著しい被熱風化・荒れ。	堀之内1式
第22図 PL.17	21	縄文土器 深鉢	口縁部破片		F6	口縁部に鎖状隆帯文を横位に施す。内外面共に被熱風化・荒れ。	堀之内1式
第22図 PL.18	22	縄文土器 深鉢	口縁部破片		A2	口縁部に鎖状隆帯文を横位に施す。内面横位磨き。内外面共に一部被熱風化・荒れ。	堀之内1式
第22図 PL.18	23	縄文土器 深鉢	口縁部破片		C1	口縁部に鎖状隆帯文を横位に施す。内外面共に被熱風化・荒れ。	堀之内1式

採 掘 Pl.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第23回 PL.18	24	縄文土器 深鉢	口縁部-胴 部中位2/5				A2	4単位の波状口縁。口縁部に単沈線文や楕円状区画文・刺突文等を備す。括れ部-胴部は8字状附付文や沈線区画文を施し、L R縄文を充填施文。内外面共に被熱風化・荒れ、一部に炭状炭化物付着。	属之内1式
第23回 PL.18	25	縄文土器 深鉢	口頸部1/2				F5	中空状や捻転状の内環突起を4単位に配した波状口縁。頸部にC字・8字状の隆線文と刺突文を備す。内外面共に著しい被熱風化・荒れ、一部剥落。	属之内1式
第23回 PL.18	26	縄文土器 深鉢	口縁部破片				F4	括れ部に8字状附付文を施し、胴部の沈線丁字文の外縁部にR L縄文を充填施文。内外面共に被熱・荒れ。	属之内1式
第23回 PL.18	27	縄文土器 深鉢	胴部破片				A4	4単位の単沈線大柄な斜格子状の隆線を構成。内面やや粗い横位磨き。	属之内1式
第23回 PL.18	28	縄文土器 深鉢	口縁部1/5				A5	無文の粗製深鉢土器。内外面共に砂粒の移動痕を残す様で横位横位磨き。	属之内1式
第23回 PL.18	29	縄文土器 深鉢	口縁部破片				C2	無文の粗製深鉢土器。内外面共に砂粒の移動痕を残す様で横位の横位磨き。	属之内1式
第23回 PL.18	30	縄文土器 深鉢	口縁部破片				E1	く字状に短く内折する口唇部。無文の口頸部や括れ部に刻み隆線文を施し、交点に8字状附付文を付す。内外面共に横位磨きで黒灰色を呈するが、外面は被熱風化・荒れ。	属之内2式
第23回 PL.18	31	縄文土器 深鉢	口縁部破片				E1	く字状に短く内折する口唇部の一部を内側に押し上げ、その内端に刺突文を施す。内面口唇部下に横線文。無文の口頸部に刻み隆線文をV字状に、括れ部は横位に施す。内外面共にやや被熱風化・荒れ。	属之内2式
第23回 PL.18	32	縄文土器 深鉢	口縁部破片				E6	く字状に短く内折する口唇部。口唇部から胴部上位に刻み隆線文をC字状に湾曲させて施す。内面横位磨き。外面やや被熱風化・荒れ。	属之内2式
第23回 PL.18	33	縄文土器 深鉢	口縁部破片				E3	内側にやや肥厚する口唇部。小波状口縁の波頂下に内形刺突文や縦位の刻み隆線文を施し、内面側には同心円状の環線文や刺突文を施文。内外面共に被熱風化・荒れ。	属之内2式
第23回 PL.18	34	縄文土器 深鉢	口縁部破片				E1	く字状に短く内折する口唇部。口縁に2条の横位隆線文を施し、その上面に細密なL R縄文を横位施文。内面丁寧な横位磨き。	属之内2式
第23回 PL.18	35	縄文土器 深鉢	口縁部破片				F1	く字状に短く内折する口唇部下に8字状附付文を付した刻み隆線文を施す。内面口唇部下に横線文。胴部は三角形の沈線区画文や入れ字状の沈線区画文を施し、やや細密なL R縄文を充填施文。内面丁寧な横位磨きと横位磨きで光沢のある黒灰色を呈する。	属之内2式
第23回 PL.18	36	縄文土器 深鉢	口縁部-括 部1/4				E1	いむゆる体部断面形状。口縁部に三角形の沈線区画文を施し、極めて細密なL R縄文を充填施文。内面口唇部下に横線文。内外面共に被熱風化・荒れ。炭状炭化物付着。	属之内2式
第23回 PL.18	37	縄文土器 深鉢	胴部破片				F7	く字状の沈線区画文や入れ字状の沈線区画文を施し、細密なL R縄文を充填施文。内外面共にやや被熱風化・荒れ。	属之内2式
第23回 PL.18	38	縄文土器 深鉢	胴部破片				E1	く字状の細沈線区画文内に細密なL R縄文を充填施文。内面丁寧な横位磨き。	属之内2式
第23回 PL.18	39	縄文土器 深鉢	底部2/3	底	7.0		A3	粗製深鉢土器。外底面に刺突文。外面縁部の移動痕を残す様で横位の粗い縦・横位磨き具磨き。内面横位磨き具磨き。内外面共にやや被熱風化。	後期前～中葉
第24回 PL.18	40	縄文土器 深鉢	底部完存	底	8.7		E2	粗製深鉢土器。外底面に刺突文。外面縁部横位磨きで、内面粗い斜位磨きで。内外面共に一部に炭状炭化物付着。	後期前～中葉
第24回 PL.19	41	縄文土器 深鉢	底部完存	底	11.2		A10	粗製深鉢土器。外底面に刺突文。外面粗い縦位磨きで、内面横位磨き。内外面共に被熱風化。一部に炭状炭化物付着。	後期前～中葉
第24回 PL.19	42	縄文土器 深鉢	胴部破片				E4	括れ部に横線文を施し、胴部に斜線文を施文。内外面共にやや被熱風化・荒れ。	加賀II2式
第24回 PL.19	43	縄文土器 深鉢	口縁部-胴 部中位1/2	口	21.0		E8	内側が狭く口唇部上面に筒状具の刻み目を施す。口縁部に環線文や入組文を施し、その上下限間に連続した刺突を施す。楕円状区画文を構成。胴部はL R縄文を横位・多段に施し、中位には細密なR縄文を横位施文。内面口縁部横位・胴部縦位の筒状具磨き。	大淵BC式併行
第24回 PL.19	44	縄文土器 深鉢	口縁部破片				F12	波状口縁。頸部に内環を開けた2条の横線文を施し、口縁部や胴部に縦位の細密な条痕文を斜位施文するが、羽状施文を意識した箇所も認められる。内面やや粗い横位磨き。	加賀II2式?
第24回 PL.19	45	弥生土器 深鉢	口縁部破片				B4	頸部の無文部を狭く口縁部と胴部上位に横線文を施し、L R縄文を充填的に横位施文して、横線文をなぞり返す。内面砂粒の移動痕を残すやや粗い横位磨き。内外面共に被熱風化・荒れ。	弥生中期
第24回 PL.19	46	弥生土器 深鉢	口縁部破片				B2	口頸部が内傾。無文の頸部を狭く口縁部に横線文を施し、下位に隆線文を横位に施す。内外面共にやや粗い横位の筒状具磨き。やや被熱風化。48・49と同一個体か。	弥生前期?
第24回 PL.19	47	弥生土器 深鉢	胴部破片				B2	細密な条痕文を縦位に施文。内面やや粗い横位磨き。内外面共にやや被熱風化。46等の胴部破片か。	弥生前期?
第24回 PL.19	48	弥生土器 深鉢	胴部破片				B2	胴部上位に張りを持つ深鉢土器で、単沈線の三角形進筒文を施す。内外面共にやや粗い横位磨き。やや被熱風化。46・49と同一個体か。	弥生前期?
第24回 PL.19	49	弥生土器 深鉢	胴部破片				B2	胴部上位に張りを持つ深鉢土器で、単沈線の三角形進筒文を施す。内外面共にやや粗い横位磨き。やや被熱風化。46・49と同一個体か。	弥生前期?
第24回 PL.19	50	弥生土器 甕	口縁部-胴 部中位1/4				E1	口唇部上面にL R縄文を施文。括れ部に等間隔に横帯進筒文を1帯、胴部上位に同波状文を2帯施す。下位には横帯進筒文または格子状に施文。施文員4mm。内面口縁部-胴部上位丁寧な横位磨き具磨き。胴部下位縦位磨き具磨き。外面胴部上位に炭状炭化物付着。	弥生中期

遺物観察表

種 図 PL No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第24図 PL.19	51	弥生土器 甕	口縁部破片				F5	帯揚の横帯文と波状文を交互・多段に施文。施文具5歯13mm。内外面共に焼熱風化・荒れ。	弥生中期
第24図 PL.19	52	弥生土器 甕	底部1/4				B3	底外面にやや大柄な網代痕。外面に横位の粗い条痕文を施し、底面端部がやや張り出す。内面撫で状の横位磨き。内外面共にやや焼熱風化、内面煤状炭化物付着。	弥生中期
第24図 PL.19	53	縄文土器 土器片加工 円板	完全	径 厚	3.1 0.9	重 9.5	F3	無文の深鉢土器破片を円形状に打割整形し、全周縁部に磨耗痕を持つ。	縄文時代
第24図 PL.19	54	弥生土器 片口土器?	胴部1/4				B1	胴部に方形状の沈線区画文を施し、細密なLR縷文を充填施文。内面指痕状の押圧痕を残す縦・斜位の撫で。土偶の可能性もある。	弥生中期
第24図 PL.19	55	石灘	4/5	長 幅	(2.5 1.9)	厚 重 0.6 1.8	黒色安山岩	表裏面の全面に面的な二次加工が認められる。先端及び基部欠損。	
第24図 PL.19	56	磨製石斧	ほぼ完形	長 幅	13.2 5.7	厚 重 2.9 6.2	黄玄武岩	全体的に滑らかであり丁寧に研磨整形される。先端対部の表裏面には先端方向からの割離痕が複数認められる。右側面の上方には敲打痕が認められる。	

写真図版



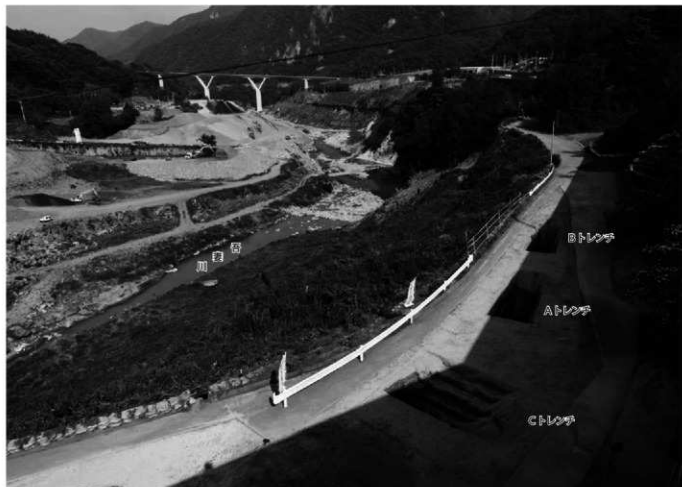
1 遺跡遠景 北から(横壁小倉地区 平成11年頃撮影) 1が西久保1遺跡、2が西久保V遺跡



2 西久保V遺跡遠景 北西から(平成28年撮影) 奥の○が西久保1遺跡



1 西久保1遺跡平成29年度調査範囲全景(吾妻川対岸・北東から)



2 遺跡遠景とA・B・Cトレンチ、写真上部の大きな橋は不動大橋(吾妻川上流・北西から)



3 A～Fトレンチ予定地の舗装道路撤去前(北東から)



4 A～Fトレンチ予定地の舗装道路撤去後(北西から)



5 C～Eトレンチ(南から)



6 Aトレンチ(北西から)



7 Aトレンチ(南西から)



8 Bトレンチ(北西から)



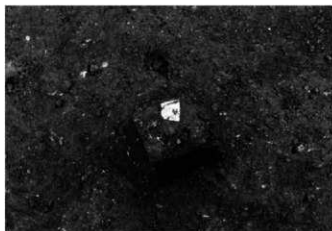
9 Bトレンチ(北西から)



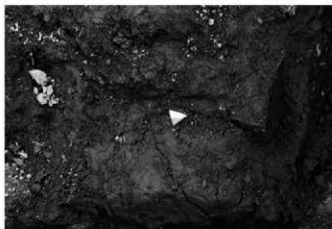
10 Bトレンチ土層断面(南西から)



11 Bトレンチ出土土師器破片No.1



12 Bトレンチ出土陶器破片No.2



13 Bトレンチ出土陶器破片No.3



14 Cトレンチ 中央にコンクリート板(南西から)



15 Cトレンチ 中央にコンクリート板(南東から)



16 Dトレンチ(南から)



17 Dトレンチ(西から)



18 Eトレンチ(北から)



19 Eトレンチ(西から)



20 Eトレンチ(西から)



21 Fトレンチ(南西から)



22 Fトレンチ(西から)



23 Gトレンチ(東から)



24 Gトレンチ(北から)



25 Hトレンチ(西から)



26 Hトレンチ(南西から)



27 Hトレンチ(南西から)



28 Iトレンチ(南西から)



29 Iトレンチ(南から)



30 Iトレンチ(南西から)



31 Jトレンチ(南西から)



32 Jトレンチ(南から)



33 Kトレンチ(南西から)



34 Kトレンチ(南西から)



1 Ⅰ区Ⅰ面全景 南から



2 Ⅰ区Ⅰ面全景 南から



3 Ⅰ区Ⅰ面全景 北西から



4 Ⅰ区Ⅰ面全景 北東から



5 Ⅰ区川砂が堆積する溝状の凹み 東から



6 Ⅰ区西壁土層 東から (水田面土層)



7 Ⅰ区西壁土層 東から (水田面土層)



8 Ⅰ区西壁土層 東から (水田面土層)



1 II区1面全景 西から



2 II区1面全景 北から



3 II区1面全景 南東から



4 II区1面全景 北東から



5 II区全景 東から



6 II区全景 東から



7 II区全景 東から



8 II区全景 南東から



1 調査風景 1区1面 西から



2 調査風景 1区1面 東から



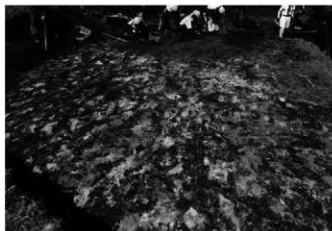
3 調査風景 1区1面 東から



4 調査風景 1区1面 南から



5 調査風景 1区1面 南から



6 調査風景 1区1面 南西から



7 調査風景 1区西壁植物珪酸体分析試料採取



8 1区西壁植物珪酸体分析試料採取状況 北東から



1 A区1面全景 東から



2 A区1面全景 南から



3 A区1面全景 南から



4 A区1面全景 南から



5 A区1面遺物出土状況 北から



6 調査風景 A区1面 南から



7 調査風景 A区1面 西から



8 調査風景 A区1面 西から



1 II区2面57区遺物集中分布 東から



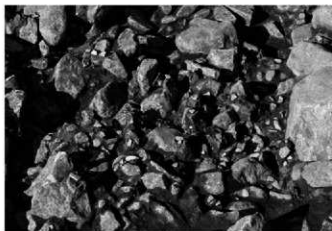
2 II区2面57区遺物集中分布 東から



3 II区2面57区遺物集中分布 西から



4 II区2面57区遺物集中分布 東から



5 II区2面57区遺物集中分布 東から



6 II区2面57区遺物集中分布 東から



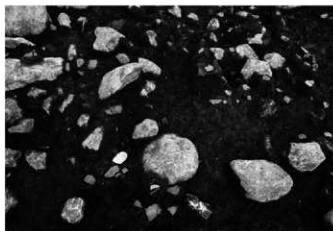
7 II区2面57区遺物集中分布 南から



8 II区2面57区遺物集中分布 南から



1 II区2面57区遺物集中分布 南から



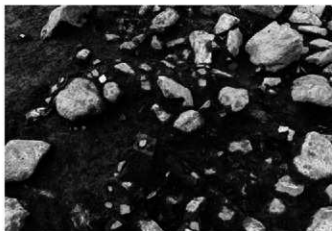
2 II区2面57区遺物集中分布 南から



3 II区2面57区遺物集中分布 南から



4 II区2面57区遺物集中分布 南から



5 II区2面57区遺物集中分布 南から



6 II区2面全景 南から



7 II区2面全景 南西から



8 II区2面全景 南から



1 調査風景 II区2面 南東から



2 調査風景 II区2面 東から



3 調査風景 II区2面 東から



4 調査風景 II区2面 南から



5 調査風景 II区2面 南から



6 調査風景 II区2面 南から



7 調査風景 II区2面 南から



8 調査風景 II区2面 南から



1 A区1号トレンチ全景 南西から



2 A区1号トレンチ近撮 南西から



3 A区2号トレンチ 北から



4 A区3号トレンチ 南から



5 A区3号トレンチ土層 北から



6 A区4号トレンチ 東から



7 A区5号トレンチ 北から



8 A区6号トレンチ 北から



1 A区7号トレンチ 東から



2 A区7号トレンチ土層 東から



3 A区8号トレンチ 東から



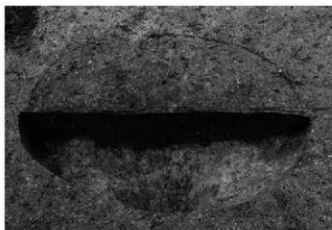
4 A区8号トレンチ土層 北から



5 A区7・8号トレンチ 東から



6 調査風景 A区7号トレンチ 東から



7 A区 69区1号土坑セクション 南東から



8 A区 69区1号土坑全景 南東から



1 調査風景 A区 西から



2 調査風景 A区 東から



3 調査風景 A区 南から



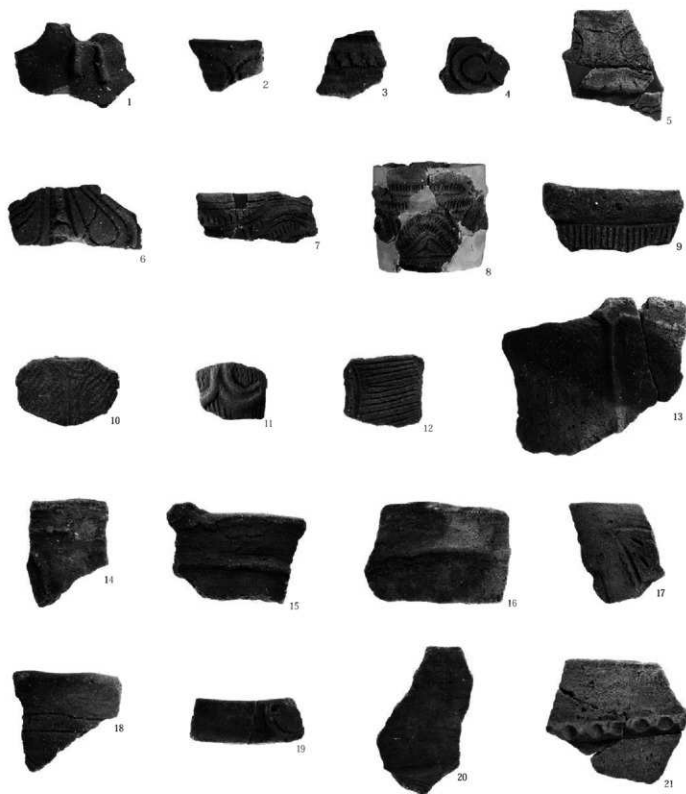
4 調査風景 A区 南東から



5 1区より吾妻川下流を臨む 西から



第1面出土遺物



Ⅱ区第2面 57区遺物集中分布出土遺物(1)





II区第2面 57区遺物集中分布出土遺物(3)

報告書抄録

書名(ふりがな)	にしくぼいちいせきかっこに・にしくぼいせき
書名	西久保1遺跡(2)・西久保V遺跡
副書名	ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	65
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	655
編著者名	中沢 悟・山口逸弘
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
発行年月日	201903**
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	にしくぼいちいせき
遺跡名	西久保1遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざよこかべ
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字横壁
市町村コード	10424
遺跡番号	31
北緯(世界測地系)	363233
東経(世界測地系)	1383943
調査期間	20170601-20170630
調査面積	2,254
調査原因	ダム建設
種別	包蔵地、集落
主な時代	縄文/弥生/平安/中世/近世
遺跡概要	平成10年・12年度に実施された集落遺跡の北側に位置する。試掘結果からも集落遺跡の存在が想定されていた遺跡である。
特記事項	
要約	焼土粒と炭の破片が出土したが、攪乱を受けており明瞭な遺構は残っていなかった。出土遺物は、江戸時代の陶器小破片2点、平安時代の土師器甕の小破片1点である。
遺跡名ふりがな	にしくぼいせき
遺跡名	西久保V遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざよこかべ
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字横壁
市町村コード	10424
遺跡番号	222
北緯(世界測地系)	363238
東経(世界測地系)	1383938
調査期間	20171001-20171031/20181001-20181130
調査面積	6,745
調査原因	ダム建設
種別	生産/集落
主な時代	縄文/弥生/中世/近世
遺跡概要	集落-縄文-遺物集中分布/弥生-遺物集中分布/近世以前-土坑1/近世-水田跡
特記事項	遺物集中分布からは、縄文時代晩期異系統土器である大洞BC式土器が出土している。吾妻川右岸中位段丘面に位置する。天明泥流下の水田跡と推定される箇所と下層で縄文時代
要約	中期前葉～弥生時代中期前葉の遺物集中分布を調査した。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第655集

西久保 I 遺跡(2)・西久保 V 遺跡

ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第65集

平成31(2019)年3月1日 印刷

平成31(2019)年3月14日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田1784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunma-ibun.org/>

印刷／ジャーナル印刷株式会社

